

一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書X

鳥取県西伯郡伯耆町

KANA MAWARI IE NO UE NO UTI  
金廻家ノ上ノ内遺跡  
KANA MAWARI  
KO SHIKI SAN  
越敷山古墳群 (金廻地区)

2013

財団法人 鳥取県教育文化財団

一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書X

鳥取県西伯郡伯耆町

KANA MAWARI IE NO UE NO UTI  
金廻家ノ上ノ内遺跡  
KANASHIKI SAN KANA MAWARI  
越敷山古墳群 (金廻地区)

2013

財団法人 鳥取県教育文化財団

## 序

近年、鳥取県では妻木晩田遺跡、青谷上寺地遺跡をはじめとする全国的にも注目されるような古代の重要な遺跡の発見が相次いでおり、それらの遺跡の調査成果に基づいて、当時の集落の姿や暮らしの様子が具体的に語られるようになります。こうした先人が残した素晴らしい地域の遺産である遺跡を後世に伝えることは、現在に生きる私たちの重要な責務です。

さて、西伯郡伯耆町において国道181号線（岸本バイパス）の道路改良工事が着々と進められているところでありますが、この事業に先立ち、当財団は、鳥取県から委託を受けて埋蔵文化財の発掘調査を実施しています。

このうち、平成23、24年度に調査を行った金廻家ノ上ノ内遺跡では、縄文時代の落とし穴や弥生時代の竪穴建物を確認しました。また、遺跡内にある越敷山古墳群（金廻地区）についても調査を行い、越敷山51号墳では5体の人骨が発見されたほか、副葬品も豊富に出土するなど、この地域の歴史を解明するための重要な資料を得ることができました。

そして、このたび、その発掘調査結果を報告書として上梓するはこびとなりました。この報告書が、今後、郷土の歴史を解き明かしていく一助となり、埋蔵文化財に対する理解がより深まることを期待しております。

本書をまとめるに当たり、鳥取県西部総合事務所県土整備局並びに地元関係者の方々には、一方ならぬ御指導、御協力をいただきました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成25年3月

財団法人 鳥取県教育文化財団  
理事長 井 上 善 弘

## 例 言

1. 本報告書は、鳥取県の委託により、財団法人鳥取県教育文化財団が、一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として、平成23、24年度に行った金廻家ノ上ノ内遺跡および越敷山古墳群（金廻地区）の発掘調査報告書である。
2. 本報告書に収載した遺跡の所在地および調査面積は以下のとおりである。

金廻家ノ上ノ内遺跡、越敷山古墳群（金廻地区）  
：鳥取県西伯郡伯耆町金廻字家ノ上ノ内21-2番地ほか  
調査面積：4,544.5m<sup>2</sup>（平成23年度：3,580m<sup>2</sup>、平成24年度：964.5m<sup>2</sup>）
3. 本報告書における方位は公共座標北を示し、X：、Y：の数値は世界測地系に準拠した公共座標第V系の座標値である。標高は海拔標高を示す。
4. 本報告書に掲載した地形図は、岸本町（現伯耆町）発行の1/2500地形図「岸本町全図」、および国土地理院発行の1/50,000「米子」を使用した。
5. 本調査は、平成23年度を財団法人鳥取県教育文化財団の野口、馬路、平成24年度は同財団の玉木が担当した。なお、両年度ともに株式会社埋蔵文化財サポートシステムの支援を受けた。越敷山49号墳、越敷山51号墳の人骨の取り上げおよび鑑定は鳥取大学医学部の井上貴央教授、石棺内の赤色顔料および石材の分析は岡山理科大学生物地球学部の白石純教授に協力いただいた。
6. 本報告書に掲載した遺構の図面作製は株式会社埋蔵文化財サポートシステムが行い、野口、馬路、玉木がこれを補佐した。出土遺物の実測・斬書は財団法人鳥取県教育文化財団調査室岸本調査事務所が行った。
7. 本報告書で使用した遺跡の写真撮影は株式会社埋蔵文化財サポートシステムが行い、遺物の写真は玉木が撮影した。
8. 本報告書の執筆と編集は玉木が行った。
9. 発掘調査によって作成された図面、写真などの記録類、出土遺物は鳥取県埋蔵文化財センターに保管されている。
10. 現地調査及び報告書作成にあたっては、下記の方々、機関に御指導、御協力いただいた。明記して深謝いたします（五十音順、敬称略）。

足立昭子、井上貴央、江田真穂、岡崎健治、財団法人米子市教育文化事業団、白石純、西部土地改良区、鳥取県教育委員会、伯耆町教育委員会、松原章範

## 凡 例

1. 遺物の注記における遺跡名には、「金廻11」(平成23年度調査分)、「金廻12」(平成24年度調査分)を略号とし、合わせて「遺構名、遺物番号」を記入した。

2. 本報告書で用いた遺構の略号は以下のとおりである。

SI：竪穴建物 SB：掘立柱建物 SS：段状遺構 SK：土坑、土坑墓、落とし穴

3. 発掘調査時における遺構番号と報告書記載時の遺構番号を変更している。新旧の遺構名・番号対照表は第1表に示した。

4. 遺物実測図の縮尺については、特に説明がない限り以下のとおりである。

土器：1/4、石器：1/2、金属製品：1/3、1/4、玉類・櫛：1/1

5. 本書における土層色調、土器色調は『新版 標準土色帳』による。

6. 遺物実測図に用いたトーンおよび記号は、特に説明がない限り以下のとおりである。

■：布付着範囲

7. 遺物実測図の断面は須恵器を黒塗り、それ以外のものは白抜きで示した。

8. 遺物観察表等の法量記載における※は推定復元値、△は現存値を示す。

9. 本報告書における遺構、遺物の時期決定は下記参考文献に基づいている。

### 参考文献

清水真一 1992 「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年－山陽・山陰編－』木耳社

清水真一 1978 「第IV章第1節土器論」「青木遺跡発掘調査報告書III」鳥取県教育委員会

牧本哲雄 1999 「第9章第1節古墳時代出土の土器について」『長瀬高浜遺跡Ⅷ・園第6遺跡』

鳥取県教育文化財団

# 目 次

序	
例言	
凡例	
第1章 調査の経緯と経過	
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 調査の方法と経過	1
第3節 調査体制	5
第2章 位置と環境	
第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	6
第3章 調査の成果	
第1節 遺跡の概要と層序	10
第2節 古墳の調査	18
第3節 古墳以外の調査	86
第4節 道構に伴わない遺物	105
第4章 自然科学分析の成果	
第1節 越敷山51号墳埋葬施設1の赤色顔料および石棺石材について	(白石 純) 106
第2節 金廻家ノ上ノ内遺跡から検出された人骨について	(井上貴央・松原章範・岡崎健治・江田真穂・足立昭子) 108
第5章 総括	
第1節 越敷山古墳群（金廻地区）について	121
第2節 まとめ	124
写真図版	
報告書抄録	

## 挿図目次

第1章			
第1図 調査地位置	2	第35図 越敷山77号墳墳丘除去後	40
第2図 調査区地割り模式図	3	第36図 越敷山77号墳墳丘断面	41
第2章		第37図 越敷山77号墳埋葬施設① ・出土遺物	43
第3図 遺跡位置	6	第38図 越敷山77号墳埋葬施設②	44
第4図 周辺遺跡分布図	8	第39図 越敷山49号墳	46
第3章		第40図 越敷山49号墳墳丘除去状況①	47
第5図 調査前地形図	11	第41図 越敷山49号墳墳丘除去状況②	48
第6図 第1造構面造構配置図	12	第42図 越敷山49号墳墳丘断面	49
第7図 第2造構面造構配置図	13	第43図 越敷山49号墳埋葬施設1①	51
第8図 土層断面位置	14	第44図 越敷山49号墳埋葬施設1②	52
第9図 調査区内土層断面	15	第45図 越敷山49号墳埋葬施設1③	53
第10図 地山堆積状況模式図	17	第46図 越敷山49号墳埋葬施設2①	54
第11図 越敷山121号墳	18	第47図 越敷山49号墳埋葬施設2②	55
第12図 越敷山121号墳遺物出土状況	19	第48図 越敷山49号墳出土遺物	56
第13図 越敷山121号墳出土遺物	20	第49図 越敷山51号墳検出状況	57
第14図 越敷山75号墳	21	第50図 越敷山51号墳	58
第15図 越敷山75号墳埋葬施設①	22	第51図 越敷山51号墳墳丘除去状況①	59
第16図 越敷山75号墳埋葬施設②	23	第52図 越敷山51号墳墳丘除去状況②	60
第17図 越敷山75号墳 遺物出土状況・出土遺物	24	第53図 越敷山51号墳墳丘除去後	61
第18図 越敷山76号墳	25	第54図 越敷山51号墳墳丘断面図①	62
第19図 越敷山76号墳遺物出土状況・ 埋葬施設①	26	第55図 越敷山51号墳墳丘断面図②	63
第20図 越敷山76号墳埋葬施設②	27	第56図 越敷山51号墳周溝断面図	65
第21図 越敷山76号墳出土遺物	28	第57図 越敷山51号墳埋葬施設1追葬時 掘り方	66
第22図 越敷山98号墳	29	第58図 越敷山51号墳埋葬施設1①	67
第23図 越敷山98号墳埋葬施設	30	第59図 越敷山51号墳埋葬施設1②	68
第24図 越敷山122号墳	32	第60図 越敷山51号墳埋葬施設1 石棺内人骨・遺物出土状況	69
第25図 越敷山122号墳埋葬施設①	33	第61図 越敷山51号墳埋葬施設1 石棺石材施溝状況	71
第26図 越敷山122号墳出土遺物	33	第62図 越敷山51号墳埋葬施設1 石棺調整測片散乱状況	72
第27図 越敷山122号墳埋葬施設②	34	第63図 越敷山51号墳埋葬施設2①	74
第28図 越敷山123号墳	35	第64図 越敷山51号墳埋葬施設2②	75
第29図 越敷山123号墳墳丘断面	36	第65図 越敷山51号墳埋葬施設2③	76
第30図 越敷山123号墳埋葬施設①	36	第66図 越敷山51号墳出土遺物①	77
第31図 越敷山123号墳埋葬施設②	37	第67図 越敷山51号墳出土遺物②	78
第32図 越敷山123号墳出土遺物	38	第68図 越敷山51号墳出土遺物③	79
第33図 越敷山77号墳検出状況	39		
第34図 越敷山77号墳	40		

第69図	越敷山51号墳出土遺物④	80
第70図	越敷山51号墳出土遺物⑤	81
第71図	越敷山99号墳	82
第72図	越敷山99号墳埋葬施設①	83
第73図	越敷山99号墳埋葬施設②	84
第74図	越敷山99号墳 遺物出土状況・出土遺物	85
第75図	SI1	87
第76図	SI1埋没状況模式図・出土遺物	88
第77図	SI2①	89
第78図	SI2②・埋没状況模式図	90
第79図	SI2出土遺物	90
第80図	SB1	91
第81図	SS1・2	92
第82図	SK1・2	93
第83図	SK3～7	95
第84図	SK8・9	96
第85図	SK10	97
第86図	SK11～16	98
第87図	SK17～19	99
第88図	SK20・21	100
第89図	SK22～27	102
第90図	SK28	103
第91図	遺構に伴わない遺物	104
第4章		
第92図	越敷山51号墳埋葬施設1石棺石材 および周辺露頭石材の偏光顕微鏡 写真(直交二コル)	107
第93図	越敷山49号墳埋葬施設1の人骨の 検出状況	108
第94図	越敷山51号墳埋葬施設1の人骨の 検出状況	111
第95図	越敷山51号墳埋葬施設2の人骨の 検出状況	115
第96図	人骨に付着した赤色顔料の 分析結果	117

## 挿表目次

第1表	新旧遺構対照表	
第3章		
第2表	越敷山51号墳墳丘盛土針貫入強度	65
第4章		
第3表	越敷山51号墳埋葬施設1 赤色顔料分析結果	107
第4表	越敷山51号墳埋葬施設1 石棺石材分析値	107
第5表	出土人骨一覧表	119
第5章		
第6表	越敷山古墳群(金廻地区)一覧	121

## 文中写真

写真1	調査地遠景	10
写真2	越敷山121号墳遺物出土状況	19
写真3	越敷山76号墳検出状況	26
写真4	越敷山76号墳埋葬施設検出状況	26
写真5	越敷山76号墳遺物出土状況	28
写真6	越敷山122号墳埋葬施設	33
写真7	越敷山123号墳遺物出土状況	38
写真8	越敷山77号墳埋葬施設	45
写真9	越敷山49号墳遺物出土状況	56
写真10	SI1 1層除去状況	86
写真11	SI2検出状況	88
写真12	SI2床面検出状況	88

## 図版目次

- |       |   |  |
|-------|---|--|
| PL. 1 | 越敷山49・51・77・99号墳(西から)   | 棺内完掘状況(西から)  |
| PL. 2 | 越敷山49号墳埋葬施設1<br>(南西から)  | 3. 越敷山76号墳埋葬施設<br>完掘状況(西から)  |
| PL. 3 | 越敷山51号墳埋葬施設1<br>(南西から)  | PL.16 1. 越敷山98号墳完掘状況(西から)<br>2. 越敷山98号墳埋葬施設<br>検出状況(西から)   |
| PL. 4 | 越敷山51号墳埋葬施設2<br>(北東から)  | 3. 越敷山98号墳埋葬施設<br>棺内完掘状況(西から)  |
| PL. 5 | 1. 越敷山51号墳墳丘断面<br>(南北ベルト、西から)<br>2. 越敷山51号墳墳丘断面<br>(南北ベルト北側、南西から)<br>3. 越敷山51号墳墳丘断面<br>(南北ベルト中央、南西から)<br>4. 越敷山51号墳墳丘断面<br>(南北ベルト南側、南西から) | PL.17 1. 越敷山98号墳埋葬施設<br>完掘状況(西から)<br>2. 越敷山122号墳検出状況(南から)<br>3. 越敷山122号墳埋葬施設<br>検出状況(南から)  |
| PL. 6 | 越敷山51号墳埋葬施設1 出土遺物   | PL.18 1. 越敷山122号墳完掘状況(西から)<br>2. 越敷山122号墳埋葬施設<br>棺内完掘状況(西から)   |
| PL. 7 | 越敷山51号墳埋葬施設1 出土遺物   | 3. 越敷山122号墳埋葬施設<br>完掘状況(西から)   |
| PL. 8 | 越敷山49・51号墳出土人骨  | PL.19 1. 越敷山123号墳完掘状況(西から)<br>2. 越敷山123号墳埋葬施設<br>棺内完掘状況(西から)   |
| PL. 9 | 越敷山51号墳出土人骨   | 3. 越敷山123号墳埋葬施設<br>完掘状況(西から)   |
| PL.10 | 遺物番号  | PL.20 1. 越敷山77号墳調査前状況(南から)<br>2. 越敷山77号墳墳丘検出状況<br>(南から)  |
| PL.11 | 1. 越敷山75・76・98・121～123号墳<br>調査前状況(北東から)<br>2. 越敷山75・76・98・121～123号墳<br>(北東から)   | 3. 越敷山77号墳完掘状況(南から)  |
| PL.12 | 1. 越敷山75・76・98・122・123号墳<br>(北から)<br>2. 越敷山49・51号墳(北から)   | PL.21 1. 越敷山77号墳完掘状況(上空から)<br>2. 越敷山77号墳墳丘盛断面(南から)<br>3. 越敷山77号墳墳丘除去後(南から)   |
| PL.13 | 1. 越敷山121号墳完掘状況(東から)<br>2. 越敷山75号墳検出状況(北から)<br>3. 越敷山75号墳埋葬施設<br>検出状況(北から)  | PL.22 1. 越敷山77号墳埋葬施設<br>検出状況(南西から)<br>2. 越敷山77号墳埋葬施設<br>棺内完掘状況(南西から)<br>3. 越敷山77号墳埋葬施設<br>石棺検出状況(南西から)<br>4. 越敷山77号墳埋葬施設<br>完掘状況(南西から) |
| PL.14 | 1. 越敷山75号墳完掘状況(西から)<br>2. 越敷山75号墳埋葬施設<br>棺内完掘状況(西から)<br>3. 越敷山75号墳埋葬施設<br>完掘状況(西から)   |  |
| PL.15 | 1. 越敷山76号墳完掘状況(西から)<br>2. 越敷山76号墳埋葬施設   |  |

- |   |  |
|---|--|
| <p>PL.23 1. 越敷山49号墳調査前状況(南から)<br/>2. 越敷山49号墳完掘状況(南から)</p> <p>PL.24 1. 越敷山49号墳第3工程盛土<br/>除去状況(南から)<br/>2. 越敷山49号墳盛土除去後(南から)</p> <p>PL.25 1. 越敷山49号墳埋葬施設1<br/>蓋石検出状況(東から)<br/>2. 越敷山49号墳埋葬施設1<br/>棺内人骨検出状況(東から)<br/>3. 越敷山49号墳埋葬施設1<br/>完掘状況(西から)</p> <p>PL.26 1. 越敷山49号墳埋葬施設1<br/>人骨検出状況(東から)<br/>2. 越敷山49号墳埋葬施設1<br/>棺内完掘状況(西から)<br/>3. 越敷山49号墳埋葬施設2<br/>棺内完掘状況(西から)<br/>4. 越敷山49号墳埋葬施設2<br/>完掘状況(西から)</p> <p>PL.27 1. 越敷山51号墳調査前状況(北東から)<br/>2. 越敷山51号墳完掘状況(北東から)</p> <p>PL.28 1. 越敷山51号墳完掘状況(上空から)<br/>2. 越敷山51号墳埋葬施設1・2<br/>棺内完掘状況(上空から)</p> <p>PL.29 1. 越敷山51号墳第5・6工程<br/>盛土除去状況(北から)<br/>2. 越敷山51号墳盛土除去後(北から)</p> <p>PL.30 1. 越敷山51号墳埋葬施設1<br/>追葬時掘り方断面<br/>(北東から)<br/>2. 越敷山51号墳埋葬施設1<br/>蓋石検出状況(東から)<br/>3. 越敷山51号墳埋葬施設1<br/>蓋石検出状況(西から)</p> <p>PL.31 1. 越敷山51号墳埋葬施設1<br/>人骨検出状況(南西から)<br/>2. 越敷山51号墳埋葬施設1<br/>棺内1号人骨(南西から)<br/>3. 越敷山51号墳埋葬施設1<br/>棺内2号人骨(北東から)<br/>4. 越敷山51号墳埋葬施設1</p> | <p>棺内3号人骨(南西から)</p> <p>PL.32 1. 越敷山51号墳埋葬施設1 遺物出土<br/>状況(F5・7~10、南西から)<br/>2. 越敷山51号墳埋葬施設1 遺物出土<br/>状況(W1、南西から)<br/>3. 越敷山51号墳埋葬施設1 遺物出土<br/>状況(F6、北東から)<br/>4. 越敷山51号墳埋葬施設1 遺物出土<br/>状況(J1~15、北東から)<br/>5. 越敷山51号墳埋葬施設1 遺物出土<br/>状況(J16~28、北から)</p> <p>PL.33 1. 越敷山51号墳埋葬施設1<br/>剥片散乱状況(北から)<br/>2. 越敷山51号墳埋葬施設1<br/>石棺検出状況(南西から)<br/>3. 越敷山51号墳埋葬施設1<br/>石棺検出状況(西から)</p> <p>PL.34 1. 越敷山51号墳埋葬施設2<br/>蓋石検出状況(南西から)<br/>2. 越敷山51号墳埋葬施設2<br/>棺内完掘状況(北東から)<br/>3. 越敷山51号墳埋葬施設2<br/>石棺検出状況(北東から)<br/>4. 越敷山51号墳埋葬施設2<br/>完掘状況(北東から)</p> <p>PL.35 1. 越敷山99号墳完掘状況(西から)<br/>2. 越敷山99号墳埋葬施設<br/>石蓋検出状況(北東から)<br/>3. 越敷山99号墳埋葬施設<br/>棺内完掘状況(北東から)</p> <p>PL.36 SI1・2完掘状況(南から)</p> <p>PL.37 1. SI1完掘状況(南から)<br/>2. SI1貼床除去後(南から)<br/>3. SI1断面(南東から)</p> <p>PL.38 1. SI2完掘状況(南東から)<br/>2. SI2貼床除去後(南東から)<br/>3. SI2断面(南西から)</p> <p>PL.39 1. SB1完掘状況(北から)<br/>2. SS1完掘状況(北から)<br/>3. SS2完掘状況(北から)</p> <p>PL.40 1. SK1完掘状況(東から)</p> |
|---|--|

	2. SK2完掘状況(北東から)		6. SK24完掘状況(南から)
	3. SK3完掘状況(北から)	PL.44	1. SK25完掘状況(東から)
	4. SK4完掘状況(東から)		2. SK26完掘状況(南から)
	5. SK5完掘状況(東から)		3. SK27完掘状況(北から)
	6. SK6完掘状況(東から)		4. SK28完掘状況(北から)
PL.41	1. SK8完掘状況(北から)	PL.45	1. 越敷山121号墳出土遺物
	2. SK9完掘状況(北から)		2. 越敷山75号墳出土遺物
	3. SK10完掘状況(北から)		3. 越敷山76号墳出土遺物
	4. SK11完掘状況(西から)		4. 越敷山122号墳出土遺物
	5. SK12完掘状況(西から)	PL.46	1. 越敷山123号墳出土遺物
PL.42	1. SK13完掘状況(東から)		2. 越敷山77号墳出土遺物
	2. SK14完掘状況(北から)		3. 越敷山49号墳出土遺物
	3. SK15完掘状況(東から)		4. 越敷山51・75・77・99号墳出土遺物
	4. SK16完掘状況(南から)	PL.47	1. 越敷山99号墳出土遺物
	5. SK17完掘状況(東から)		2. 越敷山76号墳・遺構に伴わない遺物
	6. SK18完掘状況(北から)		3. SI1・2・遺構に伴わない遺物
PL.43	1. SK19完掘状況(西から)	PL.48	越敷山51号墳埋葬施設1 出土管玉X線写真
	2. SK20完掘状況(南から)		
	3. SK21完掘状況(南から)		
	4. SK22完掘状況(北から)		
	5. SK23完掘状況(北から)		

第1表 新旧遺構対照表

掲載遺構名	調査時遺構名	掲載遺構名	調査時遺構名	掲載遺構名	調査時遺構名
越敷山49号墳	金創11号墳	SS1	No.0008 (H23)	SK15	No.0011 (H23)
埋葬施設1	第2主体部	SS2	No.0030 (H23)	SK16	No.0009 (H23)
埋葬施設2	第1主体部	SK1	11号墳頂部土塙 (H23)	SK17	No.0029 (H23)
越敷山51号墳	金創12号墳			SK18	No.0028 (H23)
埋葬施設1	03主体部	SK2	No.0027 (H23)	SK19	No.0006 (H24)
埋葬施設2	05主体部	SK3	No.0018 (H23)	SK20	No.0004 (H24)
越敷山75号墳	金創2号墳	SK4	No.0017 (H23)	SK21	No.0014 (H24)
越敷山76号墳	金創3号墳	SK5	No.0014 (H23)	SK22	No.0008 (H24)
越敷山77号墳	金創10号墳	SK6	No.0012 (H23)	SK23	No.0007 (H24)
越敷山98号墳	金創4号墳	SK7	No.0026 (H23)	SK24	No.0016 (H24)
越敷山99号墳	金創1号墳	SK8	No.0017 (H24)	SK25	No.0013 (H24)
越敷山121号墳	金創1号墳	SK9	No.0015 (H24)	SK26	No.0001 (H24)
越敷山122号墳	金創5号墳	SK10	No.0005 (H24)	SK27	No.0011 (H24)
越敷山123号墳	金創6号墳	SK11	No.0020 (H23)	SK28	No.0012 (H24)
SI1	No.0003 (H24)	SK12	No.0019 (H23)		
SI2	No.0002 (H24)	SK13	No.0021 (H23)		
SBI	No.0018 (H24)	SK14	No.0013 (H23)		

※ 括弧内は調査年度を示す。

## 第1章 調査の経緯と経過

### 第1節 調査にいたる経緯

金廻家ノ上ノ内遺跡は、標高226mの越敷山から北東側にのびる丘陵上に位置する。この一帯には120基ほどからなる越敷山古墳群があり、遺跡のある丘陵上にも越敷山49～55・72～77・98・99・121～125号墳が分布する。

ここに、一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事が行われることとなり、工事計画地内の遺跡の状況を把握すべく伯耆町教育委員会が、国（文化庁）および県の補助金を受け、平成22年度に試掘調査を実施した。その結果、古墳や段状造構を確認した。

この結果を受け、鳥取県西部総合事務所県土整備局と鳥取県教育委員会文化財課が遺跡の取り扱いについて協議を行ったところ、遺跡の現状保存は困難であり記録保存を実施するとの結論にいたった。この結論に基づき、鳥取県西部総合事務所長は、文化財保護法第94条の規定に基づく発掘通知を鳥取県教育長に提出したところ、事前調査の指示を受けた。このため、鳥取県西部総合事務所長は財団法人鳥取県教育文化財団に発掘調査を委託することになった。

発掘調査を受託した当財団は、鳥取県教育委員会教育長に文化財保護法第92条に基づく発掘調査の届出を提出し、当財団調査室岸本調査事務所が平成23年5月から行うことになった。調査対象地は当初、越敷山75・76・98・121～123号墳のある丘陵斜面を平成23年5月～11月の期間で調査を行う予定であったが、工事の設計変更により工事範囲が拡大したため、丘陵頂部まで調査対象範囲が広がることになった。この範囲には、用地を取得していない範囲が含まれていたため、ひとまず用地の取得が終了した越敷山49・51・77・99号墳周辺について、期間を延長して行うことになった。

ところで遺跡の名称であるが、調査に取り掛かる時点では金廻古墳群と呼称していたが、文化財課からの指示を受け、古墳群の名称を越敷山古墳群（金廻地区）と改めている。また、古墳の墳丘下から弥生時代の竪穴建物などが確認されたことから、金廻家ノ上ノ内遺跡と変更している。

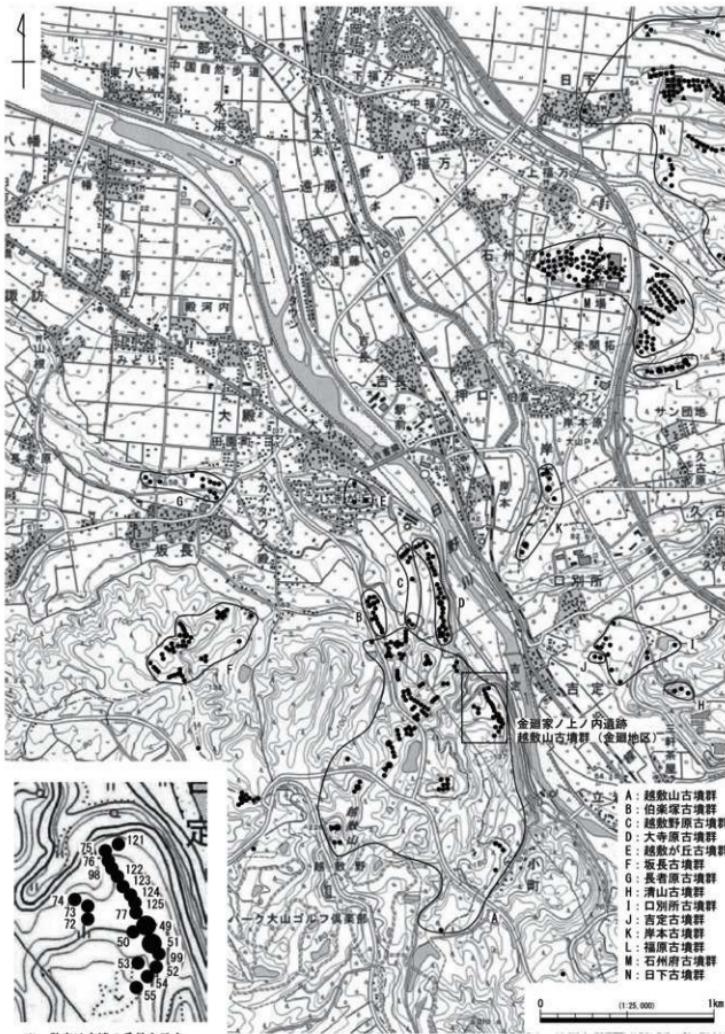
### 第2節 調査の方法と経過

#### 1. 調査の方法

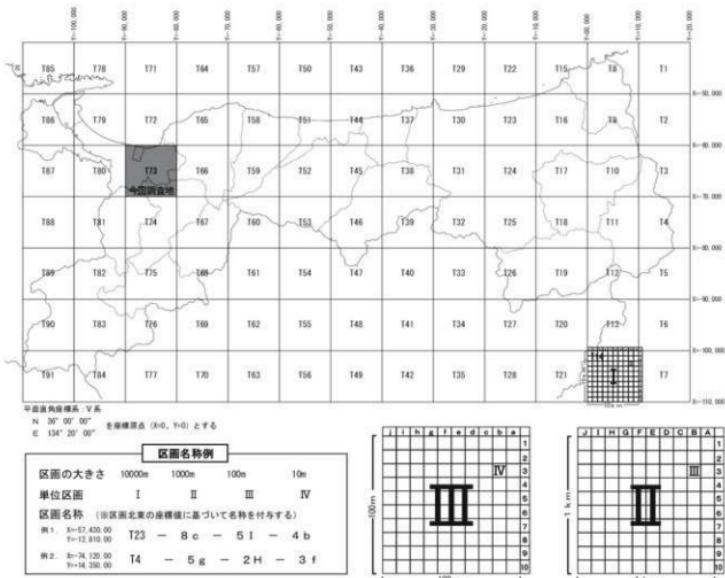
調査地の基準点および方眼測量は、世界測地系公共座標による4級基準点測量を行い、鳥取県の属する平面直角座標（V系）に基づいて10mを単位とした方眼の交点に杭を設置した。グリッドの名称は、当財団が実施している鳥取西道路の調査において用いられている方法に従って設定した（例：T73-10d-2H-7a）。これは、第I～IV区画の4つの階層によって設定するものであり、各階層については以下に示すとおりである。

#### 第I区画

鳥取県全域を91の区画に分割したものであり、T1～91の記号を付している。1つの区画に範囲は10,000×10,000mである。



第1図 調査地位置



第2図 調査区地割り模式図

## 第Ⅰ区画

第Ⅰ区画の1つを100等分したものであり、南北軸に1~10、東西軸にa~jを付し、各区画を東西一南北軸の北東側交点の名称で呼称している(1a~10j)。1つの区画の範囲は1,000×1,000mである。

## 第Ⅲ区画

第Ⅲ区画の1つを100等分したものであり、南北軸に1~10、東西軸にA~Jを付し、各区画を東西一南北軸の北東側交点の名称で呼称している(1A~10J)。1つの区画の範囲は100×100mである。

## 第Ⅳ区画

第Ⅳ区画の1つを100等分したものであり、南北軸に1~10、東西軸にa~jを付し、各区画を東西一南北軸の北東側交点の名称で呼称している(1a~10j)。1つの区画の範囲は10×10mである。なお、この第Ⅳ区画は遺構の位置表示や遺物の取り上げに使う最も基本のグリッドとなる。

表土の掘削は、古墳は人力、古墳以外では重機を用いた。遺構および包含層、墳丘盛土の掘削は、人力で行うことを基本とし、補助的に重機を用いた。なお、廃土はベルトコンベアや重機によって隣接地に集積した。

検出した遺構や出土した遺物の図化には、電子平板、トータルステーション、手測り、写真測量のうち、最も適したものを選択し実施した。遺物の取り上げについては設定したグリッドごとに行うこ

## 第1章 調査の経緯と経過

とを基本とし、状況によって図化および位置の記録、写真撮影をしたうえで取り上げを行った。写真撮影については、35mm判、プローニー（6×7）判、デジタルカメラ（1220万画素以上）を用い、地上もしくは写真撮影用の足場から撮影した。なお、遺跡の調査前の状況や完掘後の写真などには、空中写真撮影も使用しており、これについてはプローニー（6×6）判、デジタルカメラ（1,220万画素以上）を用いた。写真フィルムには白黒ネガフィルム、カラーポジフィルムを使用した。

### 2. 調査の経過

調査の経緯でもふれたが、当初、越敷山75・76・98・121～123号墳およびその周辺の調査を平成23年5月から11月まで実施する予定であったが、工事の設計変更に伴い調査範囲が拡大したことから、越敷山49・51・77・99号墳およびその周辺の調査も行うこととなり、平成23年度は5月から12月まで、平成24年度は5月から7月までの2ヶ年にわたり調査を実施した。各年度の調査の経過は以下に示すとおりである。

#### 平成23年度

平成23年度は、5月13日から基準点測量や水準点測量、16日から調査前の地形測量を実施した。19日にはラジコンヘリコプターによる調査前状況の写真撮影、23日からは重機による表土掘削を開始し、26日からは人力による古墳を覆う表土の掘削に着手した。6月22日には古墳の周溝や埋葬施設の検出、7月22日からこれらの掘削を開始し、8月まで実施した。この間、東側の丘陵緩斜面の包含層掘削および遺構検出を行い、段状遺構2基や土坑13基（落とし穴を含む）を確認した。9月1日には棺内を完掘した状態でのラジコンヘリコプターによる写真撮影を実施し、埋葬施設の掘り方や古墳に切られている落とし穴の掘削に取り掛かった。9月29日には、調査区全体の写真をラジコンヘリコプターで撮影し、その後、古墳の断ち割りや遺構掘削、調査後の測量などの記録作業を実施した。10月7日には当初予定していた範囲の調査が終了した。

10月27日からは追加範囲の調査に着手した。27・28日には基準点測量や水準点測量を実施し、31日には調査前の地形測量を行った。11月7日からは人力による表土掘削を開始した。16日には古墳の周溝や埋葬施設の検出作業に着手し、越敷山49・51・77・99号墳の周溝のほか、越敷山49号墳の埋葬施設2や越敷山99号墳の埋葬施設を確認した。17日からはこれらの掘削に取り掛かった。25日には墳頂部に設定したトレンチにおいて埋葬施設1に伴う箱式石棺の蓋石を確認した。この蓋石を除去すると、2体の人骨が認められたことから、鳥取大学の井上貴央教授に依頼し、12月5日にこれらの人骨の取り上げを行った。14日からは49号墳の墳丘の断ち割りや記録作業を行い、15日には調査が終了した。なお、次の調査まで期間があくことから、養生を行うこととなり、19日までにこれを済ませ、現地での作業が終了した。

#### 平成24年度

平成24年度は、4月26日に基準点測量や水準点測量を実施し、5月7日から人力による掘削を開始した。14日には越敷山51号墳、16日には越敷山77号墳の検出を行い、越敷山51号墳では2基の埋葬施設、越敷山77号墳では1基の埋葬施設と周溝を確認した。17日にはこれらの掘削を開始した。28日には越敷山51号墳の埋葬施設1、29日には埋葬施設2の蓋石を外した。蓋石の除去後、ともに人骨を確認したため、鳥取大学の井上貴央教授に依頼し、6月1日にこれを取り上げた。この間、ラジコンヘリコプターによる写真撮影や棺内の人骨や副葬品の出土状況の記録作業を行い、越敷山49号墳の墳丘

掘削を開始した。7日には越敷山51号墳の埋葬施設2、越敷山77号墳の埋葬施設の調査が終了し、埴丘の掘削に取り掛かった。14日からは越敷山49・77号墳の下面の遺構検出を行い、竪穴建物2棟、土坑7基（土坑墓、落とし穴を含む）を確認した。越敷山51号墳の下面の遺構検出については29日から行い、掘立柱建物1棟、土坑6基（落とし穴を含む）を確認した。7月4日には確認した遺構の掘削が概ね終了し、6日には記録作業など現地での作業がすべて終了した。

### 第3節 調査体制

発掘調査および報告書作成は以下の体制で行った。

平成23年度

○調査主体

財団法人鳥取県教育文化財団

理 事 長 井上 善弘

事 務 局 長 漆原 貞夫

事 務 職 員 岡田美津子

（兼務 調査室事務職員）

財団法人鳥取県教育文化財団調査室

室 長 松井 謙

（鳥取県教育委員会 派遣）

次 長 石本 富正

事 務 職 員 岡田美津子

福田早由里

植木 智子

○調査担当

財団法人鳥取県教育文化財団調査室

岸本調査事務所

所 長 國田 俊雄

主任文化財主事 野口 良也

（鳥取県教育委員会 派遣）

文化財主事 馬路 晃祥

（鳥取県教育委員会 派遣）

平成24年度

○調査主体

財団法人鳥取県教育文化財団

理 事 長 井上 善弘

事 務 局 長 漆原 貞夫

事 勿 職 員 岡田美津子

（兼務 調査室事務職員）

財団法人鳥取県教育文化財団調査室

室 長 松井 謙

（鳥取県教育委員会 派遣）

次 長 石本 富正（平成24年5月まで）

中川 真一（平成24年6月から）

事 勿 職 員 岡田美津子

福田早由里

植木 智子

○調査担当

財団法人鳥取県教育文化財団調査室

岸本調査事務所

所 長 國田 俊雄

副 主 幹 玉木 秀幸

（文化財主事 鳥取県教育委員会 派遣）

○発掘調査支援業者

平成23年度

株式会社埋蔵文化財サポートシステム

現場代理人 野口 岩雄、島内 浩輔

支援調査員 島内 浩輔、小石 龍信

調査補助員 小石 龍信、七島 陽子、

豊田沙和美、中田 裕樹、

嘉村 哲也

平成24年度

株式会社埋蔵文化財サポートシステム

現場代理人 島内 浩輔

支援調査員 島内 浩輔、小石 龍信

測量士 藤崎伸一郎

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

金廻家ノ上ノ内遺跡は、鳥取県西部、西伯郡伯耆町金廻字家ノ上ノ内に所在する。ここは越敷山から派生する丘陵先端部に位置しており、周囲には越敷山古墳群や伯楽塚古墳群、越敷野原古墳群、大寺原古墳群など数多くの古墳が分布している。

この周辺の地形および地質は、日野川を挟んで大きく様相を変えるようである。日野川の右岸は、大山の火山噴出物からなる緩やかな台地となっており、第四紀更新世に形成されている。一方、金廻家ノ上ノ内遺跡の位置する日野川左岸は、標高270mの高塚山と標高226mの越敷山を中心とした南北8km東西3kmにわたる起伏に富んだ丘陵地帯と、長者原台地と呼ばれる平坦な洪積台地とで構成される。丘陵地帯は、第三期鮮新世の粗面玄武岩を基盤とし、部分的に大山上中部火山灰に覆われている。洪積台地は、南側では安山岩質の砂礫層を、北側では火山碎屑物を主体とする古期扇状地堆積物を基盤とし、上部は丘陵地帯と同様、大山上中部火山灰で覆われている。この他、日野川付近には、低位段丘や扇状地などの地形もみられる。なお、日野川は中世までは岸本集落の北から東北方向に流れて佐陀川に合流していたが、天文19年（1550）と元禄15年（1702）の洪水により、現在のような西寄りの流路になったようである。

### 第2節 歴史的環境

#### 旧石器時代

この時代のものとして確認されている遺跡は少ない。長者原台地上の諏訪西山ノ後遺跡（24）では、石刃を二側縁加工した珪岩製のナイフ形石器がローム層中から2点出土しているほか、坂長村上遺跡（50）から黒曜石製のナイフ形石器が1点出土している。泉中峰遺跡（79）や小波原畠遺跡（80）においてもナイフ形石器が出土しているが、石器群が原位置でまとめて出土した例はまだない。



第3図 遺跡位置

### 縄文時代

草創期においても確認されている遺跡は少ない。坂長村上遺跡から多様な石材と形態の5点の尖頭器を中心とする石器群が出土したほか、貝田原遺跡（61）や奈喜良遺跡（20）などで、サスカイト製有茎尖頭器がみつかっている。早期後半になると、大山西麓では押型文土器を出土する遺跡が多く知られるようになり、このうち上福万遺跡（73）では集石遺構や土坑が多数検出されている。前期になると、中海沿岸にも集落が形成されるようになり、目久美遺跡（8）や陰田第9遺跡（9）では、土器や石器のほか、動植物遺体が豊富に出土している。中期では、新たに出現する遺跡は少ないが、後期になると再び増加するようである。晚期には、古市河原田遺跡（12）をはじめ突帯文土器を伴う遺跡が多くみつかっている。周辺地域では非常に多くの落とし穴が確認されており、妻木晚田遺跡（83）で963基、青木遺跡（22）で228基、越敷山遺跡群（45）で341基を数える。年代の判明したものでは、後晩期の例が多い。

### 弥生時代

前期の代表的な遺跡としては、目久美遺跡（8）や長砂第2遺跡（4）などの低湿地遺跡がある。両遺跡では、前期から中期にかけての水田跡が重層して検出され、農耕具などの木製品も多く出土している。この時期の集落は丘陵上にもあり、宮尾遺跡（28）や諸木遺跡（29）では環濠が発掘されている。特に清水谷遺跡（17）の環濠は、その内部に堅穴建物などが認められない点で注目される。

中期後葉以降になると遺跡数が増加し、丘陵上には妻木晚田遺跡（83）、青木遺跡（22）、福市遺跡（21）など大規模な拠点的集落が出現する。越敷山遺跡群（45）は高い丘陵上に位置する集落跡で、多数の鉄器をもつ。同時期にこの地域には四隅突出型墳丘墓が分布し、妻木晚田遺跡洞ノ原地区、仙谷地区の墳丘墓群や父原墳丘墓群などが代表である。日下1号墓（75）は中期の木棺墓群に、尾高浅山1号墓（76）はほぼ同時期の環濠集落に隣接して築造されているのが注目される。

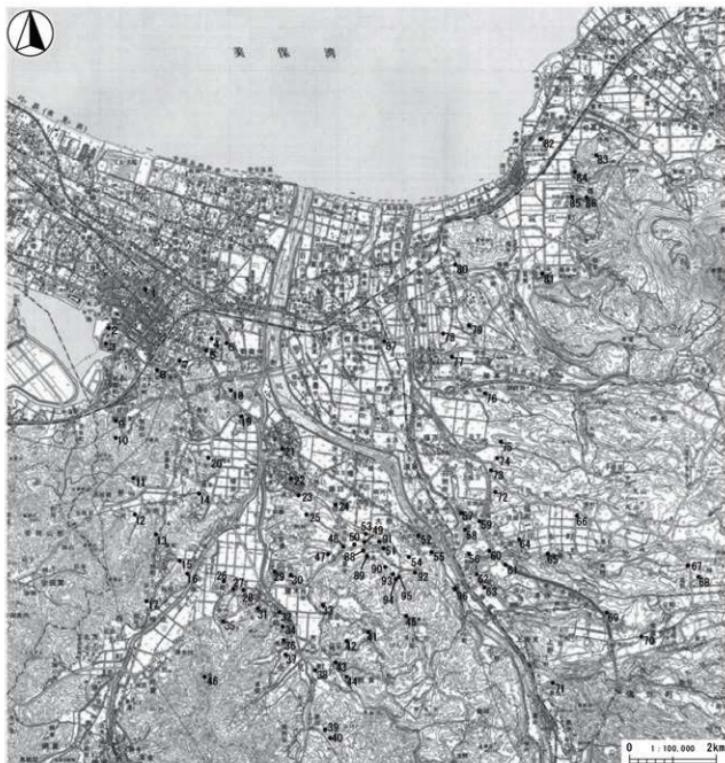
### 古墳時代

前期の主要な古墳には、三角縁神獸鏡が出土した前方後方墳と方墳の普段寺1・2号墳（35）、方墳で6基の埋葬施設をもつ日原6号墳（19）がある。この頃の古墳は、墳丘規模20m前後の比較的小さなものが多い。中期古墳については、全長108mの前方後円墳の三崎殿山古墳（26）が著名であるが、最近の研究では、前期古墳である可能性が指摘されている。そのほかには画文帶神獸鏡が出土した浅井11号墳（36）、宮前3号墳（32）といった小型の前方後円墳が築造されている。後期になると、古墳数は爆発的に増加し、多くの群集墳が営まれる。長者原台地上では諏訪古墳群や長者原古墳群（53）などが形成される。なお、後期の古墳の中には、吉定1号墳（63）の割石小口積みによる横穴式石室のほか、東宗像5号墳（18）の横口式箱式棺などのように、九州地方との関連性を窺わせるものがある。終末期になると、陰田横穴墓群（9）や日下横穴墓群（75）などの横穴墓が造営されるようになる。

集落遺跡については、主に台地上や丘陵上に分布しており、福市遺跡（21）や青木遺跡（22）のように、弥生時代後期から継続して営まれたものがみられるほか、坂長第8遺跡（89）や坂長尻田平遺跡（95）のように中期から集落が形成されるものもある。

### 古代

白鳳期になると、大寺庵寺（52）が創建される。大寺庵寺は、東向きの法起寺式伽藍配置をとる寺院であり、金堂の瓦積基壇と三段舎利孔を持つ塔心礎のほか、全国的に数少ない石製鵝尾が確認されている。この寺院に使用された瓦については、創建時のものと同一文様の瓦が金田瓦窯（39）から出



1 鎌町第1遺跡	17 清水谷遺跡	33 住吉古墳群	49 版長下塚敷遺跡	65 番原遺跡群	81 井手原遺跡
2 久米川1遺跡	18 東宗像古墳群	34 宮前遺跡	50 版長村上遺跡	66 須村遺跡	82 今津原の上遺跡
3 米子城	19 日置古墳群	35 普段寺1号墳	51 版中庵寺	67 真野ブナ遺跡	83 妻木晚田遺跡
4 長砂第1・2遺跡	20 奈魯良遺跡	36 浅井山1号墳	52 大寺発寺	68 藍野遺跡	84 晩田遺跡
5 長砂第3遺跡	21 福市遺跡	37 浅佐土居敷遺跡	53 長者原古墳群	69 林ヶ原遺跡	85 向山古墳群
6 水道山古墳	22 青木遺跡	38 天王原遺跡	54 版中第5遺跡	70 下山南遺跡	86 上庄魔寺跡
7 池ノ内遺跡	23 橋ノ口第4遺跡	39 金印瓦窯	55 岸本大成遺跡	71 長山馬籠遺跡	87 今在家下井ノ原遺跡
8 目久美遺跡	24 調訪西山ノ遺跡	40 両部太郎窯	56 岸本古墳群	72 石州府古墳群	88 版長第7遺跡
9 陰林跡群	25 別所新田遺跡	41 伏名遺跡群	57 岸本遺跡	73 上福万遺跡	89 版長第8遺跡
10 奥除田遺跡群	26 三崎殿山古墳	42 田代松尾平遺跡	58 岸本要害跡	74 日下寺山遺跡	90 版長下門前遺跡
11 新山遺跡群	27 天萬土居前遺跡	43 佛金古墳群	59 岸本下の原遺跡	75 日下古墳群	91 大殿孫谷遺跡
12 古市遺跡群	28 宮尾遺跡	44 朝金小サヤ遺跡	60 久古第3遺跡	76 尾高浅山遺跡	92 版長前田遺跡
13 吉谷遺跡群	29 諸木遺跡	45 鎌倉山遺跡群	61 貝田原遺跡	77 尾高城	93 版長武山遺跡
14 横木遺跡群	30 後坂山古墳	46 手間要害跡	62 口別所古墳群	78 尾高御建山遺跡	94 版長ジラ道跡
15 福成石佛前遺跡	31 天万遺跡	47 荒神上遺跡	63 吉定1号墳	79 泉中峰・前田遺跡	95 版長尻田平遺跡
16 福成石佛前遺跡	32 宮前3号墳	48 長者原敷遺跡	64 久古北山遺跡	80 小波原畠遺跡	96 金綱家ノ上ノ遺跡

第4図 周辺遺跡分布図

土したようであり、そこで焼かれた可能性がある。この他、長者原台地上には坂中庵寺（51）があり、塔心礎が残り、奈良末から平安初め頃の瓦が散布するものの、伽藍配置等は明らかでない。

ところでこの周辺地域は、『和名類聚抄』によると伯耆国相見郡に編成されている。このうち長者原台地上には相見郡衙が存在していたとみられ、長者屋敷遺跡（48）や坂長第6遺跡（92）などのように郡衙に伴う施設と考えられる大型の掘立柱建物跡が確認されているほか、坂長村上遺跡（50）や坂長第7遺跡（88）から円面硯や刻書土器など、官衙的な性質が強い遺物が出土している。さらに北方の台地上では諏訪西山ノ後遺跡（24）で和同開珎と墨などを納めた胞衣壺、桶ノ口第4遺跡（23）で石帶が出土している。

古代山陰道については、大寺庵寺、坂中庵寺、長者屋敷遺跡を通って、伯耆町岩屋谷から南部町天万を抜ける南側のルート、もしくは米子市諏訪から古市を抜ける北側のルートが想定されているが、発掘調査による明確な遺構の確認にはいたっていない。

### 中世

大山寺の鉄製厨子には、承安元年（1171）の火災の翌年に伯耆の豪族紀成盛が大山権現御神体と厨子を奉納したことが記されている。伯耆町坂長には紀成盛が居宅を構えたという伝承があり、坂長前田遺跡（92）では平安時代末期から鎌倉時代の甲冑に用いられた小札が出土している。

南北朝時代になると、大寺に安国寺が置かれた。要衝の地であり、名和氏などの南朝勢力を抑える目的があったとされる。42坊を数える大寺院であったが、永禄8年（1565）に、杉原盛重に焼き討ちされている。坂中地区の旦那寺である普門寺は、もとはこの安国寺の奥の院であったといわれている。

南北朝から戦国時代の動乱期には、山陰道沿いの要地を中心に、数多くの城砦が築かれた。小波城（80）、尾高城（77）、手間要害（46）は、文献にも登場する代表的な城跡である。坂長熊谷遺跡上方の字岩コゴロにも坂中丹波なる人物の陣屋があったという伝承が残る。坂中の賀茂神社の棟札には慶長4年（1599）に坂中九兵衛が建立したことが記されていて、その古宮跡は字熊谷にあるという。

### 近世

西伯耆は、吉川広家、中村一忠、加藤貞泰と領主交代を繰り返した末に、元和3年（1617）に、因幡、伯耆32万石を領する鳥取藩の一部として池田光政が領主になる。寛永9年（1632）国替えにより池田光仲が封入すると、周辺地域は藩の直轄領と寺社領を除いた大半が米子城主荒尾家の給所に属し、以後明治2年（1869）まで荒尾氏による鳥取藩独特の自分手政治が行われた。

### 参考文献

- 地質調査所 1962「5萬分の1地質図幅説明書 米子」（岡山—第18号）
- 山名巖 1964「山陰地方における第四紀末の諸問題」「鳥取県立科学博物館研究報告」
- 岸本町 1983『岸本町誌』
- 会見町 1996『会見町誌 続編』
- 米子市 2003『新修 米子市史』

## 第3章 調査の成果

### 第1節 遺跡の概要と層序

#### 1. 遺跡の概要

金廻家ノ上ノ内遺跡は、鳥取県西伯郡伯耆町金廻字家ノ上ノ内にある。ここは標高226mの越敷山から北東側へと派生する丘陵の先端にある。調査区内の標高は84~113mであり、平地との比高差は37~66mほどである。本遺跡からの眺望はよく、北東側では日野川や米子平野、さらには日本海を、南東側では中国地方の最高峰である大山を望むことができる。

この周辺には、丘陵上に120基ほどの古墳からなる越敷山古墳群のか、伯楽塚古墳群、越敷野原古墳群、大寺原古墳群、長者原台地上には長者原古墳群、日野川を挟んだ東側には、吉定古墳群、清山古墳群、口別所古墳群、岸本古墳群、さらに北西側には石州府古墳群、日下古墳群など、数多くの古墳が分布する。

さて、本遺跡周辺には、20基の古墳が所在する（越敷山49~55・72~77・98・99・121~125号墳）。そのうち越敷山75・76、98・121~123号墳が工事範囲内にかかることから、これらの古墳の調査を行うこととなった。なお、工事の設計変更に伴い工事範囲が拡大することとなり、その範囲にある越敷山49・51・77・99号墳についても追加で調査を行うこととなった。

調査の結果、これらの古墳は古墳時代中期から後期にかけて築造されたものであり、そのうち最も古いものは越敷山121号墳の古墳時代中期前葉頃と考えられ、この頃から、この丘陵上に古墳が築造されるようになったとみられる。

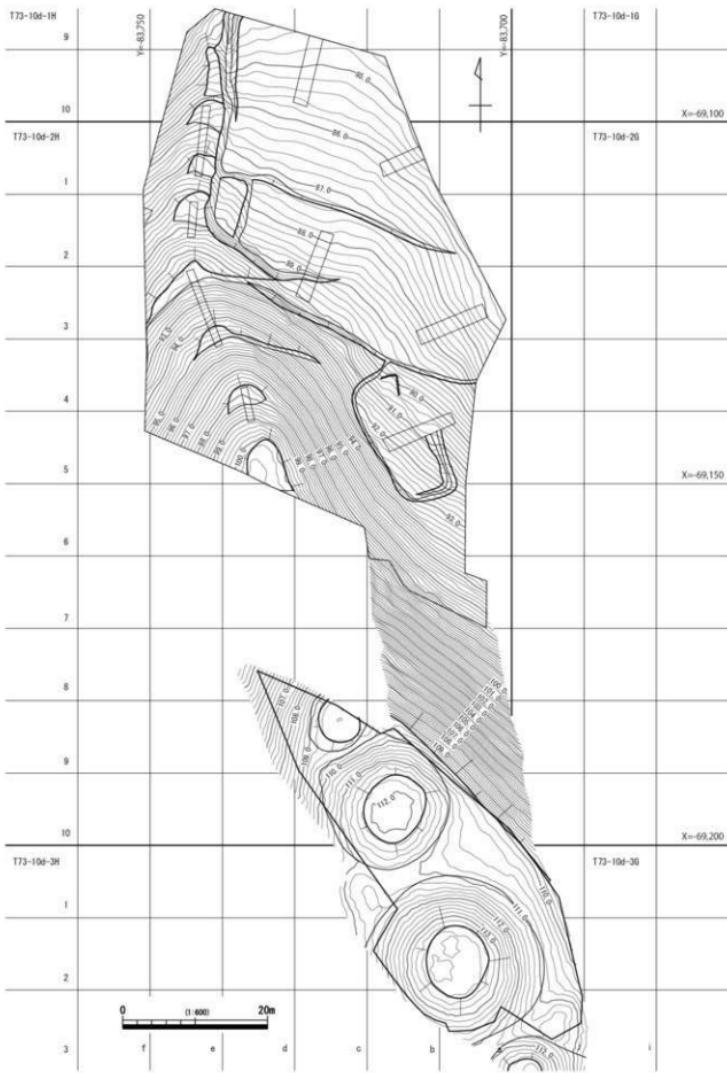
越敷山121号墳については、後世の削平のため詳細は不明であるが、次に古いとみられる越敷山51号墳は、丘陵頂部の調査地の中で最も標高の高い位置にあり、直径が約25mと最も大きく、この主体部である埋葬施設1は長軸2.23m、短軸0.67mと最も大型で、鉄刀、鉄劍、鉄錘、鉄斧、玉類など多彩な副葬品が出土している。また、5体の人骨が確認されており、追葬が何度か行われており、この

尾根状にある古墳の中で突出した存在である。これ以降、古墳の規模は徐々に縮小していく、後期前葉にかけて丘陵の下方へと構築されていく。その後、後期前半頃になると、再び丘陵頂部へと移り、南側へと古墳が築かれるようである。

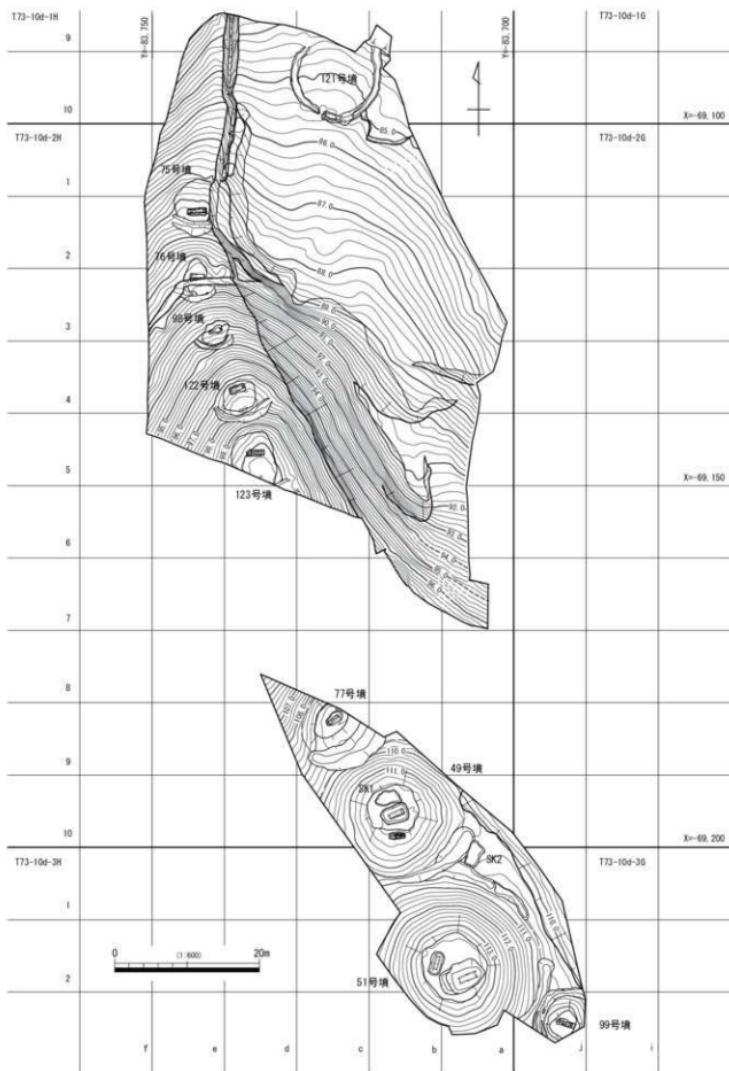
古墳以外の遺構としては、弥生時代後期中葉から後葉頃の堅穴建物2棟、縄文時代と考えられる落とし穴18基のほか、段状遺構2基、土坑墓1基、土坑9基を確認した。このうち堅穴建物は、平地からの比高差が60m以上の場所にあり、集落を営むにしては狭い丘陵尾根の頂部に



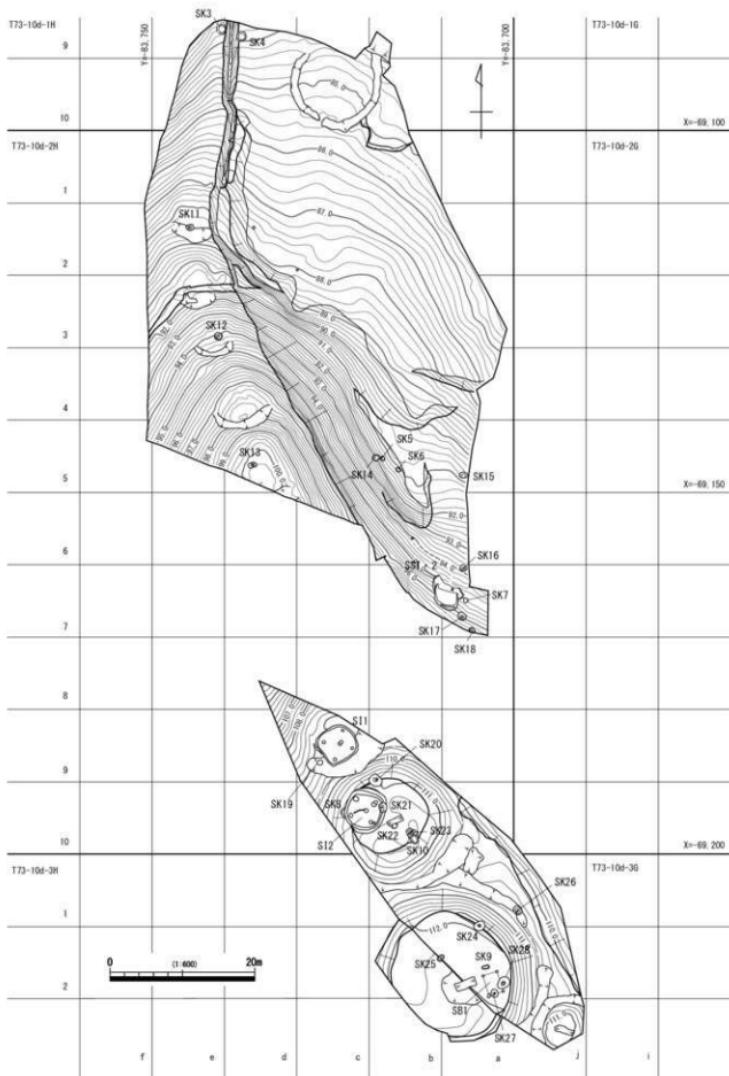
写真1 調査地遠景



## 第5図 調査前地形図

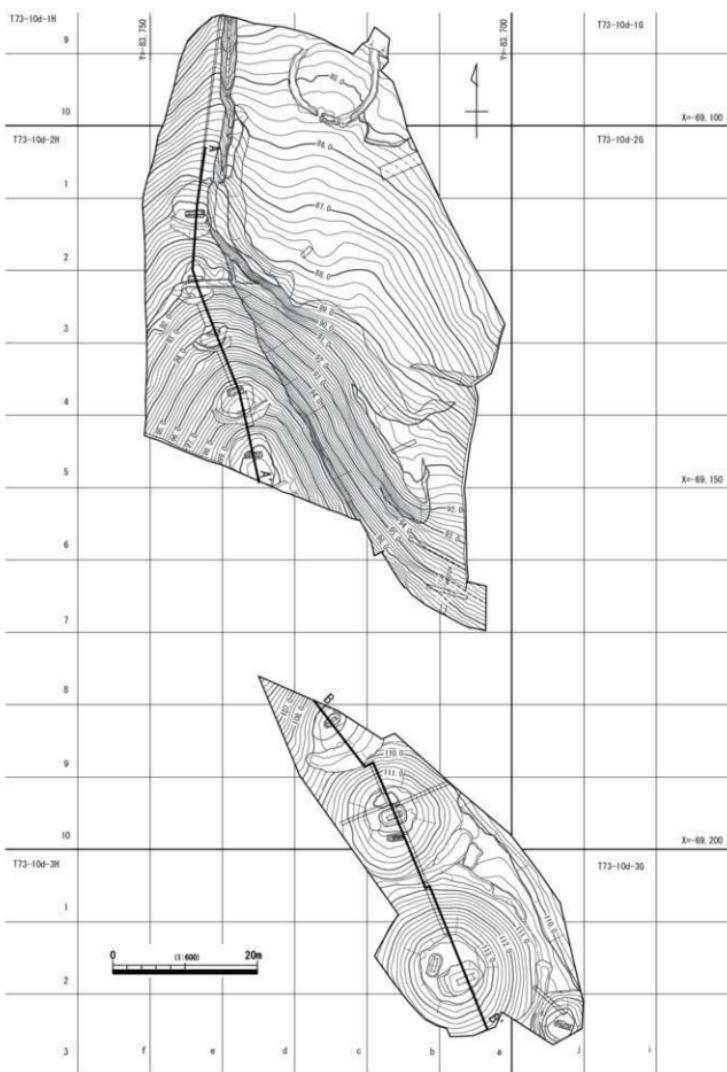


第6図 第1造構面造構配置図

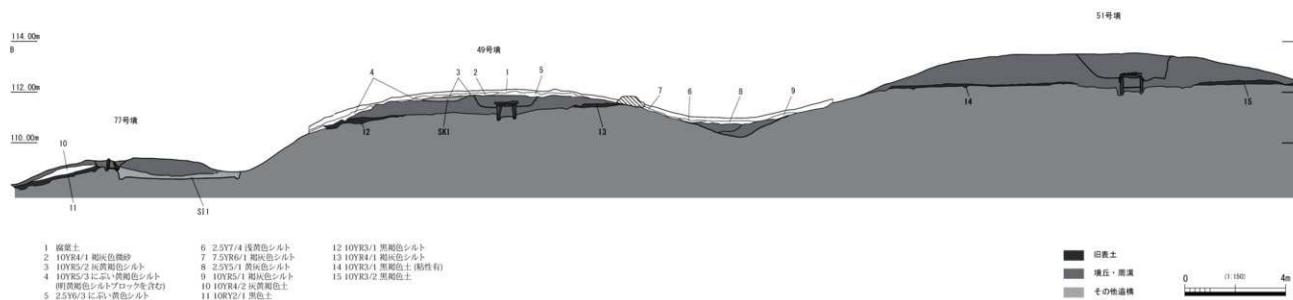
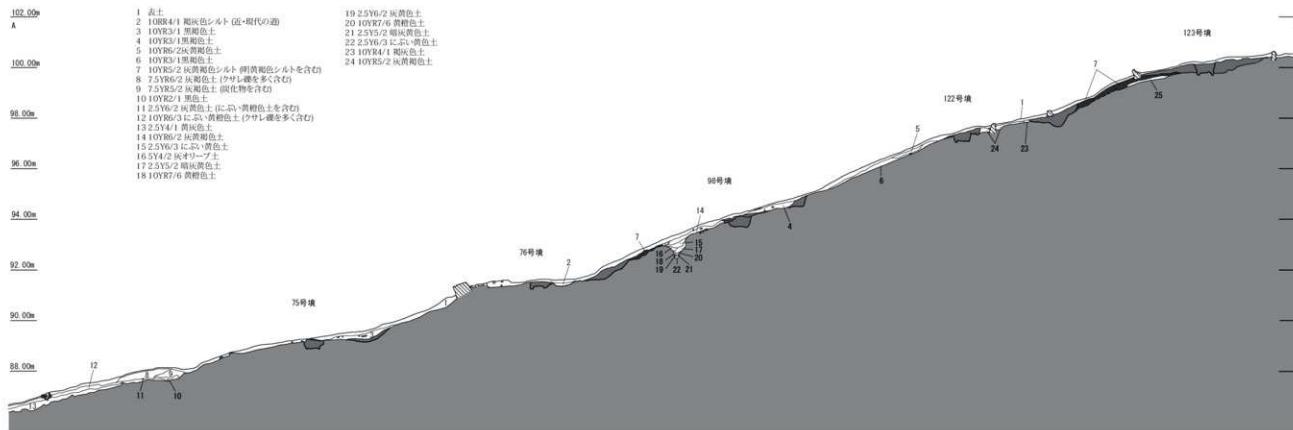


第7図 第2造構面遺構配置図

第3章 調査の成果



第8図 土層断面位置



第9図 調査区内土層断面

位置することから、この丘陵では、弥生時代後期中葉から後葉頃において、広義の高地性集落が営まれていたと考えられる。

これらの遺構の詳細については、次節で報告する。

## 2. 層序

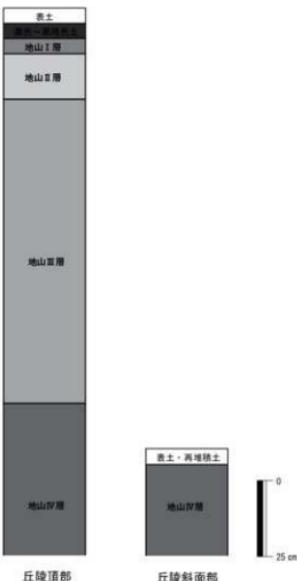
調査地は越敷山49・51・77・99号墳のある丘陵頂部と、そこからやや下った越敷山123号墳以下の斜面部である。丘陵頂部は細尾根であり、傾斜は緩やかであるが、平坦面は少ない。斜面部は尾根を境に西側が急斜面となるが、東側は比較的傾斜が緩やかである。東側の緩斜面では近世に耕作が行われていたらしく、広い範囲で掘削が及んでおり、平坦面が認められる。

調査区内の堆積状況についてみると、丘陵頂部は表土の下に古墳の流出などによる再堆積土が若干堆積するが、概ね古墳の墳丘盛土や地山となる。墳丘盛土の下については、黒色や黒褐色を呈する旧表土が堆積し、その下は地山となる。

越敷山77号墳の斜面下方にあたる丘陵頂部から北西方向へ下る斜面については、表土、黒色土、地山の順に堆積しており、丘陵頂部とやや堆積状況が異なる。

斜面部の尾根および西側斜面については、表土の下に古墳の流出などによる再堆積土が若干堆積するが、概ね墳丘盛土ないし地山となる。また、墳丘盛土の下など部分的に旧表土が認められる。斜面部との境は耕作土の下に黒色土が厚く堆積するが、それ以外の耕作土の下は地山となる。

ところで、丘陵頂部と斜面部では地山の堆積物に違いが認められる。丘陵頂部はにぶい黄褐色土（I層）、橙色土（II層）が薄く堆積し、その下に軽石を含む黄色土（III層）が1.00m以上と厚く堆積しており、その下に風化した礫や板状に剥離する岩を含む赤色土（IV層）が堆積する。斜面部はI～III層が認められず、IV層となる。なお、越敷山51号墳の第4・6工程に使用されるA類、追葬の掘り方に充填された土は主にIII層からなる（第2節参照）。また、古墳の埋葬施設に使用された石材は、分析結果から、IV層に含まれる岩を使用したとみられる（第4章第1節参照）。

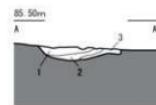
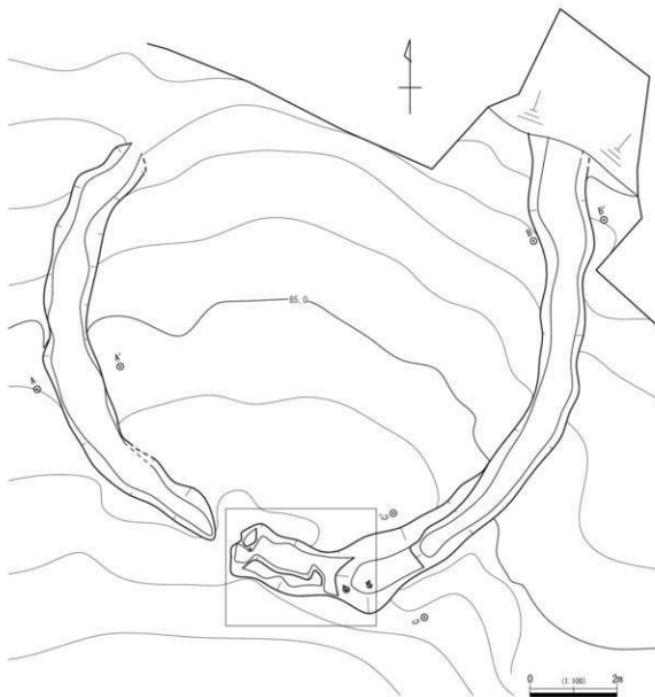


第10図 地山堆積状況模式図

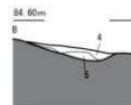
## 第2節 古墳の調査

### 越敷山121号墳（第11～13図、PL.13・45）

T73-10d-1H-9b・10b・10c・10dグリッドにある。ここは北へと緩やかに下る比較的平坦な場所で



1 10TRG/1褐色シルト(0.5~1cm)の縁を含む  
2 10TRB/1褐色シルト  
3 10TR2/3に近い黄褐色シルト  
4 10TR4/1褐色シルト

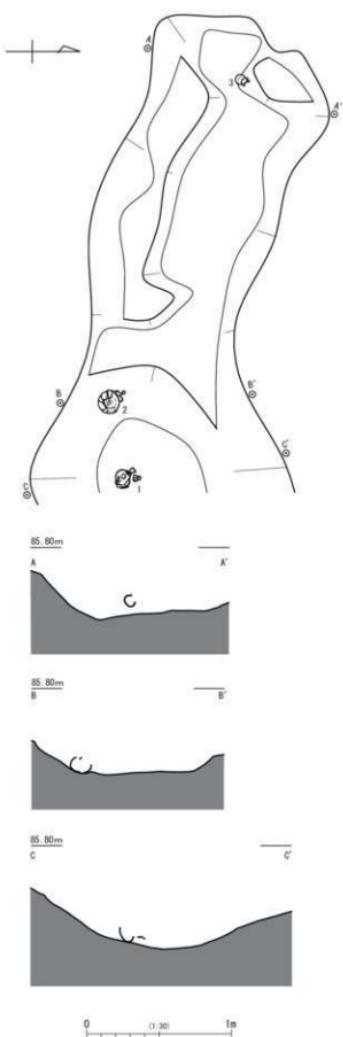


5 7.5TR4/2k褐色シルト  
6 7.5TR4/1褐色シルト(0.5~1cm)の縁を含む  
7 7.5TR5/3L-5.5褐色シルト



0 (1:60) 2m

第11図 越敷山121号墳



第12図 越敷山121号墳遺物出土状況

ある。標高85m前後と調査区の中で最も低い位置にあるが、すぐ北側は急斜面となるため、比較的眺望が良い。周辺は近世の耕作等によって削平を受けている。このため、埋葬施設や墳丘が失われており、検出できた遺構は周溝のみである。なお、本遺跡内にある古墳は、丘陵尾根に沿って築造されているが、本古墳は北東側へやや外れた場所にある。

#### 墳丘・周溝

墳丘は先にも述べたとおり、近世の削平により失われており、周溝しか残っていない。このため詳細は不明であるが、周溝が円形に巡ることから、本古墳は円墳であったと考えられる。古墳の規模は、周溝の内面で直径10.50m、周溝を含めると13.00mを測る。

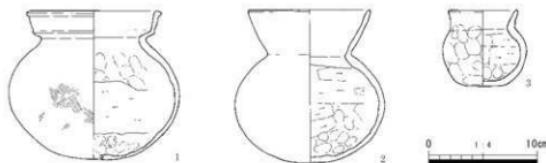
周溝は、幅1.65m、深さ0.28mを測る。南側では0.50mほど途切れており、北側は土砂の流出のために失われている。なお、途切れた部分については、陸橋状に掘り残された可能性がある。

#### 出土遺物

遺物は、南側の周溝底面において、1～



写真2 越敷山121号墳遺物出土状況



第13図 越敷山121号墳出土遺物

第13図 土器観察表

遺物番号	遺物名	種類	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	施文・開窓	色調	備考
1	圓壺	壺	Φ114	136	—	外面:ナデ、ハケメ、内面:ナデ、ヘラケズリ	に赤い黄褐色	土瓶器、保存着
2	圓壺	壺	Φ110	140	—	外面:ナデ、内面:ナデ、ヘラケズリ	に赤い黄褐色	土瓶器
3	圓壺	壺	Φ 62	70	—	外面:ナデ、内面:ナデ、ヘラケズリ	褐色	土瓶器

3がほぼ完形の状態で出土した。1は壺であり、口縁部端部が外側へ肥厚して平坦面をもち、端部が外側に突出し、口縁部下端が鈍く突出する。2は直口壺、3は小型丸底壺である。時期は出土遺物の特徴から、古墳時代中期前葉頃と考えられる。

#### 越敷山75号墳（第14～17図、PL.13・14・45）

T73-10d-2H-1e・2eグリッドにある。北へと下る丘陵尾根上にあり、標高89m付近にある。丘陵尾根に沿って築造された古墳の中で最も低い位置にある。本古墳のすぐ南側には越敷山76号墳があり、その比高差は3.00mほどである。

#### 墳丘・周溝

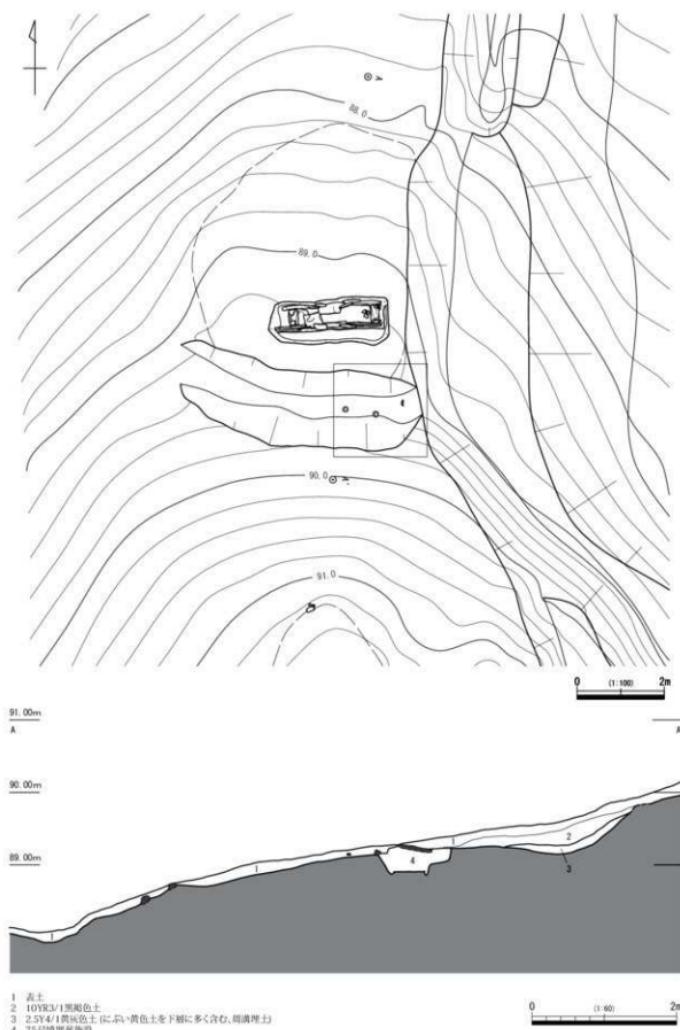
墳丘は尾根の形状を利用し、周辺を削り出して墳形を整え、盛土をしたものとみられるが、土砂の流出によって盛土が失われ、形状は不明瞭である。しかし、南側において三日月形に周溝が掘り込まれていることから、本古墳は円墳であったと考えられる。規模は周溝内側で直径約6.00m、周溝を含めると約8.00mを測る。墳丘の高さは、北側の墳端から墳頂部まで約0.60m、南側の周溝底面から墳頂部まで約0.15mである。

周溝は、尾根と直交する形で三日月形に掘り込まれているが、西側は土砂の流出、東側は近世の耕作により失われている。規模は検出長5.50m、幅1.78m、深さ0.10mを測り、断面形は皿状を呈する。

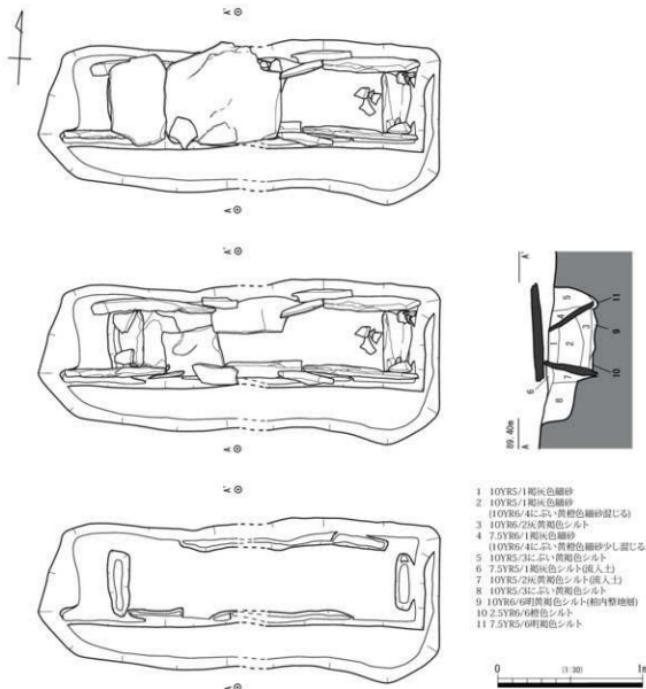
#### 埋葬施設

埋葬施設は箱式石棺であり、墳頂部平坦面の南側に位置する。棺の規模は、長軸1.77m、短軸0.41m、深さ0.30mを測る。主軸の方向はE-5°-Nと東西方向を向き、尾根に対して直交する。棺内には敷石等はなく、東側において石枕が認められた。なお、副葬品は出土しなかった。

棺の構造は、短側石を長側石で挟みこむようにして組まれており、「H」字形をなす。長側石は左右ともに綾長の板石を3枚用い、平縫ぎによって並べられる。長側石や短側石の縫目には、板石が置かれている。棺に用いられた板石の厚さは、長側石が5cm、短側石が10cmと、短側石の方がやや厚



第14図 越敷山75号墳



第15図 越敷山75号墳埋葬施設①

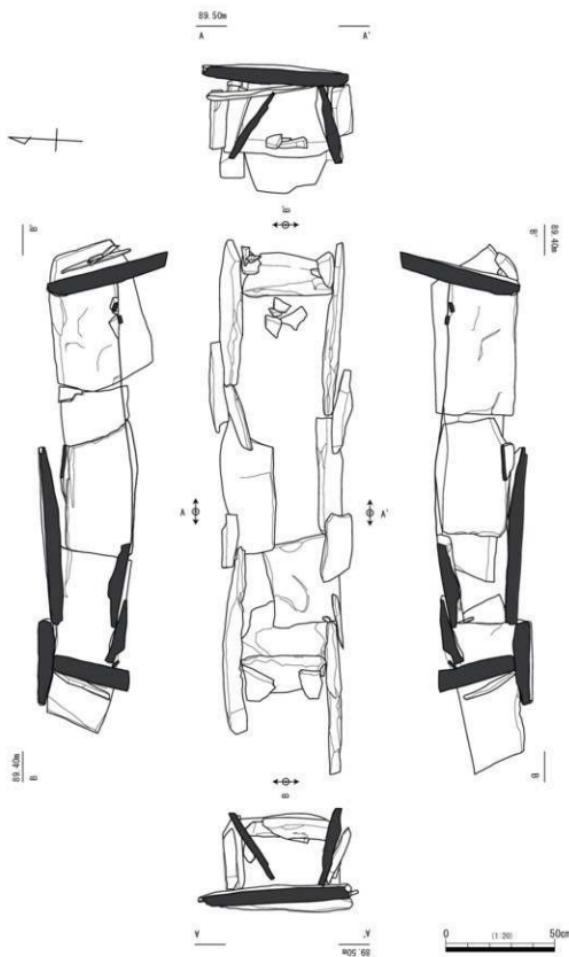
くなる。

蓋石は棺の西側において2枚確認したが、東側は後世に抜き取られており、失われていた。板状に割った石を使用しており、東側が大きい。これらは東から順に置かれており、西側の蓋石が東側の蓋石の上に乗る。

棺の掘り方は、歪な隅丸長方形を呈する。規模は長軸2.72m、短軸1.03m、深さ0.32mを測る。底面は二段に掘り込まれており、南側は底面に比べて12cmほど高くなる。北側の底面には石材を設置するための溝があり、これらは棺の上面を描るために、石材の大きさに合わせて掘り込まれている。

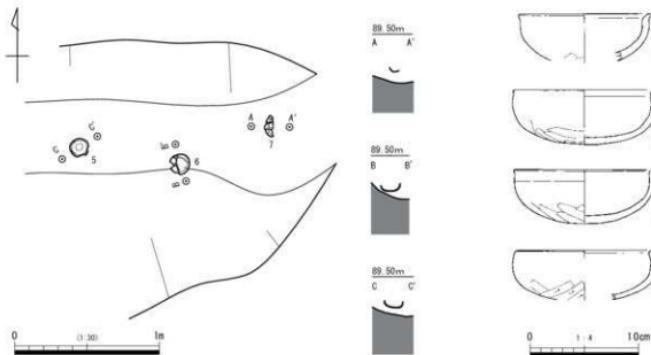
#### 出土遺物

遺物は周溝の東側において、底面からやや浮いた状態で5~7が出土したほか、埋土中から4が出土した。4~7は楕であり、底部においてヘラケズリが施される。時期は遺物の特徴から、古墳時代



第16図 越敷山75号墳埋葬施設②

中期後葉から後期前葉頃と考えられる。



第17図 越敷山75号墳遺物出土状況・出土遺物

第17図 土器観察表

遺物番号	遺構名	層位	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	施文・彫刻	色	調査
4	周溝	埋土	楕	Φ118	△43	—	外面：ナデ、ヘラケズリ、内面：ナデ	褐色	土器器
5	周溝	埋土	楕	127	50	—	外面：ナデ、ヘラケズリ、内面：ナデ	褐色	土器器
6	周溝	埋土	楕	127	50	—	外面：ナデ、ヘラケズリ、内面：ナデ	褐色	土器器
7	周溝	埋土	楕	Φ125	△46	—	外面：ナデ、ヘラケズリ、内面：ナデ	褐色	土器器

## 越敷山76号墳（第18～21図、PL.15・45・46）

T73-10d-2H-2e・3cグリッドにある。北へと下る丘陵の細い尾根上にあり、標高92m付近にある。すぐ北側には越敷山75号墳、南側には越敷山98号墳があり、その比高差は3.00mほどである。なお、本古墳の直上には近世以降と考えられる道があり、墳丘や埋葬施設の一部を溝状に破壊している。

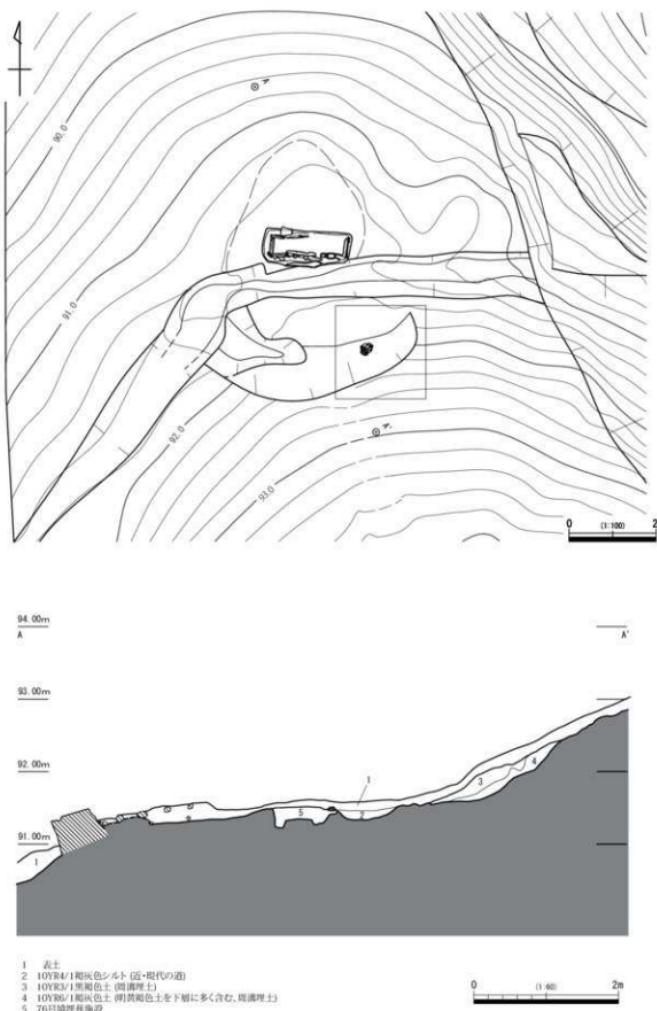
## 墳丘・周溝

墳丘は尾根の形状を利用して、周辺を削り出して墳形を整え、盛土をしたものとみられるが、土砂の流出によって盛土が失われ、形状は不明瞭である。しかし、南側において三日月形に周溝が掘り込まれていることから、本古墳は円墳であったと考えられる。規模は周溝内側で直径約5.00m、周溝を含めると約6.00mを測る。墳丘の高さは、北側の墳端から墳頂部までが0.26mであるが、南側の周溝底面と墳頂部では周溝底面の方が0.14m高くなる。

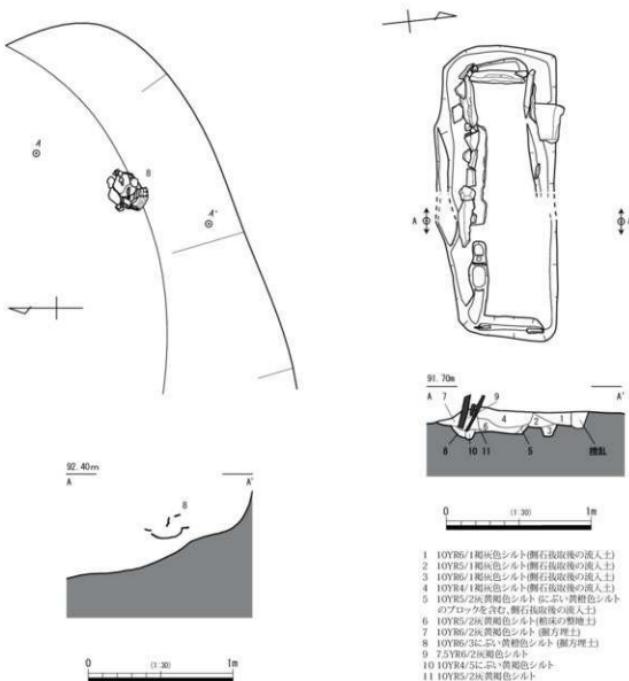
周溝は、尾根と直交する形で三日月形に掘り込まれているが、西側は近世の道によって失われている。規模は検出長4.60m、幅1.65m、深さ0.35mを測り、断面形は皿状を呈する。

## 埋葬施設

埋葬施設は箱式石棺であり、墳頂部平坦面の南側に位置する。後世の溝によって著しく壊されており残りは悪い。棺の規模は推定で、長軸1.64m、短軸0.34m、深さ0.24mを測る。主軸の方向はW-7°-Nと東西方向を向き、尾根に対して直交する。



第18図 越敷山76号墳



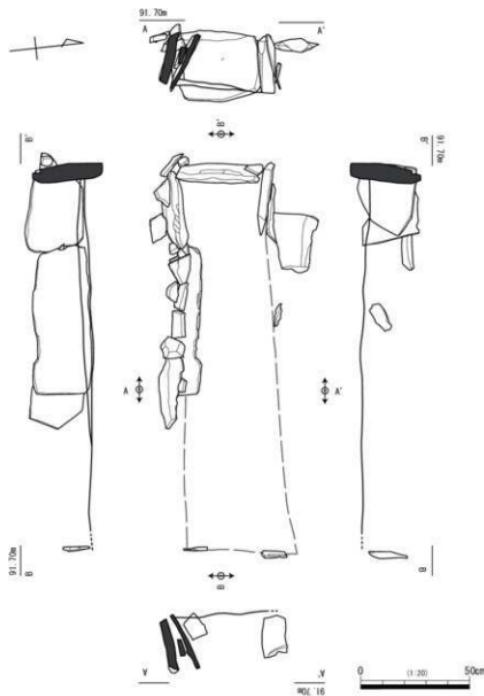
第19図 越敷山76号墳遺物出土状況・埋葬施設①



写真3 越敷山76号墳検査状況



写真4 越敷山76号墳埋葬施設検出状況



第20図 越敷山76号墳埋葬施設②

棺の構造は、短側石を長側石で挟みこむようにして組まれており、「H」字形をなす。板石の厚さは、長側石が5cm、短側石が10cmと、短側石の方がやや厚くなる。なお、掘り方と長側石や短側石の間には、板石が置かれる。棺床は灰黄褐色シルトが8cmほど盛られ整地がなされているが、敷石等は認められなかった。

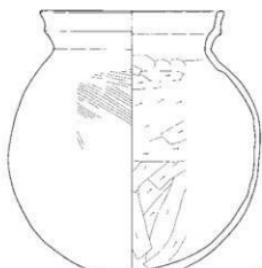
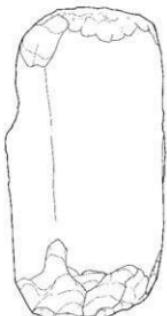
掘り方は、隅丸長方形を呈しており、規模は長軸2.01m、短軸0.81m、深さ0.16mを測る。二段に掘り込まれており、中心部分は一段低くなる。

#### 出土遺物

遺物は周溝の南東側において、底面からやや浮いた状態で8が出土したほか、埋土中からS1が出土した。8は甕であり、口縁部下端において鋭い稜が認められる。S1は敲石である。時期は出土遺



写真5 越敷山76号墳遺物出土状況



0 1.4 10cm

0 1.2 5cm

第21図 越敷山76号墳出土遺物

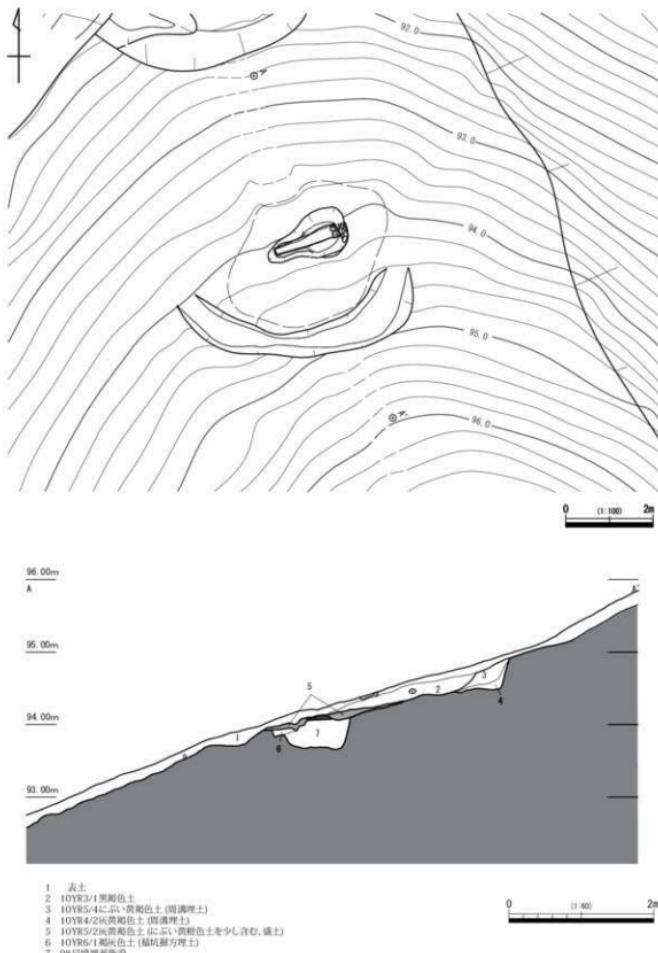
## 第21図 土器観察表

遺物 番号	遺構名	層位	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	施文・調査	色・調	備考
8	周溝	埋土	窓	φ15.7	△34.5	—	外面：ナデ、ハケメ、内面：ナデ、ヘラケズリ	にぶい黄褐色	土師胎、保付着

## 第21図 石器観察表

遺物 番号	遺構名	層位	器種	法量(cm・g)	備考
S1	周溝	埋土	砥石	最大長：14.5、最大幅：7.3、最大厚：6.1、重量：915.0	

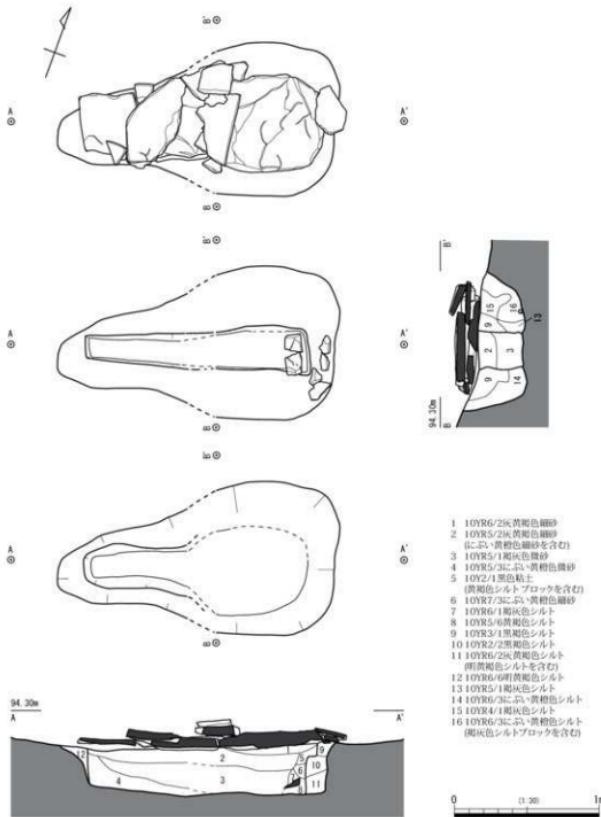
物から、古墳時代中期後葉から後期前葉と考えられる。



第22図 越敷山98号墳

## 越敷山98号墳 (第22・23図・PL.16・17)

T73-10d-2H-3d・3e・4d・4eグリッドにある。北へと下る丘陵尾根上にあり、標高94m付近にある。



第23図 越敷山98号墳埋葬施設

すぐ北側には越敷山76号墳、南側には越敷山122号墳があり、その比高差はそれぞれ3.00m、3.70mほどである。

#### 墳丘・周溝

墳丘は尾根の形状を利用して、周辺を削り出して墳形を整え、盛土したものとみられるが、盛土の

大半は流出してしまい埋葬施設の上面において僅かに残るのみである。このため、古墳の形状は不明瞭であるが<sup>6</sup>、南側において三日月形に周溝が掘り込まれていることから、円墳であったと考えられる。規模は周溝内側で直径約3.30m、周溝を含めると約4.00mを測る。墳丘の高さは、北側の墳端から墳頂部までが0.43mであるが、南側の周溝底面と墳頂部では、周溝底面の方が0.31m高くなる。

周溝は、尾根と直交する形で三日月形に掘り込まれている。規模は検出長5.40m、幅1.10m、深さ0.36mを測り、断面形は「L」字形を呈する。

#### 埋葬施設

埋葬施設は蓋石を伴う土坑墓であり、墳頂部平坦面のほぼ中央に位置する。棺の平面形は長方形を呈し、規模は長軸1.55m、短軸0.24m、深さ0.33mを測る。主軸の方向はE-20°-Nと東西方向を向き、尾根に対して直交する。棺床の東側には石枕が置かれるが、副葬品は認められなかった。

蓋石は板石が3枚並べられ、石の継ぎ目には板石が置かれる。また、その周辺においても隙間を埋めるためとみられる板石が置かれる。なお、棺の東側では、蓋石の下にそれを安定させるために置かれたと考えられる石を確認した。

墓壙の掘り方は、東側が幅広い歪な楕円形を呈しており、規模は長軸1.91m、短軸1.25m、深さは0.32mを測る。

#### 出土遺物

遺物は周溝や埋葬施設から出土しなかった。時期は周囲の古墳の状況から古墳時代中期後葉から後期前葉と考えられる。

#### 越敷山122号墳（第24～27図、PL.17・18・45）

T73-10d-2H-4d・4e・5d・5eグリッドにある。北へと下る丘陵の細い尾根上にあり、標高98m付近にある。本古墳のすぐ北側には越敷山198号墳があり、南側には123号墳がある。その比高差はそれぞれ3.70m、2.40mほどである。

#### 墳丘・周溝

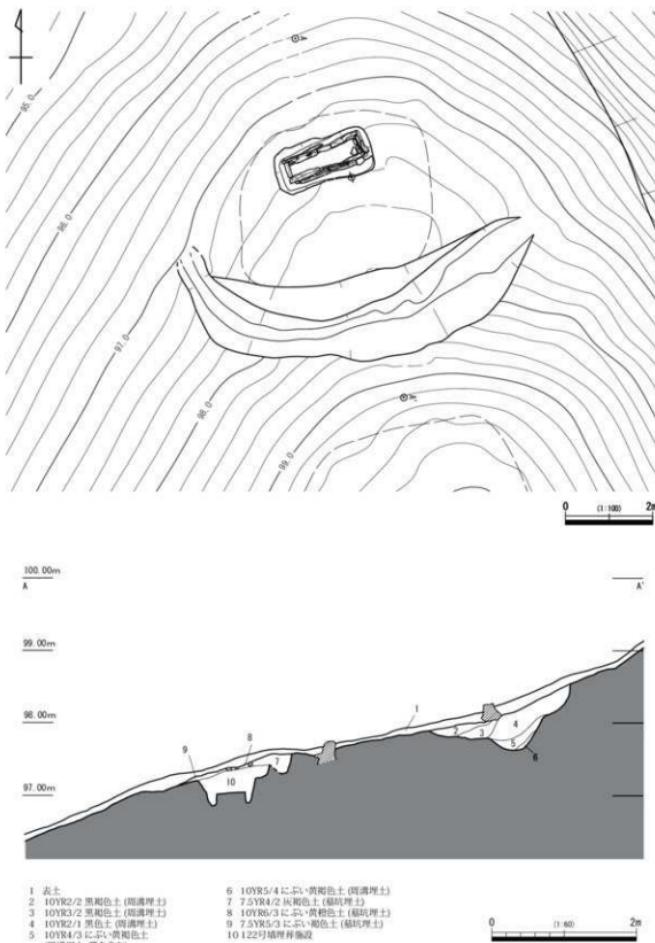
墳丘は尾根の形を利用し、周辺を削り出して墳形を整え、盛土をしたものとみられる。土砂の流出によって盛土が失われ、形状は不明瞭であるが、南側において三日月形に周溝が掘り込まれていることから、本古墳は円墳であったと考えられる。規模は周溝内側で直径約4.30m、周溝を含めると約5.80mを測る。墳丘の高さは、北側の墳端から墳頂部までが0.35mであるが、南側の周溝底面と墳頂部では、周溝底面の方が0.24m高くなる。

周溝は、尾根と直交する形で三日月形に掘り込まれている。規模は検出長8.00m、幅2.01m、深さ0.89mを測り、断面形は皿状を呈する。

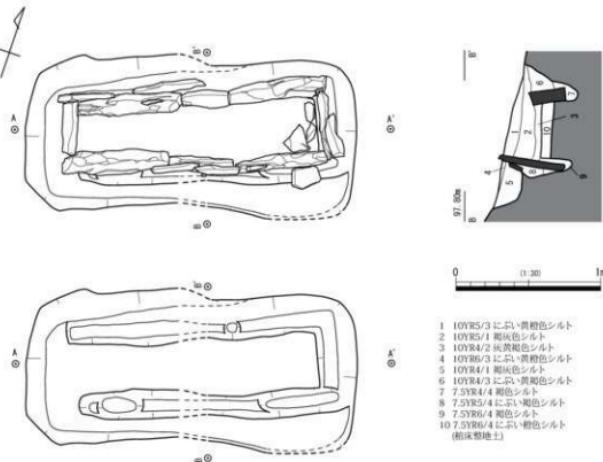
#### 埋葬施設

埋葬施設は箱式石棺であり、墳頂部平坦面の北側に位置する。棺の規模は、長軸1.71m、短軸0.39m、深さ0.30mを測る。主軸の方向はE-20°-Nと東西方向を向き、尾根に対して直交する。棺内には敷石等ではなく、東側において石枕が認められた。なお、副葬品は確認できなかった。

棺の構造は、南東側と北西側の長側石の端部に短側石を配置した「口」字形をなす。長側石は左右ともに縦長の板石を3枚用い、平継ぎによって並べられる。長側石の継ぎ目には、板石が配置される。棺に用いられた板石の厚さは5～10cmと、厚さの異なる石を用いている。蓋石との設置面は平坦にな



第24図 越敷山122号墳



第25図 越敷山122号墳埋葬施設①



第26図 越敷山122号墳出土遺物



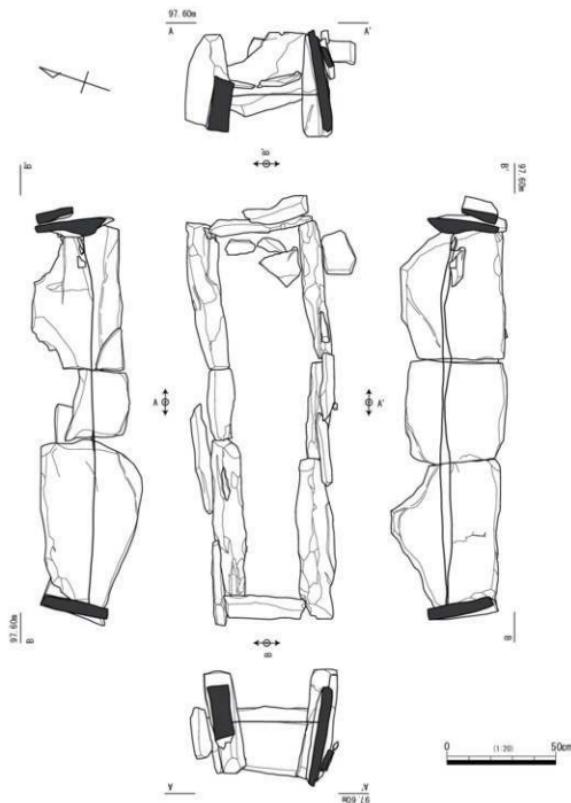
写真6 越敷山122号墳埋葬施設

第26図 土器観察表

遺物 番号	遺構名	幅	深	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	陶文・測量	色	溝	備考
9	周溝	底面	奥	甕	Φ79	15.5	—	外面：ナデ、ハケメ、内面：ナデ、ヘラケズリ	にぶい黄褐色	土御部、爪跡、黒斑有	

るよう整えられる。

棺の掘り方は、隅丸長方形を呈する。規模は長軸2.28m、短軸1.03m、深さ0.32mを測る。底面は二段に掘り込まれており、南側は底面より20cmほど高い段となる。北側の底面には石材を設置するため

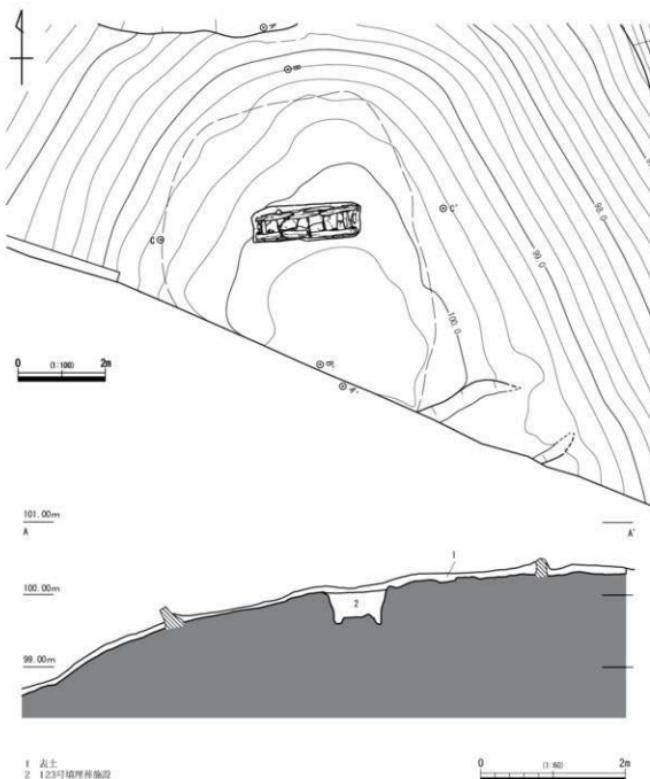


第27図 越敷山122号墳埋葬施設②

の溝が掘り込まれる。なお、底面には石棺の設置後に7cmほど土が盛られており、それを棺床としている。

#### 出土遺物

遺物は周溝埋土から9が出土した。9は土師器の壺であり、外面に指の圧痕が顕著にみられる。時



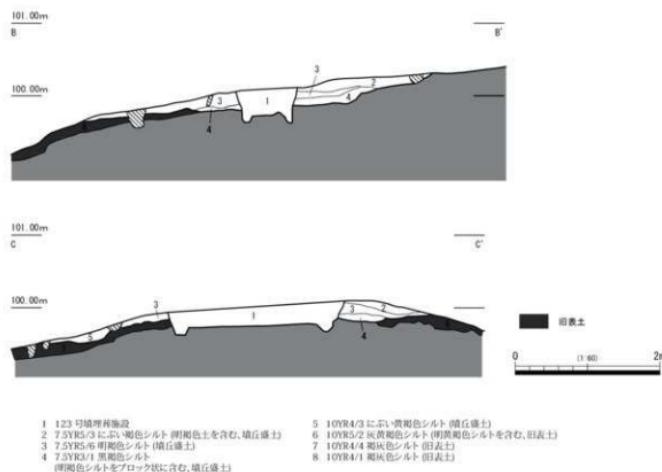
第28図 越敷山123号墳

期は出土遺物から、古墳時代後期前葉頃と考えられる。

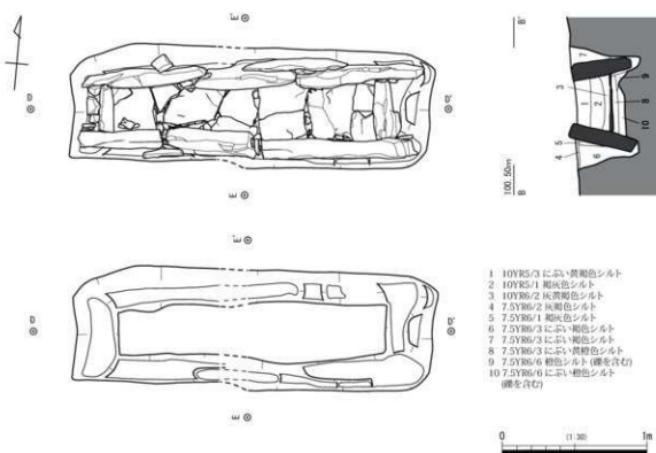
#### 越敷山123号墳（第28~32図、PL.19・46）

T73-10d-2H-5d・6dグリッドにある。北へと下る丘陵の細い尾根上にあり、標高100m付近にある。

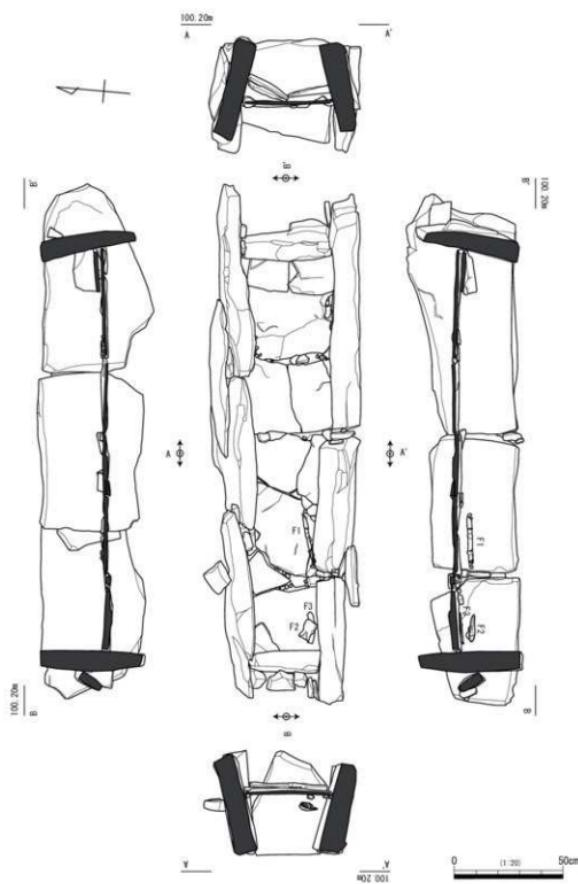
第3章 調査の成果



第29図 越敷山123号埴丘断面



第30図 越敷山123号埋葬施設①



第31図 越敷山123号埴埋葬施設②

南側約1/3は調査区外となるため、調査を行っていない。本古墳のすぐ北側には越敷山122号墳があり、その比高差は240mほどである。



第32図 越敷山123号墳出土遺物

第32図 鉄器観察表

番号	遺構名	層位	部種	法面 (cm)	備考
F1	埋葬施設	3	鉄剣	最大長：△218、最大幅：26、最大厚：0.7、重量：△627	
F2	埋葬施設	3	鉄鎌	最大長：146、最大幅：35、最大厚：0.6、重量：453	
F3	埋葬施設	3	鉄斧	最大長：85、最大幅：65、最大厚：12、重量：1674	

周溝は、尾根と直交する形で掘り込まれているようだが、大半が調査区外のため不明である。

#### 埋葬施設

埋葬施設は箱式石棺であり、墳頂部平坦面の北側に位置する。棺の規模は、長軸1.85m、短軸0.40m、深さ0.28mを測る。主軸の方向はE-5°-Nと東西方向を向き、尾根に対して直交する。棺床には板石

が敷かれ、東側には石枕がある。副葬品は棺の南西側で出土した。

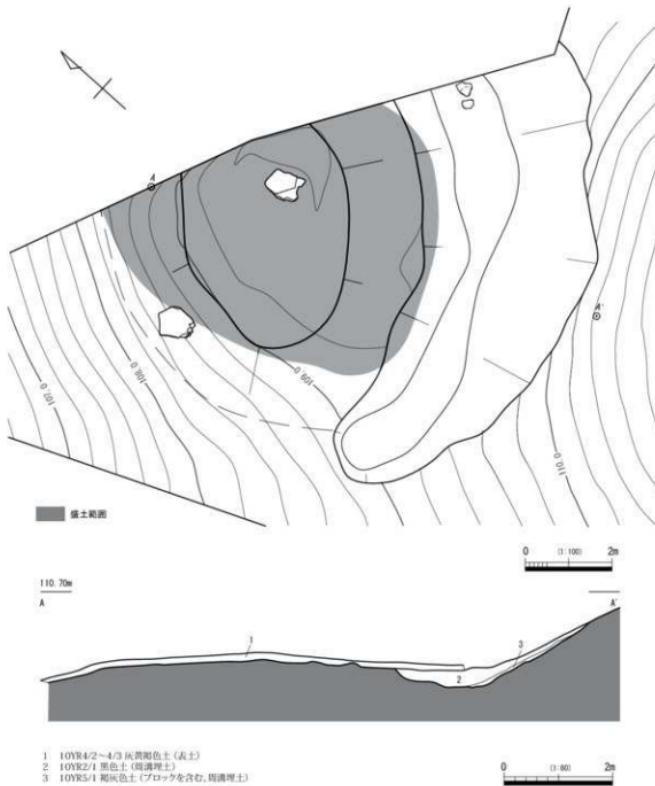
棺の構造は、短側石を長側石で挟みこむようにして組まれており、「H」字形をなす。長側石は左右ともに継長の板石を3枚用い、平縦ぎによって並べられる。長側石や短側石の継ぎ目には、板石が置かれる。棺に用いられた板石の厚さは10cmほどであり、厚手の石を使用している。長側石、短側石とともに蓋石との設置面は平坦に加工される。石の幅は40~50cmであり、概ね揃えられている。敷石は厚さ3cmほどの板石



写真7 越敷山123号墳遺物出土状況

#### 墳丘・周溝

墳丘は尾根の形状を利用して、周辺を削り出して墳形を整え、盛土をしたものと考えられる。盛土は埋葬施設を中心に250m四方で認められ、厚さは最大で0.45mであるが、相当量流出しているとみられる。古墳の形状は盛土の流出のため不明瞭だが、円墳と考えられる。規模は周溝内側で直径約8.00m、周溝を含めると10.50mを測る。墳丘の高さは、北側の墳端から墳頂部までが0.60m、南東側の周溝底面から墳頂部までが0.80mである。



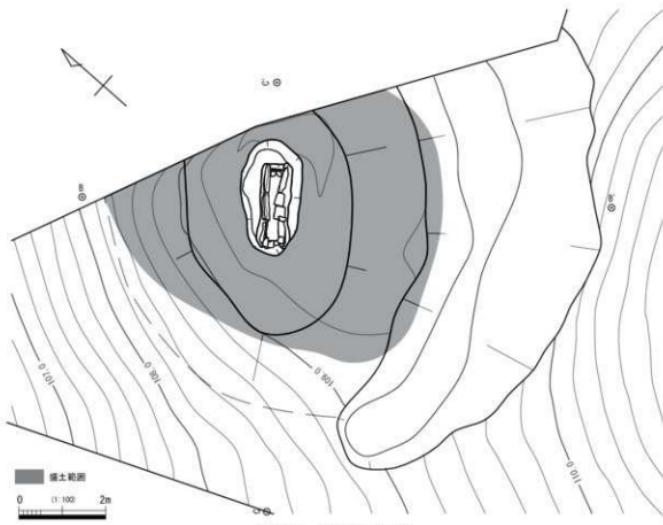
第33図 越敷山77号墳検出状況

を横長に配置し、石の隙間に小石が充填される。

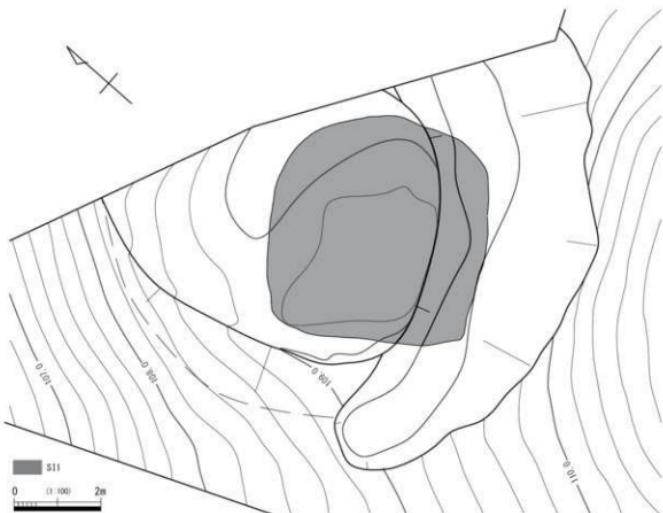
棺の掘り方、隅丸長方形を呈する。規模は長軸2.44m、短軸0.83m、深さ0.43mを測る。底面周囲には石材を設置するための溝が掘り込まれる。なお、底面には石棺の設置後に7cmほど土が盛られ、その上に板石を配置し、棺床としている。

#### 出土遺物

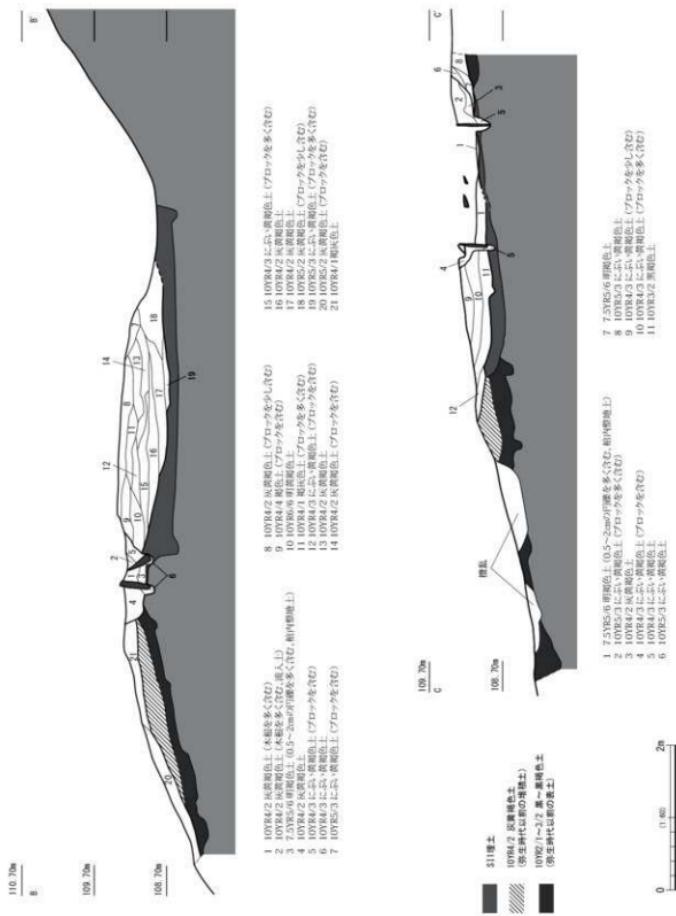
遺物は棺の南西側において、F1～3が出土した。F1は鉄剣であり、両端を欠く。F2は鉄鎌、F3は鉄斧である。時期は周囲の古墳の年代などから古墳時代中期後葉から後期前葉頃と考えられる。



第34図 越敷山77号墳



第35図 越敷山77号墳墳丘除去後



第36図 越敷山77号墳埴丘断面

### 越敷山77号墳（第33～38図、PL.20～22・46）

T73-10d-2H-8c・9b・9cグリッドにあり、標高109m付近にある。ここは丘陵尾根の頂部の先端にあたり、古墳のすぐ北側は北西へと下る斜面となる。南東側には越敷山149号墳があり、これを切る。また、北側には越敷山125号墳がある。なお、西側の1/3は調査区外となるため、今回調査を行っていない。

調査前は墳丘の中心付近に若干落ち込みがみられ、埋葬施設に伴うと考えられる石材の一部が露出していた。表土除去後、墳丘の東側と北西側において蓋石とみられる石材を確認した。これらは後世に動かされており、元の位置を保っていなかった。また、調査前に落ち込みがみられた場所には埋葬施設の掘り方が認められた。

調査はまず埋葬施設から着手し、次いで墳丘を取り掛かることとした。調査の結果、周溝や盛土のほか、埋葬施設1基を確認した。なお、墳丘の盛土除去後にいて堅穴建物（SI1）を検出した。SI1は窪んだ状態で確認されたことから、この周辺は古墳築造直前まで窪地であったとみられ、丘陵尾根をカットした段状の地形となっていたと考えられる。本古墳はこのような地形を利用して築造されたと思われる。

#### 墳丘・周溝

本古墳は盛土や周溝の状況から円墳と考えられる。規模は周溝内側で直径約8.00m、周溝を含める12.00mを測る。墳丘の高さは、北西側の墳端から墳頂部までが1.00m、南東側の周溝底面から墳頂部までが0.50mである。

墳丘は周囲を掘削し、墳形を整えた後、盛土をして築造したと考えられる。ただし、先にも述べたとおり、盛土除去後に窪んだ堅穴建物（SI1）を確認したことから、越敷山49・51号墳のように、盛土を行う前に周辺を平坦に整えなかつたと思われる。盛土の厚さは最大で0.67mであり、盛土の総数は約11.00m<sup>3</sup>である。

盛土については、その外表側に土手を巡らせ、土手の内部を充填していく方法で土が盛られており、越敷山49・51号墳と概ね共通する。その手順については、以下の5つの工程によって行われたと考えられる。

第1工程：墳丘の外表側に土手を築く（B-B'：17～19層C-C'：11・12層）。

第2工程：土手の間の窪みに盛土を充填し、平坦にする（B-B'：14～16層）。

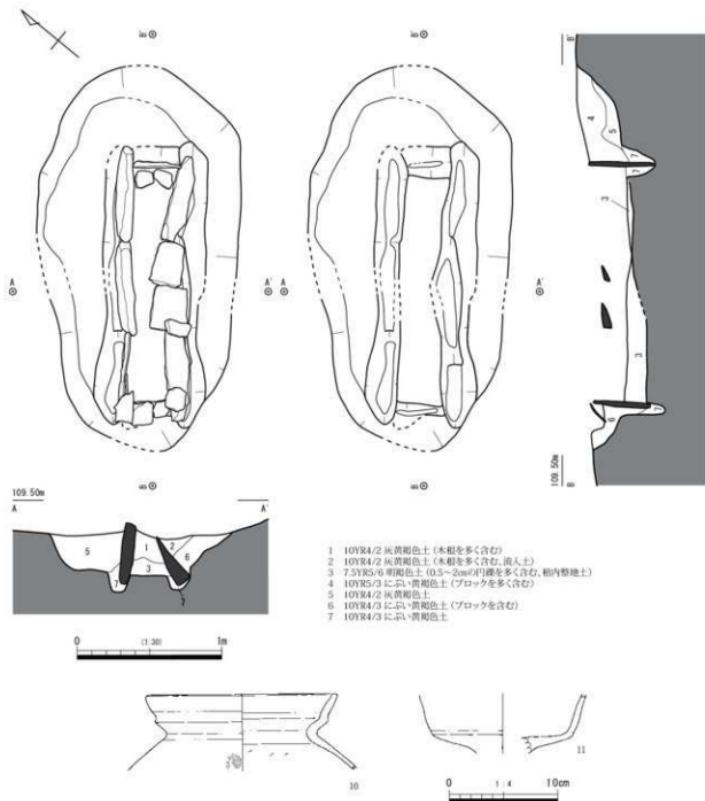
第3工程：墳丘の外表側に土手状に土を盛る（B-B'：11～13・21層）。

第4工程：中心部の窪みに土を充填する（B-B'：9・10層、C-C'：9・10層）。

第5工程：土を盛り、形を整える（B-B'：7・8層）。

なお、埋葬施設については、第4工程が終了以降に築かれたと考えられるが、第5工程との関係については定かでない。また、盛土には旧表土と地山を破碎した土の混合土を用いているが、第1工程と第3工程で用いられた土には旧表土が多く含まれている。

周溝は、尾根と直交するようにして斜面上方を半月形に掘削しており、検出長9.80m、幅4.00m、深さ0.36mを測る。



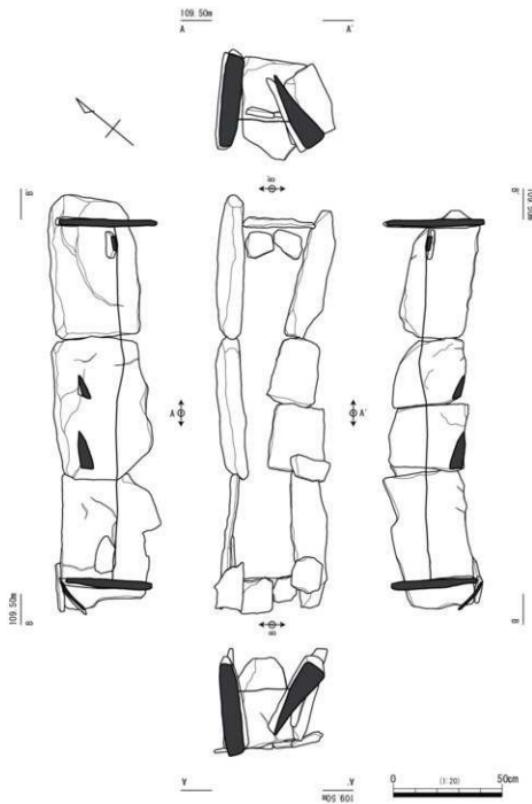
第37図 越敷山77号埴埋葬施設①・出土遺物

第37図 土器観察表

遺物 番号	遺構名	縁 状	器 種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	施文・調整	色 調	備 考
10	埴丘 最下層	要	串	φ17.2	△7.0	—	外面：ナデ、ハケメ。内面：ナデ。ヘラケズリ	黄褐色	土師器、黒斑有
11	別溝 埋土	高杯	—	—	△5.6	—	外面：ナデ。内面：調整不明	棕色	土師器

## 埋葬施設

埋葬施設は箱式石棺であり、埴丘のやや南西よりに位置する。調査前の状況は、蓋石の大半は抜き取られており、丘陵の北西側や埋葬施設付近で動かされた状態で認められた。また、棺内は窪んでお



第38図 越敷山77号墳埋葬施設②

り、腐植土が充填していた。

石棺の規模は長軸1.63m、短軸0.24m、深さ0.35mを測る。主軸の方向はW-40°-Nと北東から南北方向を向く。棺床は円礫の混じる土で整地されているが敷石などは認められなかった。東側には石枕があり、長さ15cmほどの板石を2枚、並べて置かれる。副葬品は出土しなかった。

棺の構造は、短側石を長側石で挟みこむようにして組まれており、「H」字形をなす。長側石は左

右ともに3枚の板石を用い、平継ぎによって並べられる（北東側は4枚に見えるが、中央の石が2枚に割れただけであり、3枚である）。石の継ぎ目には部分的に板石が配置され、西側の短側石の上には、蓋石との隙間を埋めるためであろうか、板石が4枚置かれる。長側石や短側石に用いられた板石は、長さ58~65cm、幅34~43cmとほぼ同じ大きさである。厚さは北東側の2枚が約10cmと厚みがあるのに対し、そのほかは約5cmと薄い。長側石、短側石とともに蓋石との設置面は平坦に加工される。

棺の掘り方は、東側がやや膨らむ歪な楕円形を呈しており、一部、地山まで到達する。規模は長軸2.90m、短軸1.29m、深さ0.44mと棺に対してやや広くなる。

この南西隅に棺を配置しており、その底面では石棺を設置するための溝が認められる。

#### 出土遺物

遺物は、SI1の検出面にあたる盛土の最下面において10、盛土中から11が出土した。ともに土師器であり、10が甕、11が高杯である。時期は出土遺物から古墳時代中期中葉頃と考えられる。

#### 越敷山49号墳（第39~48図、PL.23~26・46）

T73-10d-2H-9a・9b・9c・10a・10b・10c、3H-1a・1b・1cグリッドにあり、標高111m付近にある。丘陵尾根の頂部の比較的平坦な場所に位置しており、眺望が良い。北西側は越敷山77号墳によって切れられ、南東側は越敷山51号墳を切る。

調査の結果、墳丘、周溝の他、埋葬施設2基を確認した。

#### 墳丘・周溝

本古墳は円墳であり、南側には幅1.60m、深さ0.32mの周溝が認められる。墳丘は周辺を削り出しで墳形を整え、盛土をしたものと考えられる。盛土の厚さは最大で0.70mほどであり、その総数は約45.8m<sup>2</sup>である。規模は周溝内側で直径19.00m、周溝を含めると20.3mを測る。墳丘の高さは、北側の墳端から墳頂部までが約2.30m、周溝底面から墳頂部までが約1.90mである。

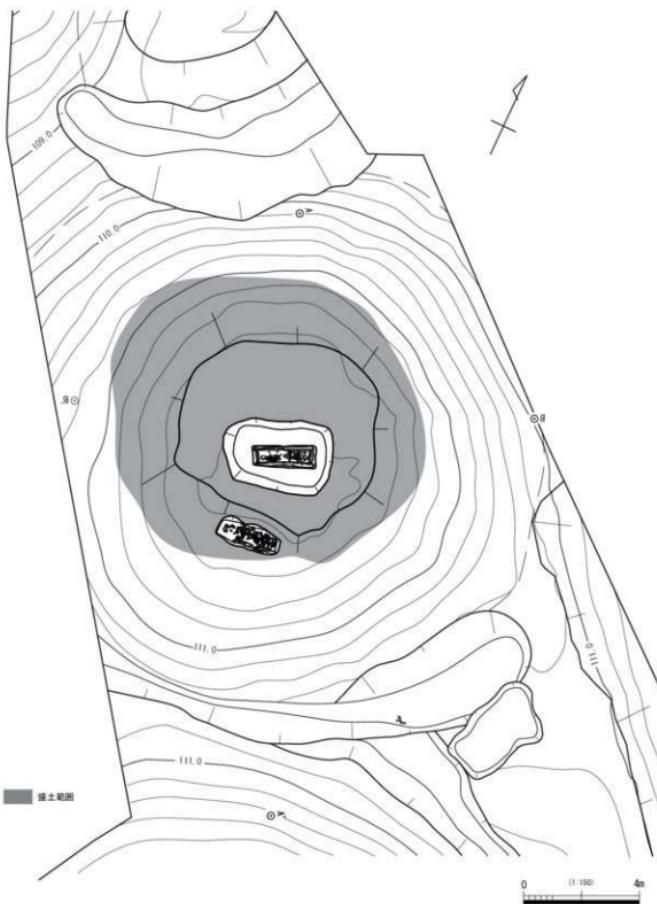
墳丘盛土の下には竪穴建物があり（SI2）、この埋土上層には人為的に埋めたとみられる地山ブロックを多量に含む土が堆積していることから、墳丘構築直前まで窪地であったと思われる。また、越敷山77号墳の直下にも竪穴建物があり、北西側は段状の地形であったと考えられる。

墳丘は周囲を円形に削り出し、古墳の形状を整え、盛土を行う範囲にある窪地を埋め、周囲を削り平坦な状態にしたうえで、土を盛り築造したと考えられる。盛土を行う手順については、窪地を埋める工程を含め、以下に示す3つの工程で行われたと思われる。なお、埋葬施設は第3工程の後に設置されたようである。

第1工程：窪地を埋める（B-B'：25~28層）。埋め方は南東から北西方向、すなわち斜面上方から下方へと順に埋めていき、さらに中心部の窪んだ場所へ、平坦になるまで土を充填する



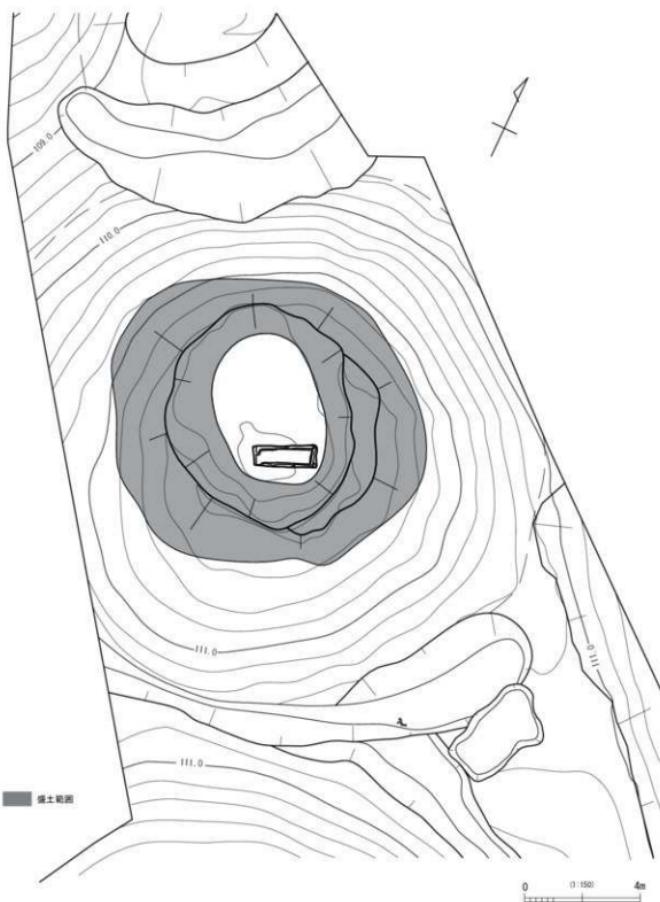
写真8 越敷山77号墳埋葬施設



第39図 越敷山49号墳

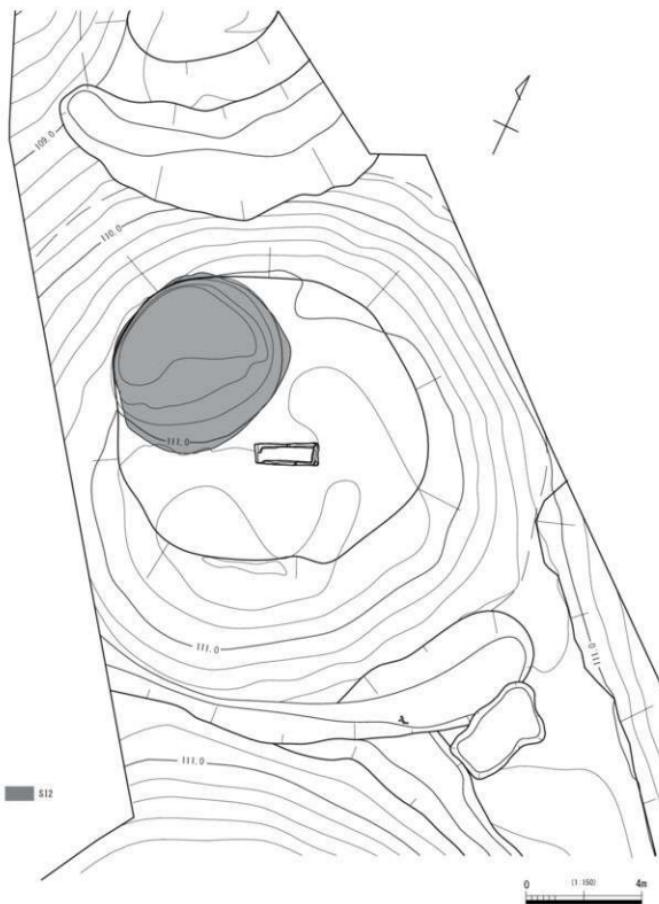
(堅穴建物の埋まり方については第77・78図参照)。

第2工程：墳丘の外表側に土手を巡らす（A-A'：26~31層、B-B'：13~24層）。ここには旧表土と  
みられる黒褐色土や黒褐色土と地山ブロックを混ぜ合わせた土が主に用いられる。



第40図 越敷山49号墳墳丘除去状況①

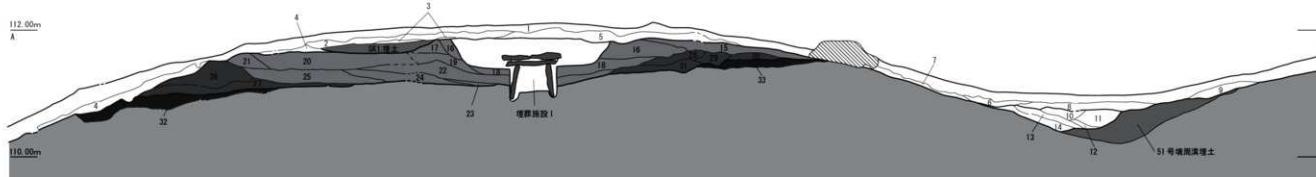
第3工程：土手の中心の窪みに土を充填する（A-A'：15～25層、B-B'：8～12層）。ここには主に地山を破碎した土が用いられる。



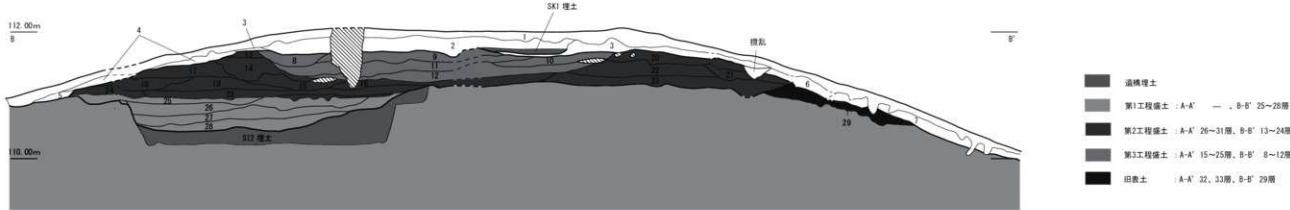
第41図 越敷山49号墳墳丘除去状況②

#### 埋葬施設 1

埋葬施設 1 は、墳丘のやや南側に位置する。墓壙の掘り方を約30cm掘り下げたところで箱式石棺を確認した。この石棺は未盗掘の状態であった。規模は、長軸1.75m、短軸0.49m、深さ0.31mを測る。

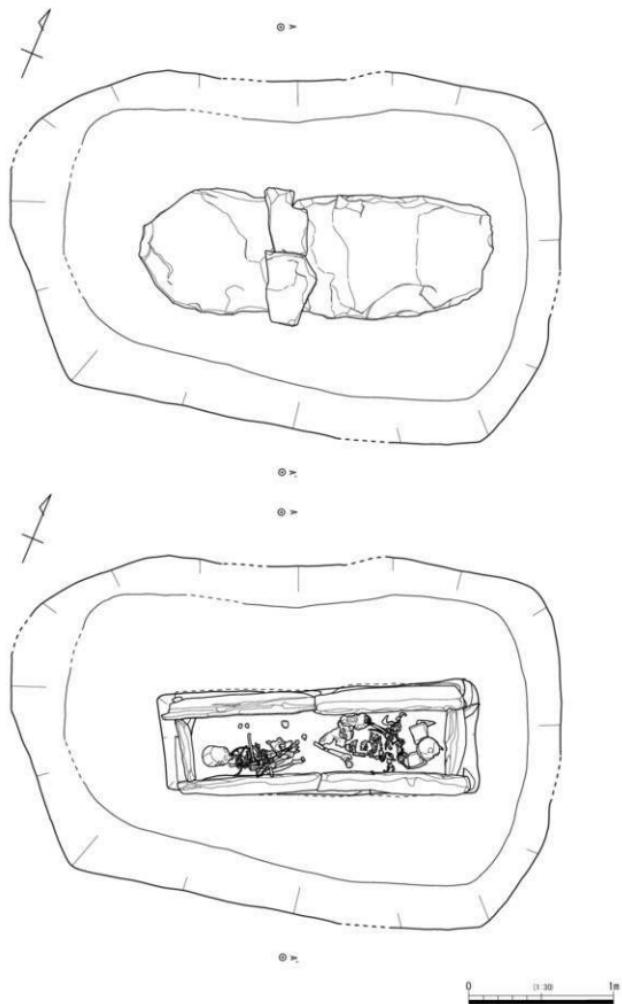


- 1 表層土  
2 10YR4/1 和灰褐色砂  
3 10YR6/3 黄褐色シルト  
4 10YR6/2 黄褐色シルト  
5 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト (明黄色シルトブロックを含む)  
6 10YR5/2 黄褐色シルト  
7 2.3Y7/4 浅黄色シルト  
8 7.5YR6/1 和灰褐色シルト  
9 7.5YR6/2 黄褐色シルト  
10 10YR5/1 和灰褐色シルト  
11 10YR2/1 黑色シルト  
12 10YR4/1 壤灰色シルト  
13 2.5Y5/2 明黄色シルト  
14 10YR5/1 黄褐色シルト (明黄色シルトブロックを含む)  
15 7.5YR5/3 にぶい黄色シルト  
16 10YR6/9 にぶい黃褐色シルト (黄褐色シルトブロックを含む)  
17 10YR6/1 黄褐色シルト  
18 7.5YR9/3 にぶい黃褐色シルト (黄褐色シルトブロックを含む)  
19 10YR6/1 壤灰色シルト (明黄色シルトを含む)  
20 10YR6/1 黄褐色シルト (明黄色シルトブロックを多く含む)  
21 10YR6/4 にぶい黃褐色シルト (明黄色シルトを含む)  
22 10YR7/6 明黄色シルト (ミス、黄色細砂を含む)  
23 7.5YR7/4 にぶい褐色シルト  
24 10YR5/1 壤灰色シルト (明黄色シルトブロックを含む)  
25 10YR6/1 黄褐色シルト (明黄色シルトブロックを少しある)  
26 10YR6/1 壤灰色シルト  
27 7.5YR6/2 壤灰色シルト  
28 10YR6/1 黄褐色シルト  
29 10YR6/1 壤灰色シルト (明黄色シルトブロックを含む)  
30 7.5YR5/1 壤灰色シルト  
31 10YR6/1 黄褐色シルト (明黄色シルトブロックを含む)  
32 10YR5/1 黑褐色シルト  
33 10YR4/1 壤灰色シルト

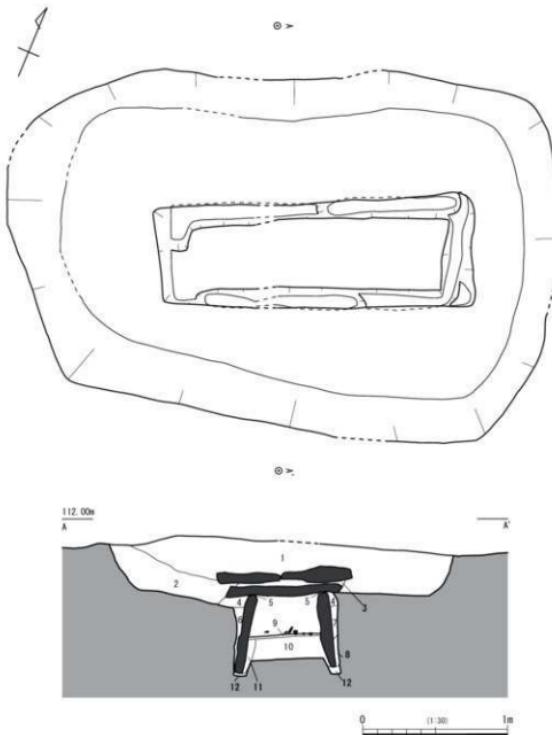


- 1 蔵土  
2 10YR4/1 壤灰色砂  
3 10YR6/1 黄褐色シルト  
4 10YR5/2 壤灰色シルト (にぶい黄褐色シルトブロックを含む)  
5 10YR6/1 壤灰色シルト  
6 10YR5/1 黄褐色シルト  
7 10YR6/1 黄褐色シルト  
8 10YR6/1 壤灰色シルト  
9 2.5Y6/1 黄褐色シルト  
10 7.5YR6/3 にぶい褐色シルト (黄色シルトブロックを含む)  
11 10YR6/1 壤灰色シルト (明黄色シルトを含む)  
12 10YR7/6 明黄色シルト (ミス、黄色細砂を含む)  
13 10YR6/1 黄褐色シルト (明黄色シルトブロックを含む)  
14 10YR6/1 壤灰色シルト (明黄色シルトブロックを含む)  
15 7.5YR3/1 黑褐色シルト (植物シルトブロックを含む)  
16 10YR5/1 壤灰色シルト (明黄色シルトブロックを含む)  
17 10YR6/1 黄褐色シルト (明黄色シルトブロックを含む)  
18 10YR4/1 壤灰色シルト (明黄色シルトブロックを多く含む)  
19 10YR4/1 壤灰色シルト  
20 10YR6/1 壤灰色シルト (明黄色シルトを含む)  
21 10YR4/2 黄褐色シルト  
22 10YR5/1 壤灰色シルト (にぶい黄褐色シルトブロックを含む)  
23 10YR4/1 壤灰色シルト  
24 10YR4/1 壤灰色シルト  
25 10YR5/2 黄褐色土  
26 10YR6/3 にぶい黄褐色土 (ブロックを含む)  
27 10YR6/1 黄褐色土 (ブロックを多く含む)  
28 10YR6/1 黄褐色土 (ブロックを少し含む)  
29 10YR4/1 壤灰色シルト (田表土)

第42図 越敷山49号墳填丘断面



第43図 越敷山49号墳埋葬施設 1 ①

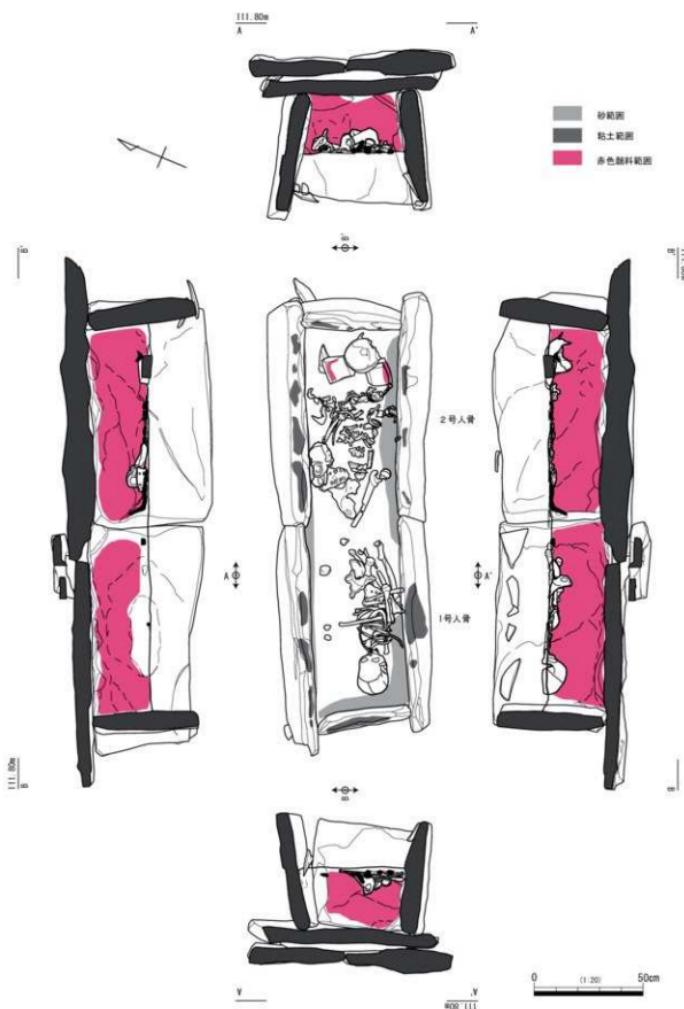


- |  |                                   |
|--|-----------------------------------|
| 1 7.SYR 4/3 黄褐色シルト<br>(土器陶片に2つ、褐色のロームブロック含む) | 7 10YR 6/3に近い黄褐色シルト(黄褐色シルトブロック含む) |
| 2 7.SYR 3/4 暗褐色シルト<br>(にごい褐色のロームブロック含む)      | 8 10YR 4/3に近い黄褐色シルト               |
| 3 10YR 7/4に近い黄褐色粘土                           | 9 10YR 5/2 桂葉褐色細砂粘土               |
| 4 10YR 4/4褐色砂砾                               | 10 7.5YR 5/6 明瞭褐色細砂(淀山川チップを多く含む)  |
| 5 7.5YR 7/3-5/5 橙色粘土(礫石と側石の間の付帯)             | 11 10YR 7/6 明瞭褐色細砂                |
| 6 10YR 6/6明褐色シルト                             | 12 7.5YR 4/1 暗灰色シルト               |

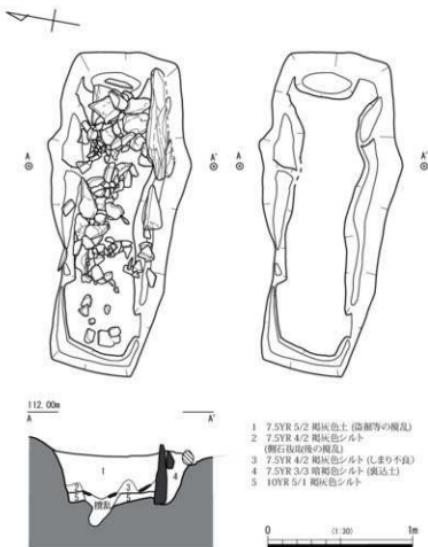
第44図 越敷山49号墳埋葬施設 1 ②

主軸の方向はW-14°-Nと東西方向を向く。棺内には人骨が2体確認されたが、副葬品は出土しなかった。

棺の構造は、短側石を長側石で挟みこむようにして組まれており、「H」字形をなす。北東側の長



第45図 越敷山49号墳埋葬施設1③



第46図 越敷山49号墳埋葬施設②①

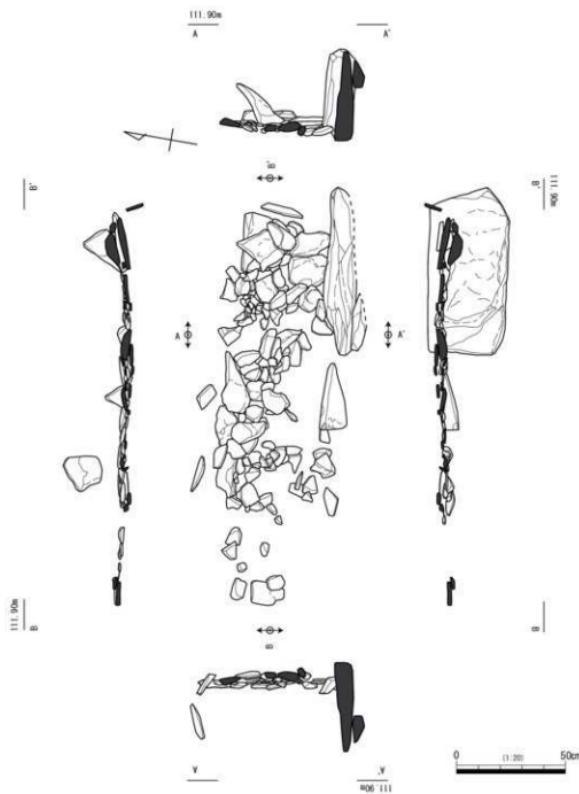
央にあり、長軸2.16m、短軸0.72m、深さ0.48mの長方形をなす。下段の底面には石棺を設置するための溝が掘られる。なお、底面には石の剥片を多く含む土が15cmほど盛られ、その上に薄く白色の砂を敷き、棺床としている。

棺内には2体の人骨が埋葬されていた。西側にある人骨（1号人骨）は、顔面を東側に向けた状態で置かれているが、その下に石枕は配置されていない。頭蓋骨以外の骨は、その東側にまとめられており、人体の正常な位置を保っていない。このため、追葬時に動かされたか、再葬されたものと考えられる。なお、顔の表面に赤色顔料（水銀朱）が塗布されている。性別は女性であり、年齢は15～17歳頃と考えられる。2号人骨は赤色顔料が付着した石枕の上に頭蓋骨が置かれている。頭蓋骨以外の骨は、棺の東半分にわたり散乱しており、埋葬後に動かされた可能性がある。性別は男性であり、年齢は熟年である。なお、人骨については第4章第2節に鑑定結果を掲載しているため、そちらを参照されたい。

側石の端部、短側石との接合部分には溝が彫られる。長側石は左右ともに2枚の板石を用い、平縫ぎによって並べられる。長側石や短側石に用いられた板石は、ほぼ統一されており、長側石は長さ1.00m、幅0.60m、厚さ0.08mほどの長方形、短側石は長さ0.50m、幅0.50m、厚さ0.10mほどの方形を呈する。長側石、短側石とともに蓋石との設置面は平坦に加工され、そこには石棺を密閉するための目張りとして用いられた粘土がみられる。内面には赤色顔料が塗布されている。

蓋石は、大型の板石2枚からなり、東側は長さ1.39m、幅0.86m、厚さ0.07mの長方形、西側は長さ1.04m、0.88m、0.07m五角形状を呈する。蓋石の縫合目には粘土で目張りをした後、2つに分割した板石を配置する。

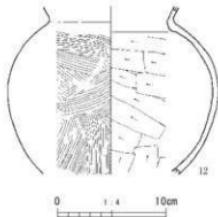
棺の掘り方は、2段に掘り込まれており、上段は長軸3.73m、短軸2.38m、深さ0.35mを測る正な梢円形を呈し、下段はそのほぼ中



第47図 越敷山49号墳埋葬施設2②

**埋葬施設2**

埋葬施設2は箱式石棺であり、墳丘の南側に位置する。長側石、短側石とともに大半が抜き取られており、南東側の長側石のみが残存する。このため棺の詳細は不明である。棺の規模は推定で長軸1.92m、短軸0.66m、深さ0.34mを測る。主軸の方向はW-7°-Nと埋葬施設1とはほぼ同じ方向を向く。棺床には拳大もしくはそれ以下の石が敷かれており、東側の隅では石枕が置かれている。副葬品は出土しな



第48図 越敷山49号墳出土遺物



写真9 越敷山49号墳遺物出土状況

## 第48図 土器観察表

遺物 番号	遺物名	種 別	形 状	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	施文・調査	色 調	備 考
12	圓盤	上層	要	—	△15.4	—	外面：ナデ。ハケメ。内面：ナデ。ヘラケズリ	に赤い黄褐色	土師部、保付着、黒斑有

かった。

棺の掘り方は正な長方形を呈し、規模は長軸2.23m、短軸0.90m、深さ0.32mを測る。底面の周間に石棺を設置するための溝が掘られる。

#### 出土遺物

遺物は埋葬施設内から出土しなかつたが、周溝の埋土中から12が出土した。12は土師器の甕である。時期は出土遺物や越敷山51号墳と77号墳との関係から、古墳時代中期中葉頃と考えられる。

#### 越敷山51号墳（第49～70図、PL. 3～7・27～34・46・48）

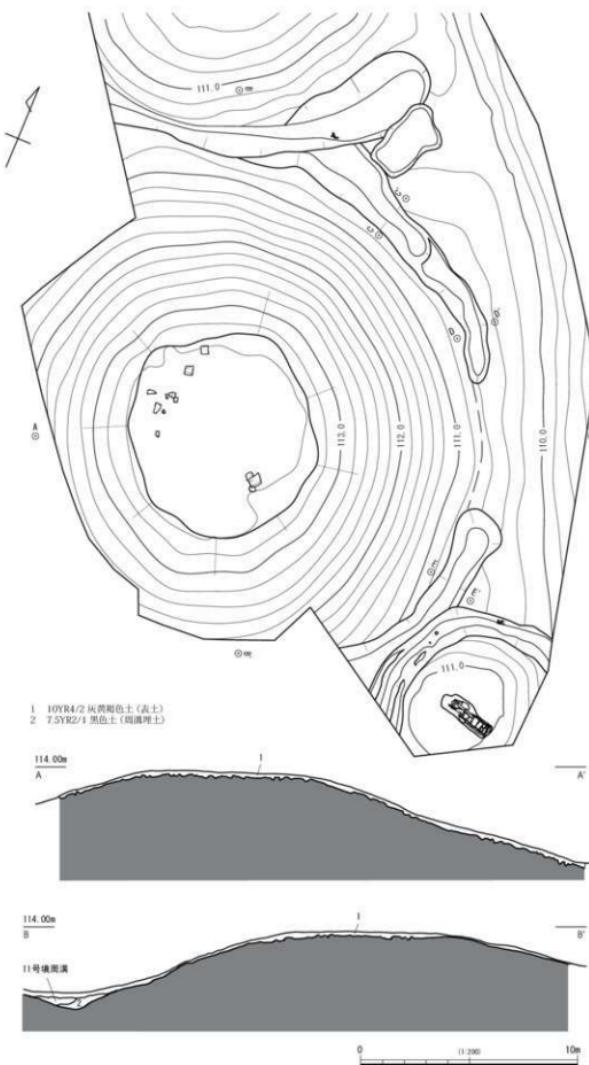
T73-10d-3G-1j・2j・3j、3H-1a・2a・3a・1b・2b・3bグリッドにある。ここは丘陵尾根の頂部にあたり、比較的平坦な地形となる。標高113m付近と調査区の中でも最も高所にあり、眺望が良い。北側には越敷山49号墳、南東側には越敷山99号墳があり、これらに切られる。また、南西側には越敷山52号墳がある。なお、西側の1/4は調査区外となるため、今回調査を行っていない。

調査前は墳頂部に石材の一部が露出していた。表土除去後、東側と西側において箱式石棺の一部とみられる石材が散乱していた。なお、墳頂部には盜掘坑とみられる土坑や破壊された埋葬施設などが確認されなかつたことから、本古墳の埋葬施設に伴う石材ではないと思われる。

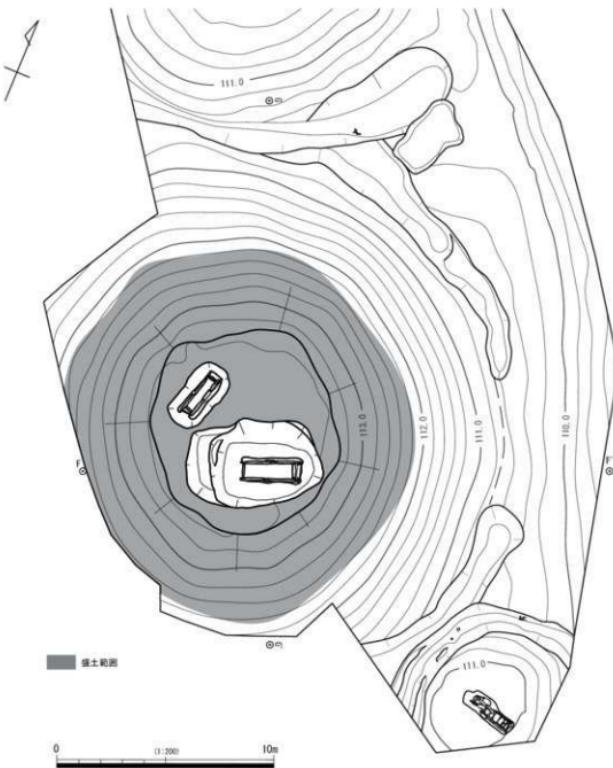
調査の結果、墳丘、周溝のほか、埋葬施設2基を確認した。このうち埋葬施設1は構築墓壙であり、埋葬施設の設置および埋葬と墳丘の築造が同時進行で行われている。また、埋葬施設1は追葬が行われており、墳丘頂部には、この時の掘り方が認められる。

#### 墳丘・周溝

本古墳は円墳であり、東側には幅2.00m、深さ0.40mの周溝が巡る。ただし、途中で5.50mほど途切れる。なお、西側については、越敷山49・99号墳に切られること、調査区外にあることから確認できなかつた。



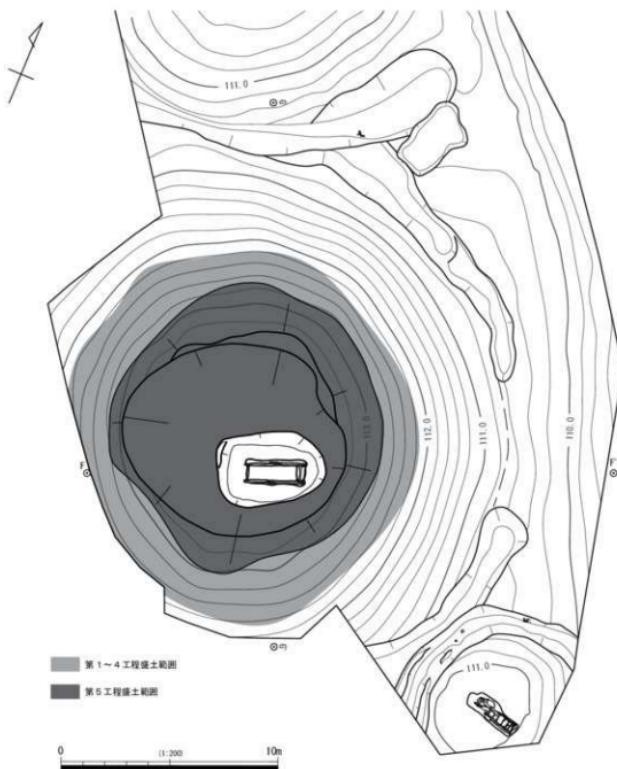
第49図 越敷山51号墳検出状況



第50図 越敷山51号墳

墳丘は周辺を削り出して墳形を整え、盛土をしており、盛土の厚さは最大で1.15mを測る。また、盛土の総面積は205.50m<sup>2</sup>である。規模は周溝内側で直径25.00m、周溝を含めると27.00mを測る。墳丘の高さは、墳端から墳頂部までが約2.90m、周溝底面から墳頂部までが約3.00mである。

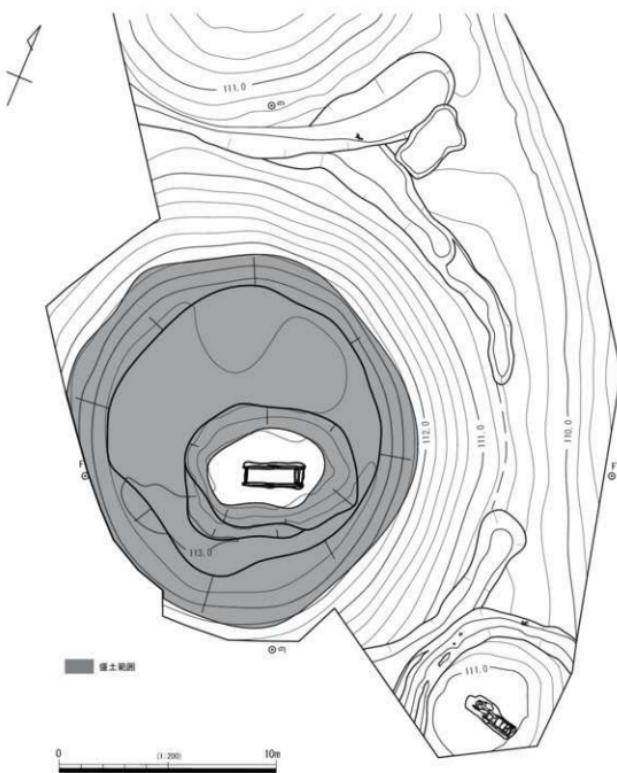
墳丘は周囲を円形に削り出し、古墳の形状を整え、盛土を行う範囲を削り、平坦な状態にしたうえで土を盛り、築造したと考えられる。盛土を行う手順については、以下に示す6つの工程で行われた



第51図 越敷山51号墳墳丘除去状況①

と思われる。なお、先にも述べたが、埋葬施設1は構築墓壙であり、埋葬行為と墳丘の築造が並行して行われている。

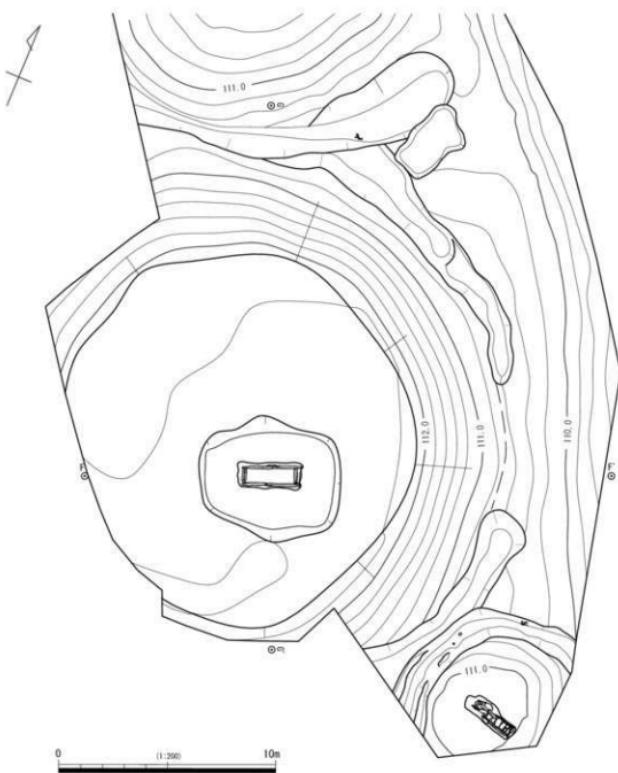
第1工程：埋葬施設1の周辺を除く、ほぼ全域にわたり薄く土を盛る（F-F'：68～79層、G-G'：80～87層）。



第52図 越敷山51号墳墳丘除去状況②

第2工程：石棺を設置し、その周間に土を盛り固定する（F-F'：62～66層、G-G'：72～78層）。この盛土中には石棺を調整する際に生じたと考えられる剥片が含まれており、この時点での石材の最終調整をしたとみられる。

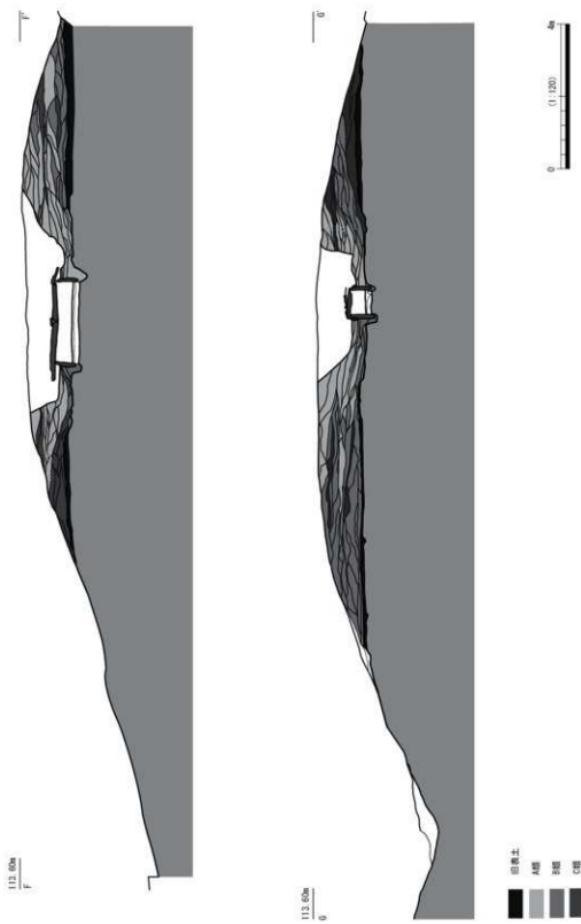
第3工程：墳丘の外側に土手を巡らす（F-F'：36～59層、G-G'：32～69層）。北側の土手の幅が広くなる部分については、断面三角形の小丘をつくり（F-F'：58層、G-G'：52・53層）、その外側と内側に土を盛り拡張する。



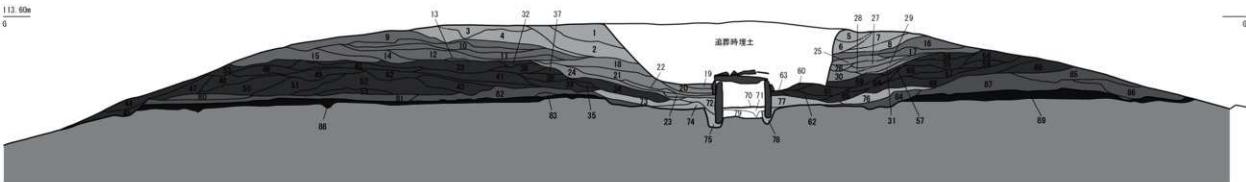
第53図 越敷山51号墳埴丘除去後

第4工程：土手の中心の窪みに土を充填する（F-F'：23～35層、G-G'：18～31層）。なお、第4工程の盛土の高さは、ほぼ石棺の蓋石と同じになることから、この工程の終了時にはすでに被葬者の埋葬が終えていたと考えられる。

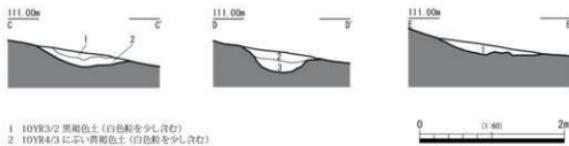
第5工程：埴丘の外表側に土手を巡らす（F-F'：8～22層、G-G'：9～17層）。この工程の盛土の下層には腐植土とみられる黒色土や黒褐色土が薄く筋状に堆積しており（F-F'：22層、G-G'：13層）、全体を腐植土で薄く覆った後、土手を盛ったと考えられる。



第54図 越敷山51号墳墳丘断面図①



第55図 越敷山51号填埋丘断面図②



第56図 越敷山51号墳周溝断面図

第6工程：土手の中心の窪みに土を充填する

(F-F': 1 ~ 7 層、G-G': 1 ~ 8 層)。

これら各工程で用いられた盛土については、地山を破砕した土（A類）、旧表土と見做せる黒色土と地山を破砕した土の混合土（B類）、旧表土とみられる黒色土や黒褐色土で地山ブロックがあまり含まれない土（C類）の3種類が用いられたようである。これらの分布状況をみると、A類は概ね土手の内部を充填する第4・6工程、B類は土手を形成する第3・5工程、C類は基盤となる第1工程や第5工程の下層で用いられており、使い分けられていた可能性がある。ただし、これら各類型の強度をみると、ばらつきがあり傾向をつかむことができないため、強度を増すなど構造上の効果を狙ったというよりも、視覚的な要因によって使い分けられたと思われる。なお、この硬度の状況をみると、盛土下層にあたる第1・2工程と上層の第6工程では硬くなる傾向がみられ、第1工程では強固な基盤をつくるため、第6工程では土砂の流出を防ぐために固めたと考えられる。

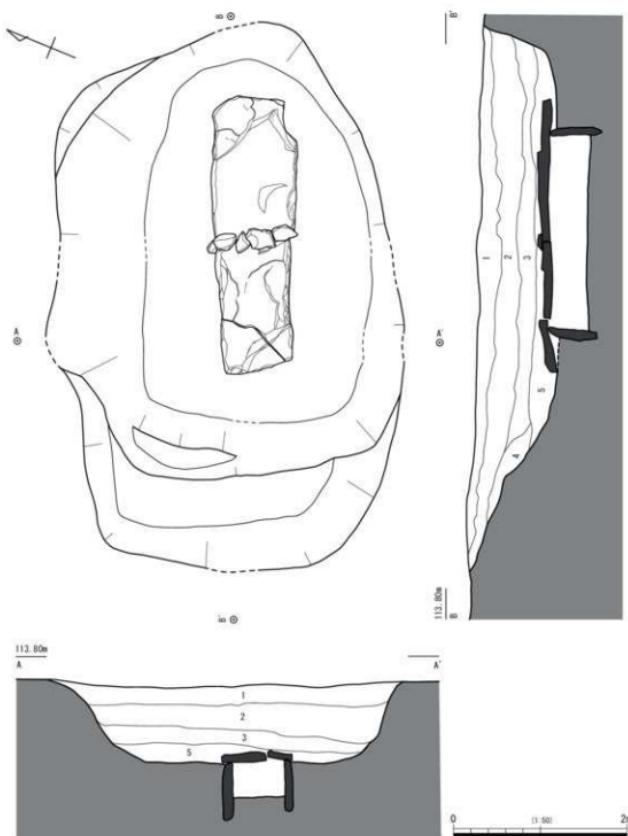
## 埋葬施設 1

前述したとおり、埋葬施設1は構築墓壙であり、追葬が行われている。

追葬は墳頂部から土坑を掘り込んで行われている。この土坑は、平面形は歪な隅丸方形を呈し、規模は長軸6.30m、短軸5.40m、深さ0.80mを測る。西側の壁面は緩やかに傾斜しており、中間に段がある。

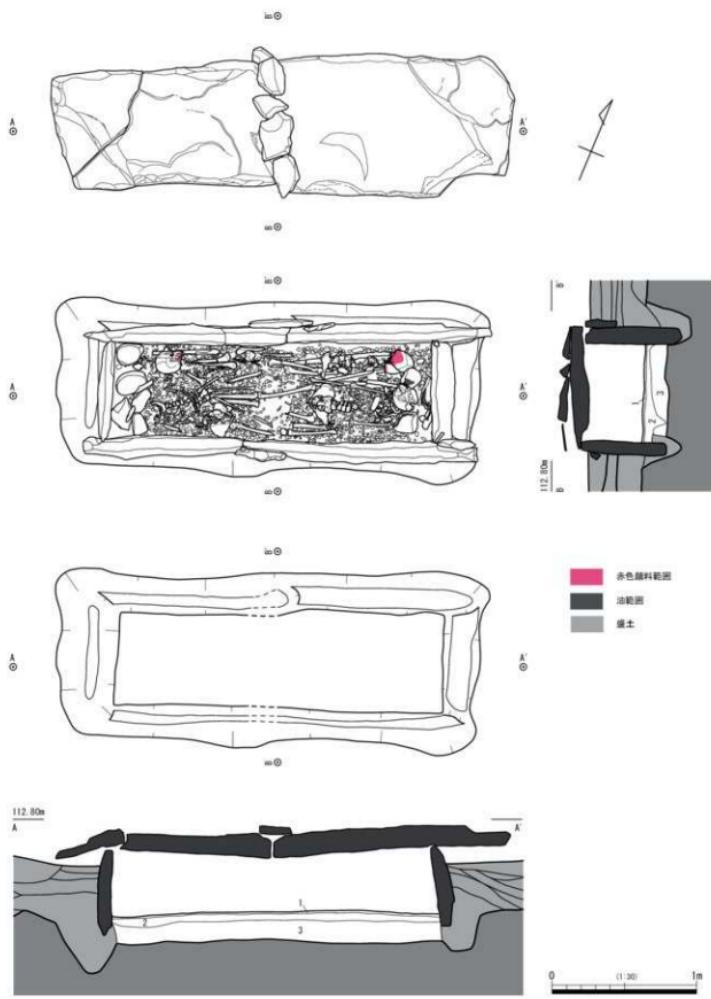
第2表 越敷山51号墳丘盛土針貫入強度

剖位	工程	理土	硬度計測値 (N)				平均 (N)
			380	150	150	150	
1	6	A	380	150	150	150	204
2	6	A	140	200	130	160	162
3	6	A	330	220	160	200	236
4	6	A	150	180	260	160	190
9	5	B	70	100	140	140	118
10	5	C	80	170	140	120	126
11	5	B	120	200	140	170	154
12	5	B	150	270	130	130	160
14	5	B	140	130	140	120	138
15	5	B	160	150	150	150	148
18	4	A	80	120	100	100	106
21	4	A	150	250	90	160	160
24	4	A	100	160	200	60	120
33	3	A	320	120	120	80	150
34	3	A	260	140	200	120	180
34	3	A	150	160	200	160	166
36	3	B	170	100	150	120	159
40	3	B	240	340	160	200	244
41	3	B	220	200	220	130	180
42	3	C	140	170	250	200	178
43	3	B	140	170	190	220	186
46	3	B	180	120	190	150	152
49	3	B	180	120	220	140	162
51	3	B	110	80	130	140	126
52	3	B	260	200	160	250	206
53	3	B	70	150	100	50	70
73	2	B	380	140	160	170	228
81	1	B	150	140	140	150	130
82	1	B	200	380	420	410	376
85	1	C	460	430	250	350	350
86	1	C	350	430	350	200	330
87	1	C	230	270	350	240	270
		旧表土	180	220	160	160	184
		旧表土	230	260	400	380	331



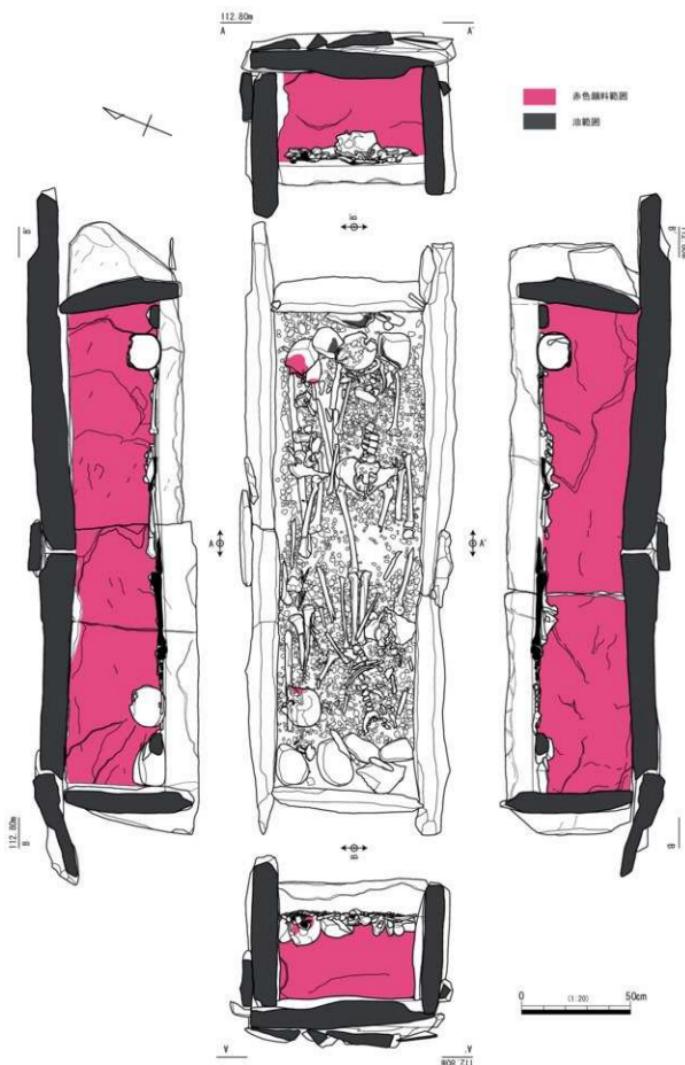
- 1 7.5YR6/8 粉色土 (しまりやや良、白色粒を多く、ブロックを少し含む)
- 2 7.5YR5/2 明褐色土 (しまりやや良、白色粒を多く、ブロックを少し、炭を僅かに含む)
- 3 7.5YR5/2 明褐色土 (しまりやや良、白色粒を多く、ブロック、炭を少し含む)
- 4 10YR6/6 明褐色土 (しまりやや良、白色粒を含む)
- 5 7.5YR5/4 にじい褐色土 (しまりやや良、白色粒を多く含む)

第57図 越敷山51号墳埋葬施設1追葬時掘り方

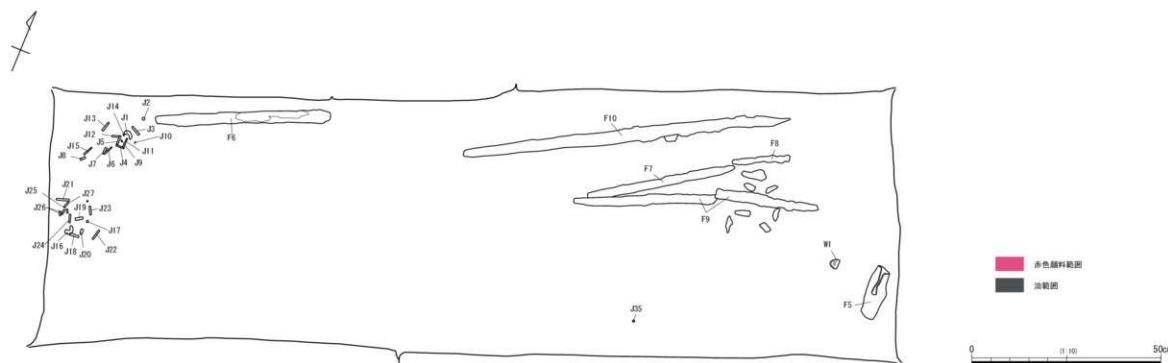
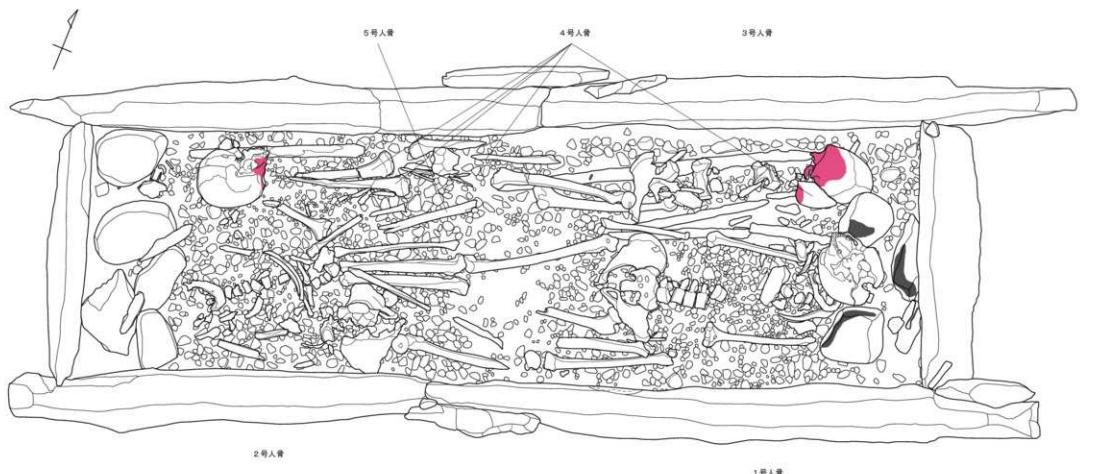


- 1 0.5~3cmの亜角~円形の縫(枯木)
- 2 10YR6/8明赤褐色砂(しまり不良)
- 3 7.5YR4/6明赤褐色土(しまり良、粘性有)

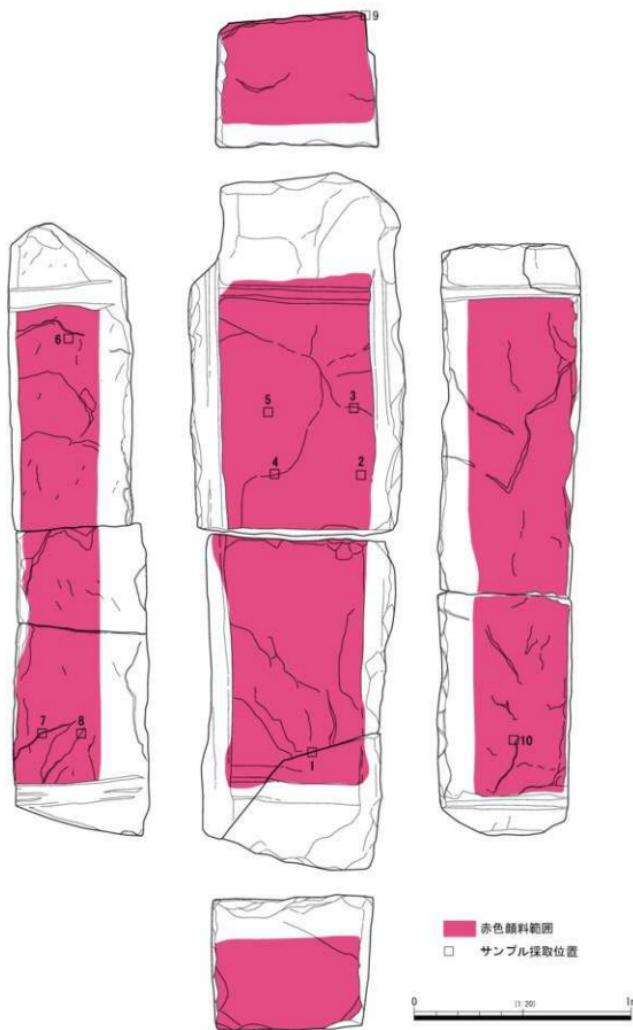
第58図 越敷山51号埴埋葬施設 ①



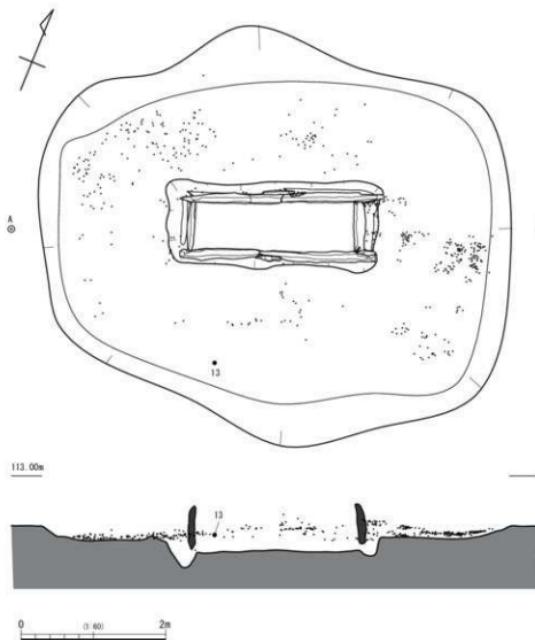
第59図 越敷山51号埋葬施設1②



第60図 越敷山51号墳埋葬施設1石棺内人骨・遺物出土状況



第61図 越敷山51号埴埋葬施設1石棺石材施溝状況



第62図 越敷山51号墳埋葬施設1石棺調整剥片散乱状況

埋土は地山を破碎した土であり、表土ブロックなどを含まない均質なものである。このため、掘削時の土をそのまま埋め戻したとは考えにくく、新たに地山を掘削した土を埋めた可能性がある。埋土中から遺物は出土しなかった。

追葬の土坑掘削後、箱式石棺を確認した。石棺の規模は長軸2.52m、短軸0.67m、深さ0.45mを測る。主軸の方向はE-22°-Nであり、東西方向を向く。棺内には人骨が5体埋葬されており、鉄刀、鉄剣、鉄鋸、鉄斧、玉類、堅櫛が副葬されていた。

蓋石は2枚からなり、石の縦ぎ目には10~30cmほどの石棺の石材と同じ縫合部が5つ並べられる。なお、越敷山49号墳でみられたような目張りの粘土は認められない。蓋石に用いられた石は長方形を呈する板石であり、端部は加工が施され、特に蓋石同士の縦ぎ目については平坦になるよう丁寧に仕上げられている。規模は、東側が長さ1.67m、幅0.98m、厚さ0.15m、西側が長さ1.53m、幅0.88m、厚さ0.17mを測る。石材は長側石や短側石と同様、調査地周辺の山に含まれる岩を使用したとみられる（第4章第1節参照）。内面には長側石と短側石との設置部分に浅い溝が彫り込まれる。この浅い溝の内側、

すなわち棺内にあたる部分には赤色顔料が塗布されている。この顔料は一部溝にかかり、溝の外側にもみられることから、蓋を閉める前にはすでに塗布されていたと考えられる。なお、赤色顔料の成分はベンガラである（第4章第1節参照）。

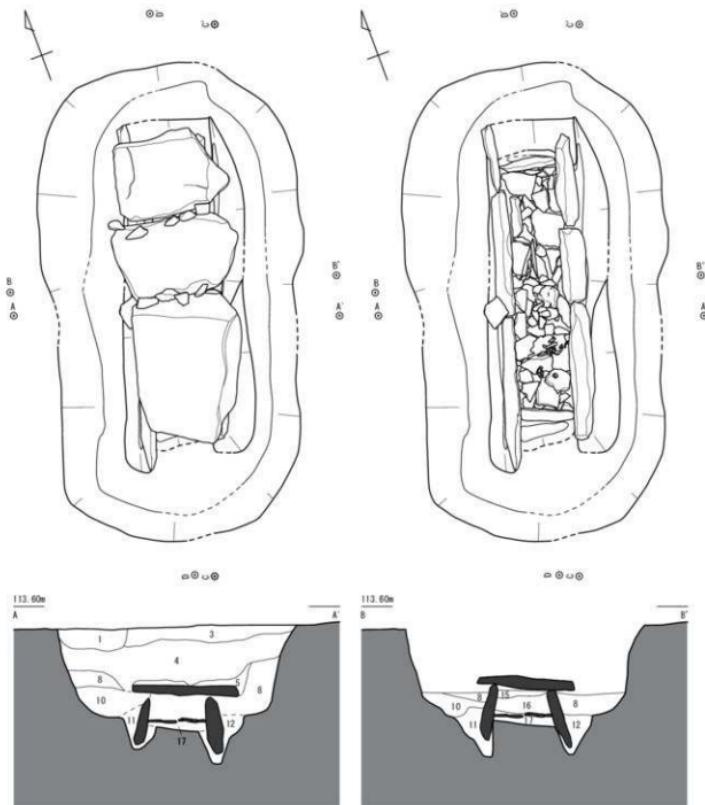
石棺の構造は、短側石を長側石で挟みこむようにして組まれており、「H」字形をなす。長側石は左右ともに2枚の板石を用い、平継ぎによって並べられ、石の継ぎ目には板石が配置される。長側石は概ね長方形を呈する板石を使用しており、端部を丁寧に加工する。とりわけ蓋石との接地面は丁寧に仕上げられ、平坦にしている。また、短側石との接地面には浅い溝が彫り込まれている。板石の規模は幅1.10～1.65m、高さ0.50～0.60m、厚さ0.09～0.13mである。短側石は、端部を丁寧に加工した方形をなす板石を用いており、その規模は幅0.70m、高さ0.56～0.60m、厚さ0.09～0.12mを測る。長側石、短側石とともに内側には赤色顔料が塗布されている。なお、長側石の溝の外側、短側石の左右の端部、棺床よりも下方にあたる部分には赤色顔料の付着が認められないことから、石材を組み合わせた後に塗布されたと考えられる。

石棺の棺床には明黄褐色を呈する砂の上に玉砂利を敷く。東西の端には石枕が3組配置される。石枕は東側と南西隅にあるものは3つの石で構成され、残りの北西側は2つの石からなる。石材は概ね河原石であるが、東側と南西隅の中央にあるものについては、石棺と同様の石材を使用している。

棺の掘り方は、墳丘の下で検出した。2段に掘り込まれており、上段は長軸6.50m、短軸5.80m、深さ0.20mの歪な隅丸方形を呈する。周囲には石棺の石材を調整した際に生じた剥片が散乱する。この中央には長軸2.92m、短軸1.19m、深さ23cmの長方形を呈する掘り方があり、その底面には石を設置する際の溝が掘り込まれる。底面には20cmほど土が盛られ、石棺を組んだ後、砂、玉砂利を敷き棺床としている。

棺内には5体の人骨が埋葬されていた。これらの人骨は、棺内に雨水が多量に入り込んだ状況が認められることから、埋葬の最終段階の状況をよく残していると思われる。なお、人骨の取り上げは、鳥取大学医学部井上貴央教授に依頼して行った。

1号人骨は南東側にあり、ほぼ完全な状態で残る。元位置を保っているとみられることから、最後に埋葬された人物と考えられる。頭蓋骨は顔面を西側に向けた状態で置かれているが、天地が逆であり、若干動いた形跡がある。また、顔面には赤色顔料が塗布され、側頭部分には陥没骨折が治癒した様子が認められる。性別は男性であり、年齢は熟年である。身長は162cmが想定される。頭部の下には3石からなる石枕が配置されており、その表面には脂が付着する。2号人骨は南西側にあり、1号人骨と対置する。1号人骨と同様、ほぼ完全な状態で残る。下肢骨が長側石側に動かされており、1号人骨の埋葬時に移動されたものとみられる。石枕の上には下顎骨しか認められず、頭蓋骨は北側に移動している。顔面には赤色顔料が塗布されている。性別は男性であり、年齢は熟年である。3号人骨は北東隅にあり、4号人骨と重複する。人体の正常な位置があまり保たれていないことから、腿が残った状態で動かされたとみられる。1号人骨などの埋葬時に移動された可能性がある。1号人骨や2号人骨と同様、顔面には赤色顔料が塗布される。頭蓋骨の下に石枕はない。性別は女性であり、年齢は壮年後半から熟年とみられる。4号人骨は北東側にあり、3号人骨とほぼ重複する。頭蓋骨の一部と下肢骨のみしか認められない。性別は男性の可能性があり、年齢は不明である。5号人骨は北西側にある。大腿骨しか認められず、年齢、性別など詳細は不明であるが、骨の状況から小児の可能性が高い。さて、これらの埋葬順序であるが、5号人骨については情報が乏しく不明であるが、位置関係や骨の残り具

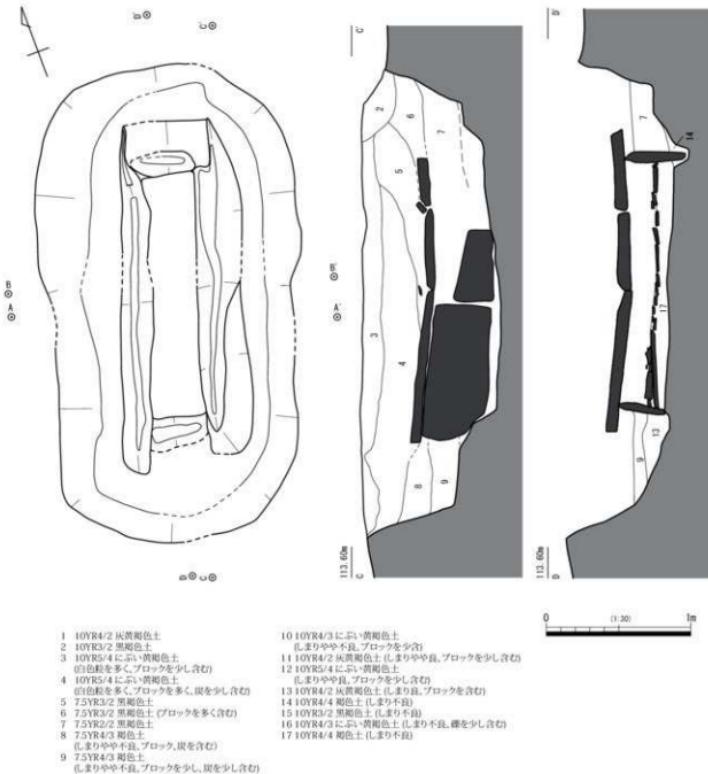


第63図 越敷山51号墳埋葬施設2①

合から判断すると、4号人骨→3号人骨→2号人骨→1号人骨の順に埋葬されたとみられる。

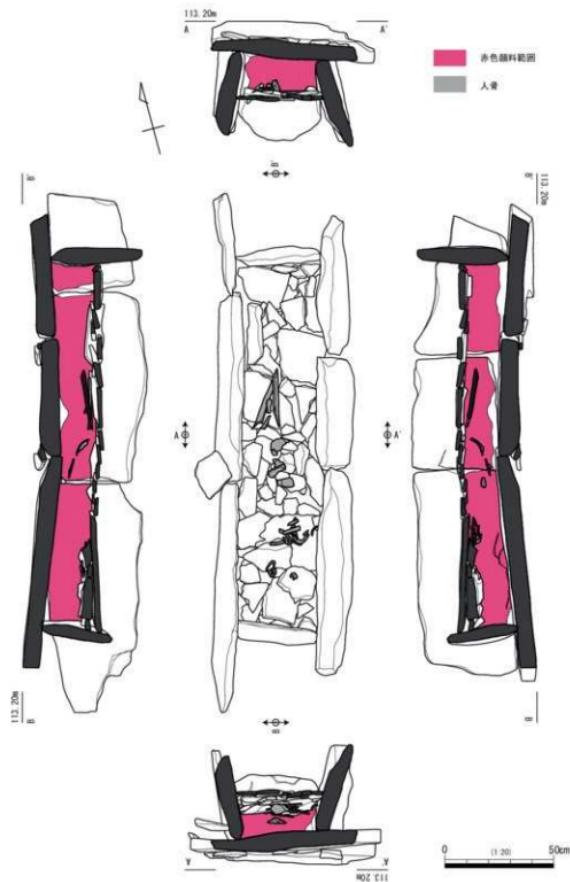
ところで、1号人骨や2号人骨、3号人骨に塗布された赤色顔料は、分析結果から水銀朱であり、棺内に使用されたものとは異なっている。このため、人骨と棺内とで塗布する顔料の種類を使い分けているとみられる。人骨の鑑定結果や顔料の分析結果の詳細は第4章に掲載しているのでそちらを参照されたい。

副葬品は前述のとおり、鉄刀、鉄剣、鉄鉢、鉄斧、玉類、堅櫛が出土した。F5は鉄斧であり、棺



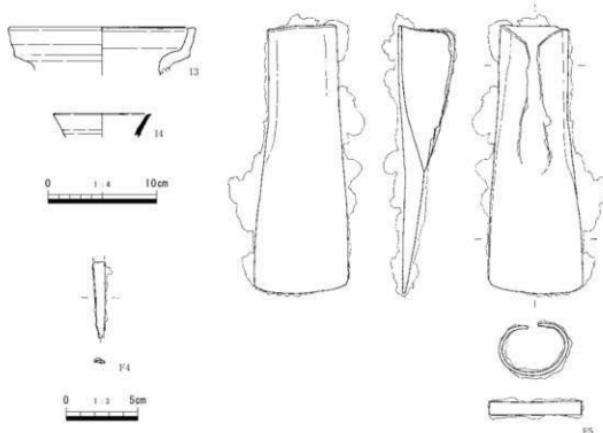
第64図 越敷山51号墳埋葬施設2(②)

の南東隅にあり、1号人骨のすぐ東側にある。刃部を南側に向いている。F6は鉄剣であり、棺の西側にあり、刃先を中央に向ける。F7は鉄剣、F8は鉄鉾、F9・10は鉄刀であり、棺の北東側にまとめられている。これらはすべて刃先を中央に向けて配置される。なお、鉄鉾は刃先を中央に向いていることから、柄が装着されていなかったとみられる。これらは3号人骨の下にあることから、1号人骨に伴うとは考えにくい。W1は堅櫛であり、漆膜部分がかろうじて残る。1号人骨の頭蓋骨の下から出土しており、これに伴う可能性が高い。J35は白玉であり、1号人骨の左の上肢骨付近にある。



第65図 越敷山51号墳埋葬施設2③

J1~15、J16~27は勾玉、ガラス玉、管玉であり、J1~15は棺の北西隅にある石枕付近、J16~27はその石枕の下からまとまった状態で出土した。



第66図 越敷山51号墳出土遺物①

第66図 土器観察表

遺物 番号	遺構名	層位	器種	口径(cm)	脚高(cm)	底径(cm)	施文・調整	色・渾	備考
13	埴丘盛土	底面	壺	Φ16.8	△4.5	—	内外面：ナデ	明黄色	土師器
14	埴丘	表土	壺	Φ 9.1	△2.2	—	内外面：ヨコナデ	灰色	須志器

第66図 鉄器観察表

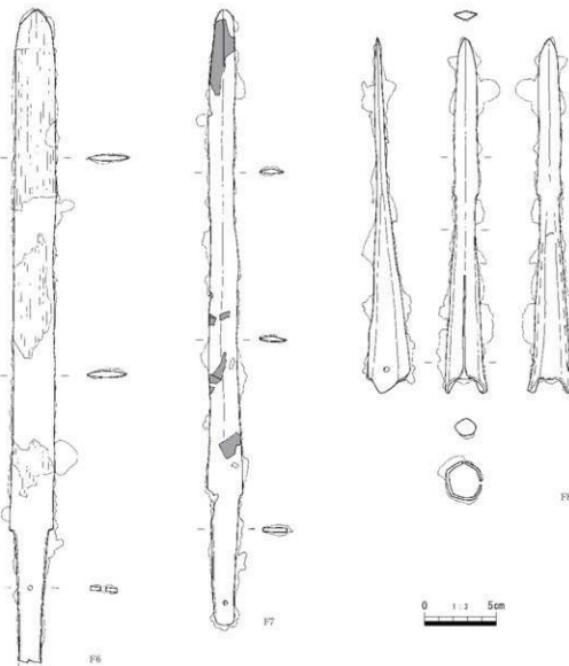
遺物 番号	遺構名	層位	器種	法量(cm・g)	備考
F4	埋葬施設1	棺床	棒状鐵器	最大長：△5.3、最大幅：0.8、最大厚：0.2、重量：△26	
F5	埋葬施設1	棺床	鉢形	最大長：18.5、最大幅：6.5、最大厚：1.4、重量：776	

## 埋葬施設2

埋葬施設2は箱式石棺であり、墳丘の北西側に位置する。墳頂部から掘り込んで構築している。蓋掘は受けとおらず、ほぼ完全な状態で検出した。石棺の規模は、長軸1.69m、短軸0.4m、深さ0.25mを測る。主軸の方向はN-14°と南北方向を向き、埋葬施設1の主軸と異なる。棺床には板石が敷かれており、東側には石枕とみられる板石が配置される。そこから人骨1体を確認した。副葬品は出土しなかった。

蓋石は3枚からなり、頭が置かれる南側は、長軸1.10m、短軸0.72m、厚さ0.08mの長方形を呈する大型の板石を用い、そのほかは長軸0.75~0.85m、短軸0.52~0.54m、厚さ0.08mの小型の板石を使用する。この上には10cm前後の石によって蓋石の縫ぎ目を覆う。

棺の構造は、短側石を長側石で挟みこむようにして組まれており、「H」字形をなす。長側石は左右ともに3枚の板石を用い、平縫ぎによって並べられる。長側石に用いられた板石は、南西側の2枚と南東側の1枚は幅0.83~1.05m、高さ0.39~0.44m、厚さ0.08mと大型であるのに対し、ほかは幅0.42



第67図 越敷山51号墳出土遺物②

## 第67・68図 鉄器

遺物番号	遺物名	層位	器種	法量 (cm × g)	備考
F6	埋葬施設	棺床	鉄劍	最大長：450、最大幅：33、最大厚：0.4、重量：2439	木質着、刃斜孔有
F7	埋葬施設	棺床	鉄劍	最大長：423、最大幅：25、最大厚：0.4、重量：3669	布付着、刃斜孔有
F8	埋葬施設	棺床	鉄矛	最大長：244、最大幅：29、最大厚：29、重量：1377	身部彫造、有闊、槍部五角形、両側面に刃斜孔有
F9	埋葬施設	棺床	鉄刀	最大長：△635、最大幅：29、最大厚：0.5、重量：△2298	木質・布付着
F10	埋葬施設	棺床	鉄刀	最大長：851、最大幅：35、最大厚：0.8、重量：7450	布・糸巻き付着

～0.63m、高さ0.35～0.40m、厚さ0.08mと小型である。短側石については幅0.37～0.40m、高さ0.35～0.41m、厚さ0.08mを測る。長側石、短側石とともに蓋石との設置面は平坦に加工されているが、床側については加工の痕跡が認められない。長側石と短側石の内側には赤色顔料が塗布される。敷石は2～3cmほどの板石を敷いており、南側の隅では板石をさらに5枚のせ、一段高くし、石枕状にしている。

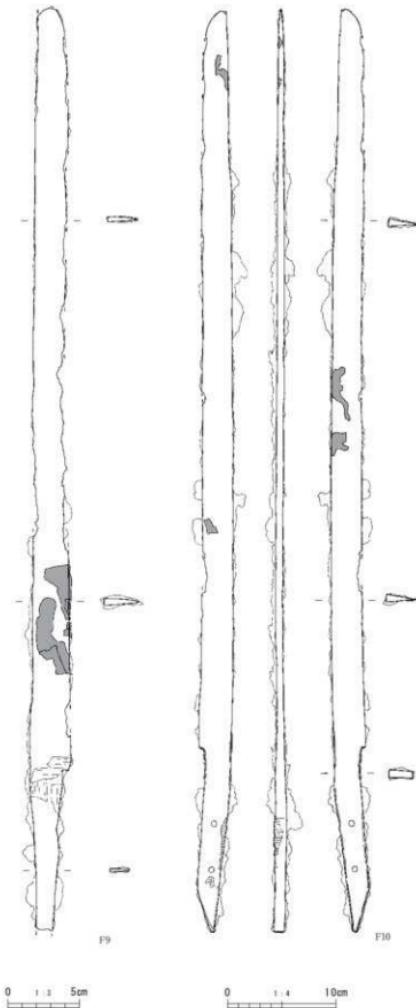
棺の掘り方は、隅丸長方形を呈し、規模は長軸3.30m、短軸1.70m、深さ0.70mを測る。底面には石棺を設置するための溝が掘り込まれる。底面には6cmほど土を盛り、その上に板石を置き棺床とする。

棺内には1体の人骨が埋葬されていた。人骨は頭蓋骨から下肢骨が断片的に認められる程度であり、残りが悪い。南側に頭を置いたと考えられるが、頭蓋骨や肩甲骨が腹部付近で認められ、動かされている可能性がある。

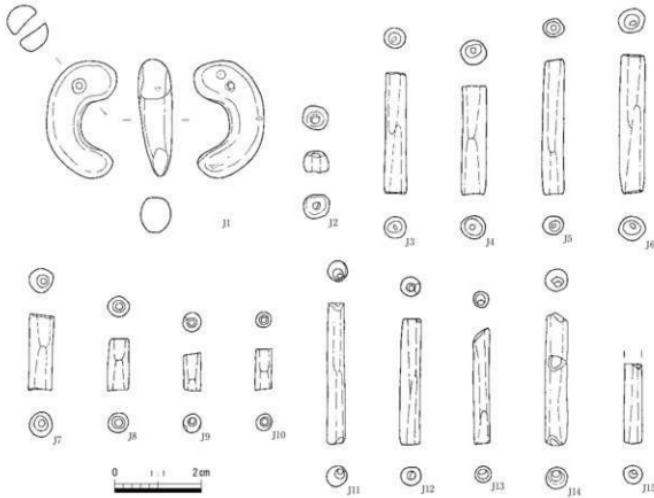
#### 出土遺物

副葬品は埋葬施設1から鉄刀、鉄剣、鉄鉢、鉄斧、玉類、堅櫛などが出土した。出土状況については先に述べたとおりである。

F4は棒状鉄器であり、片方の端部が欠損する。F5は袋状鉄斧であり、袋部分の断面形は歪な円形となる。F6・7は鉄劍である。F6の刃部には、鞘の一部とみられる木質が付着し、F7には布の痕跡が残る。ともに目釘孔が認められる。F8は鉄鉢である。身部は鑄造りであり、袋部との境に間がみられる。袋部は断面形が五角形を呈し、両側面には目釘孔がある。F9・10は鉄刀であり、ともに刀身部に布の痕跡が残る。F9は茎胴部に木質が付着する。F10は茎胴部に糸巻きの痕跡が残り、目釘孔が2つ認められ、茎尻を斜めにカットする。J1・16は瑪瑙製の勾玉である。J2・17・28・31はガラス玉であり、J28・31はふるいがけによつて出土した。J3・10・18・20は碧玉製の管玉であり、両面穿孔による。



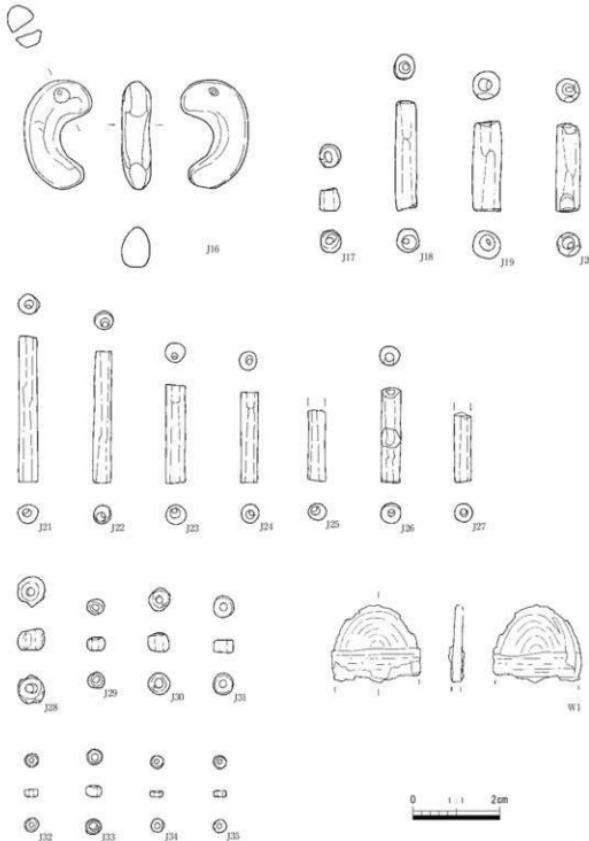
第68図 越敷山51号墳出土遺物③



第69図 越敷山51号墳出土遺物④

第69図 玉類観察表①

遺物番号	遺物名	基 底 部 様	法 様 (cm・g)	備 考
J1	埋葬施設	楕円	最大長：2.7、最大幅：1.6、最大厚：0.8、重量：38	瑪瑙、片面穿孔、穿孔に失敗した孔有
J2	埋葬施設	小玉	最大長：0.6、最大幅：0.6、最大厚：0.5、重量：0.2	ガラス、青緑色
J3	埋葬施設	楕円	管玉	最大長：2.6、最大幅：0.5、最大厚：0.3、重量：11
J4	埋葬施設	楕円	管玉	最大長：2.6、最大幅：0.6、最大厚：0.3、重量：10
J5	埋葬施設	楕円	管玉	最大長：3.1、最大幅：0.5、最大厚：0.4、重量：12
J6	埋葬施設	楕円	管玉	最大長：3.5、最大幅：0.6、最大厚：0.6、重量：16
J7	埋葬施設	楕円	管玉	最大長：1.8、最大幅：0.6、最大厚：0.3、重量：0.6
J8	埋葬施設	楕円	管玉	最大長：1.7、最大幅：0.5、最大厚：0.3、重量：0.4
J9	埋葬施設	楕円	管玉	最大長：0.8、最大幅：0.4、最大厚：0.4、重量：0.3
J10	埋葬施設	楕円	管玉	最大長：1.0、最大幅：0.4、最大厚：0.4、重量：0.2
J11	埋葬施設	楕円	管玉	最大長：1.3、最大幅：0.5、最大厚：0.3、重量：0.8
J12	埋葬施設	楕円	管玉	最大長：2.9、最大幅：0.5、最大厚：0.4、重量：0.9
J13	埋葬施設	楕円	管玉	最大長：2.7、最大幅：0.5、最大厚：0.4、重量：0.4
J14	埋葬施設	楕円	管玉	最大長：3.6、最大幅：0.5、最大厚：0.3、重量：0.8
J15	埋葬施設	楕円	管玉	最大長：△1.9、最大幅：0.4、最大厚：0.4、重量：△0.4
J16	埋葬施設	楕円	勾玉	最大長：△2.5、最大幅：1.6、最大厚：0.7、重量：3.2
J17	埋葬施設	楕円	小玉	最大長：0.5、最大幅：0.5、最大厚：0.5、重量：0.2
J18	埋葬施設	楕円	管玉	最大長：2.6、最大幅：0.5、最大厚：0.3、重量：1.0
J19	埋葬施設	楕円	管玉	最大長：2.1、最大幅：0.7、最大厚：0.7、重量：1.5
J20	埋葬施設	楕円	管玉	最大長：2.0、最大幅：0.6、最大厚：0.5、重量：0.8
J21	埋葬施設	楕円	管玉	最大長：3.6、最大幅：0.5、最大厚：0.4、重量：0.7
J22	埋葬施設	楕円	管玉	最大長：3.1、最大幅：0.6、最大厚：0.4、重量：0.7
J23	埋葬施設	楕円	管玉	最大長：2.3、最大幅：0.5、最大厚：0.4、重量：0.6
J24	埋葬施設	楕円	管玉	最大長：2.1、最大幅：0.4、最大厚：0.4、重量：0.5
J25	埋葬施設	楕円	管玉	最大長：△1.7、最大幅：0.4、最大厚：0.4、重量：△0.4



第70図 越敷山51号墳出土遺物⑤

第70図 玉類観察表②

遺物 番号	遺構名	部位	器種	法量(cm・g)	備考
J26	埋葬施設1	棺床	管玉	最大長: 2.2, 最大幅: 0.5, 最大厚: 0.5, 重量: 0.6	緑色凝灰岩
J27	埋葬施設1	棺床	管玉	最大長: 2.16, 最大幅: 0.4, 最大厚: 0.4, 重量: 0.3	緑色凝灰岩
J28	埋葬施設1	棺床	小玉	最大長: 0.7, 最大幅: 0.6, 最大厚: 0.5, 重量: 0.2	ガラス、青緑色、気泡が顯著に認められる
J29	埋葬施設1	棺床	小玉	最大長: 0.5, 最大幅: 0.4, 最大厚: 0.3, 重量: 0.1	ガラス、褐色
J30	埋葬施設1	棺床	小玉	最大長: 0.5, 最大幅: 0.5, 最大厚: 0.4, 重量: 0.2	ガラス、褐色
J31	埋葬施設1	棺床	小玉	最大長: 0.5, 最大幅: 0.4, 最大厚: 0.3, 重量: 0.1	ガラス、褐色、両端平鋒
J32	埋葬施設1	棺床	臼玉	最大長: 0.8, 最大幅: 0.3, 最大厚: 0.2, 重量: 0.13×Y	滑石
J33	埋葬施設1	棺床	臼玉	最大長: 0.4, 最大幅: 0.4, 最大厚: 0.3, 重量: 0.1	滑石

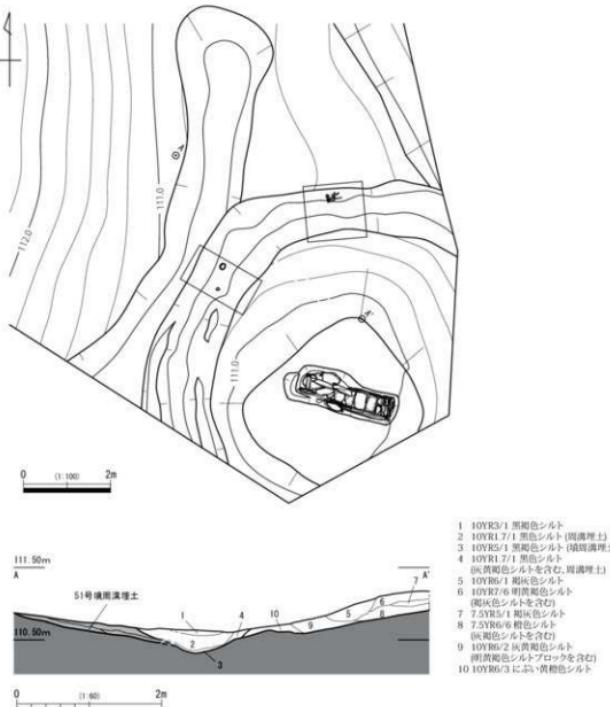
第3章 調査の成果

第70図 玉類觀察表③

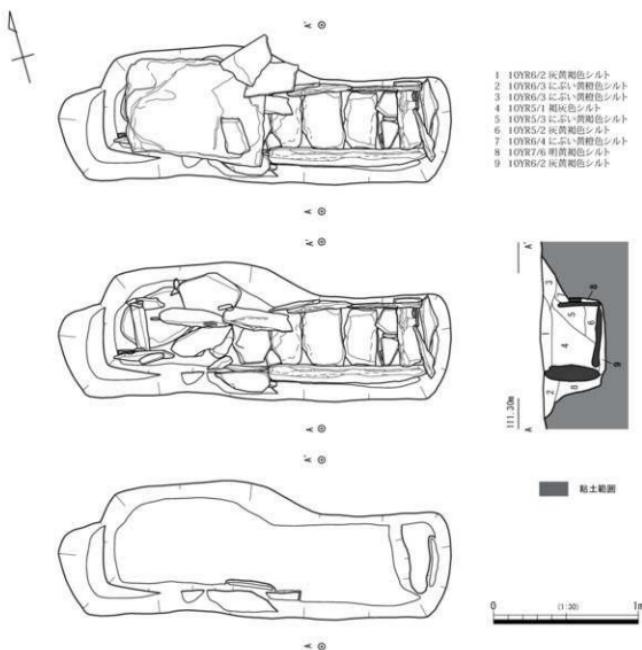
遺物 番号	遺構名	層 位	器 種	法量 (cm · g)	備 考
J34	埋葬施設1	棺床	白玉	最大長 : 0.3, 最大幅 : 0.3, 最大厚 : 0.1, 重量 : 0.1以下	滑石
J35	埋葬施設1	棺床	白玉	最大長 : 0.3, 最大幅 : 0.3, 最大厚 : 0.2, 重量 : 0.1以下	滑石

第70図 その他觀察表

遺物 番号	遺構名	層 位	器 種	法量 (cm · g)	備 考
W1	埋葬施設1	棺床	飾	最大長 : △19, 最大幅 : 20, 最大厚 : 0.4	



第71図 越敷山99号墳



第72図 越敷山99号墳埋葬施設①

このうちJ8~10は青灰色を呈し、他のものと異なる。J11~15・21~27は緑色凝灰岩製の管玉、J32~35は滑石性の白玉であり、このうちJ33~35はふるいがけによって出土した。W1は堅櫛である。

このほか、墳丘除去後の埋葬施設1の掘り方から、石棺の剥片とともに13、墳頂部の表土から14が出土した。13は土師器の甕、14は須恵器の甕である。時期は副葬品や出土遺物から古墳時代中期前葉から後葉頃と考えられる。

#### 越敷山99号墳（第71~74図、PL.35・46・47）

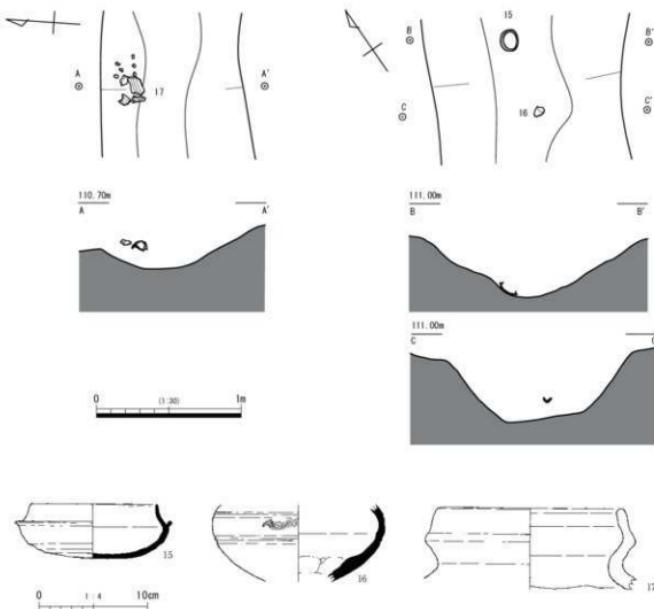
T73-10d-3G-2j・3jグリッドにある。調査区南東隅にあり、古墳の約1/3については、調査区外にあたるため、調査を行っていない。丘陵頂部の尾根上にあり、標高111m付近にある。北西側は越敷山51号墳と接しており、これを切る。また、西側には越敷山52号墳がある。



第73図 越敷山99号墳埋葬施設②

#### 墳丘・周溝

墳丘は周辺を削り出して墳形を整え、盛土をしたものであり、盛土の厚さは0.26mほどである。周



第74図 越敷山99号墳遺物出土状況・出土遺物

第74図 土器観察表

遺物番号	遺物名	基盤	器種	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	施文・測量	色調	備考
15	周溝	埋土	杯身	11.5	5.0	—	外面:ヨコナデ。ヘラケズリ、内面:ヨコナデ、ナデ	灰色	須恵器
16	周溝	埋土	蓋	—	△7.2	—	外面:ヨコナデ。波状文、内面:ヨコナデ	灰色	須恵器
17	周溝	埋土	身	#164	△7.4	—	外面:ナデ、内面:ナデ、ヘラケズリ	黄褐色	土師器

開には幅1.60m、深さ0.32mの周溝が巡る。平面形は円形であり、規模は周溝内側で直径7.10m以上、周溝を含めると8.00m以上を測る。墳丘の高さは、周溝底面から墳頂部までが1.03mを測る。

#### 埋葬施設

埋葬施設は箱式石棺であり、墳丘のやや南側に位置する。棺の規模は、長軸1.86m、短軸0.42m、深さ0.28mを測る。主軸の方向はW-15°-Nと東西方向を向く。蓋石は西側の1枚が残存するが、東側は抜き取られており確認できなかった。棺床には板石が敷かれており、東側には石枕が配置される。副葬品は出土しなかった。

棺の構造は、短側石を長側石で挟みこむようにして組まれており、「H」字形をなす。長側石は南

### 第3章 調査の成果

側が4枚、北側が5枚の板石を用い、平継ぎによって並べられる。石の継ぎ目には部分的に板石が配置される。長側石や短側石に用いられた板石は、南東側が長さ110cm、幅45cm、厚さ11cmと大型の石材を使用しているのに対して、他は厚さ3～5cmと薄い板材を用いている。長側石、短側石ともに蓋石との設置面は平坦に加工される。敷石は長方形の石材を横長に配置しており、長側石に挟まれるよう位に置かれるが、西側隅では、敷石の上に長側石や短側石がのる。

蓋石は、長さ95cm、幅58cm、厚さ8cmの長方形を呈する大型の板石を用いている。この上にはさらに別の板石が認められ、蓋石の境目を覆っていたものと考えられる。なお、蓋石を平坦に設置するため、蓋石下の長側石の周囲には、板石が置かれている。

棺の掘り方は、北西側がやや膨らむ歪な隅丸長方形を呈する。規模は長軸2.59m、短軸0.92m、深さ0.44mを測る。

### 出土遺物

遺物は周溝の埋土中から15～17が出土した。15は須恵器の杯身、16は須恵器の躰、17は土師器の甕である。時期は出土遺物から、古墳時代後期前半頃と考えられる。

## 第3節 古墳以外の調査

### SI1（第75・76図、PL.37・47）

T73-10d-3H-2aグリッドにある。ここは丘陵頂部の先端部にあたり、緩斜面となるが、北側約60cmからは斜面となる。越敷山77号墳の墳丘除去後に検出し、南側は周溝によって切られている。検出面は窪んでおり、古墳を構築する直前まで窪地であったとみられる。

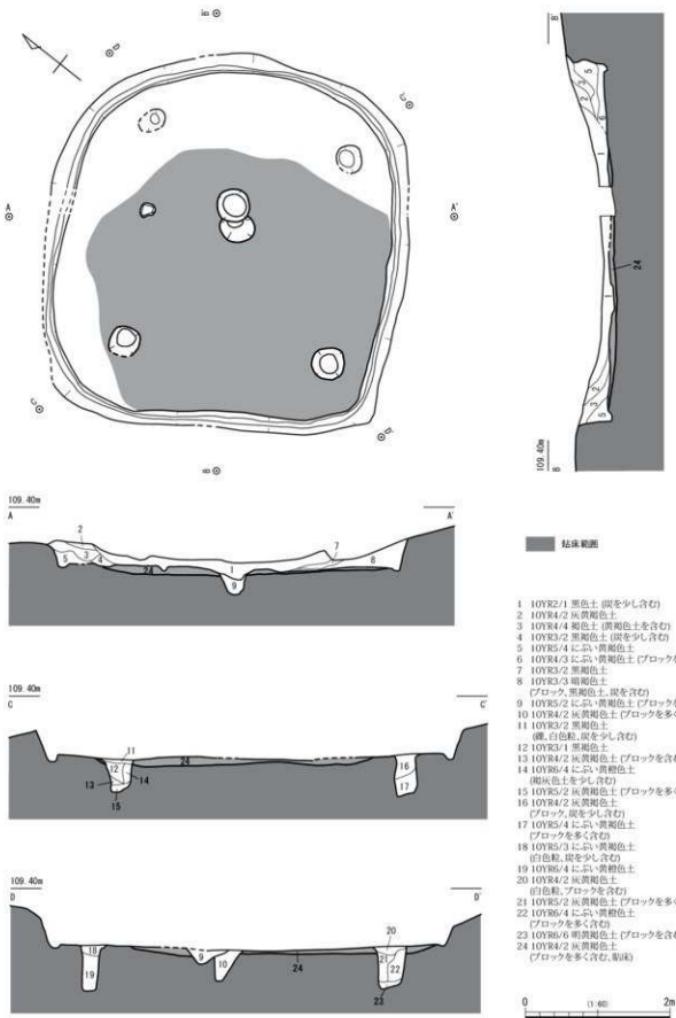
平面形は東側が張り出す歪な隅丸方形を呈し、規模は長軸5.15m、短軸5.00m、深さ0.35mを測る。床面にはビットが6基あり、このうち、P1～4は柱穴、P5・6は中央ビットと考えられる。P1～4の平面形は円形を呈し、規模はP1が直径37cm、深さ64cm、P2が直径38cm、深さ55cm、P3が直径44cm、深さ57cm、P4が直径43cm、深さ45cmを測る。このうちP3・4では、断面においてそれぞれ直径13cm、17cmの柱痕跡が認められる。柱間の距離は、P1から時計回りに2.74m、2.86m、2.85m、3.07mと斜面下方にあたるP1とP4の間がやや広くなる。

P5・6は中央やや東側にあり、P5がP6を切る。平面形は円形を呈し、規模はP5が直径45cm、深さ18cm、P6が直径49cm、深さ43cmを測る。床面の南西側において貼床が認められ、その厚さは最大で12cmある。壁際には幅15cm、深さ10cmの壁溝が巡る。

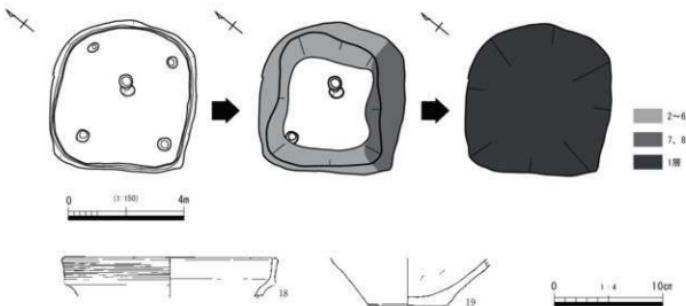
埋土は1～8層を確認し、平面や断面の観察から、8層から1層の順に堆積したと思われる。これらの層の広がりについては、7・8層が南側の壁際、2～6層がその他他の壁際において認められ、この堅穴建物は、斜面上方にあたる南側の壁際から堆積が始



写真10 SI1 1層除去状況



第75回 SI1



第76図 SI1埋没状況模式図・出土遺物

第76図 土器観察表

番号	遺物名	層	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	施文・彫刻	色	備考
18	SI1	秋田面	壺	φ19.5	△37	—	外面：ナデ。縦凹線文、内面：ナデ	明黄褐色	弥生土器、保付着
19	SI1	株出面	壺	—	△44	—	外面：ナデ、内面：ハラケズリ	棕色	弥生土器、黒斑有

まり、次に他の壁際、そして中心と埋まっていったと考えられる。なお、中央付近において埋土が15cm程度の厚さしかなかったことから、堆積速度は比較的ゆっくりとしたものであったと思われる。

遺物は埋土中から弥生土器、床面から作業台が出土し、このうち18・19を図示した。18は壺、19は壺の底部である。時期は弥生時代後期中葉から後葉頃と考えられる。

#### SI2 (第77~79図、PL.38・47)

T73-10d-2H-9cグリッドにあり、越敷山49号墳の埴丘除去後に検出した。ここは丘陵頂部先端の緩斜面にあたり、北側の斜面下方にはSI1がある。

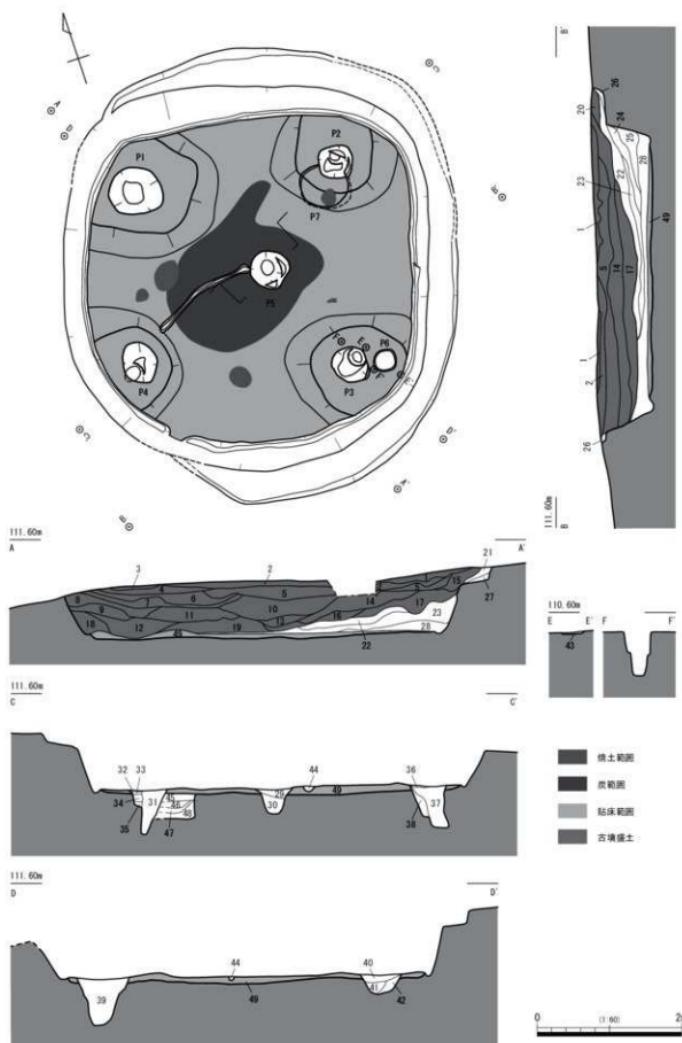
平面形はやや胴の張る隅丸方形を呈し、掘り方上部には、西側を除き幅56cm、深さ20cmの段が認め



写真11 SI2検出状況



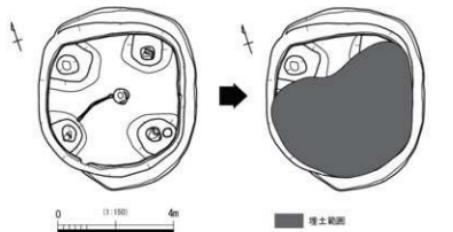
写真12 SI2床面検出状況



第77図 S12(1)

### 第3章 調査の成果

- |                               |                                |
|-------------------------------|--------------------------------|
| 1 7.5YR3/1 黒褐色土               | 19 10YR3/3 にぶい黄褐色土(ブロックを多く含む)  |
| 2 10YR5/2 黄褐色土                | 20 10YR5/2 黄褐色土(ブロックを含む)       |
| 3 10YR4/2 黄褐色土                | 21 10YR3/2 黑褐色土                |
| 4 10YR3/3 にぶい黄褐色土(ブロックを少し含む)  | 22 10YR3/2 黄褐色土(ブロックを少し含む)     |
| 5 10YR3/3 にぶい黄褐色土(ブロックを含む)    | 23 10YR2/1 黑褐色土(しまり青、ブロッキを複数)  |
| 6 10YR3/2 黄褐色土(ブロックを多く含む)     | 24 10YR4/2 黄褐色土(ブロックを多く含む)     |
| 7 10YR4/2 黄褐色土(ブロックを少し含む)     | 25 10YR2/1 黑褐色土                |
| 8 10YR3/2 黄褐色土(ブロックを少し含む)     | 26 10YR3/2 黄褐色土(土を僅かに含む)       |
| 9 10YR3/2 黄褐色土(ブロックを多く含む)     | 27 10YR4/2 黄褐色土(白色點、ブロックを少し含む) |
| 10 10YR3/2 黄褐色土(ブロックを多く含む)    | 28 10YR3/2 黄褐色土(ブロックを多く含む)     |
| 11 10YR3/3 にぶい黄褐色土(ブロックを多く含む) | 29 10YR4/2 黄褐色土                |
| 12 10YR3/3 にぶい黄褐色土(ブロックを多く含む) | 30 10YR3/3 黄褐色土(ブロックを多く含む)     |
| 13 10YR3/3 にぶい黄褐色土(ブロックを多く含む) | 31 10YR3/3 にぶい黄褐色土(ブロックを多く含む)  |
| 14 10YR3/3 にぶい黄褐色土(ブロックを多く含む) | 32 10YR3/3 にぶい黄褐色土             |
| 15 10YR4/2 黄褐色土(炭を僅かに含む)      | 33 7.5YR6/8 棕褐色土(白色點を含む)       |
| 16 10YR4/2 黄褐色土(炭を多く含む)       | 34 10YR3/3 にぶい黄褐色土(ブロックを少し含む)  |
| 17 10YR4/2 黄褐色土(ブロックを少し含む)    | 35 10YR3/3 にぶい黄褐色土(ブロックを多く含む)  |
| 18 10YR4/2 黄褐色土(ブロックを含む)      | 36 10YR3/3 にぶい黄褐色土(ブロックを含む)    |
|                               | 37 10YR3/2 黄褐色土(ブロックを多く含む)     |



第78図 SI2②・埋没状況模式図

られる。規模は、段を含め長軸6.30m、短軸5.40m、深さ0.80mを測る。床面には貼床が貼られており、そこでピット6基を確認した。このうちP1~4は柱穴、P5は中央ピットであり、P6についてはP3に近接する直径34cm、深さ3cmの浅いピットである。P1~4の平面形は歪な円形を呈し、規模はP1が直径75cm、深さ63cm、P2が直径51cm、深さ61cm、P3が直径52cm、深さ57cm、P4が直径61cm、深さ56cmを測る。柱間の距離はP1から時計回りに2.81m、2.74m、3.10m、2.46mとなる。これらの周辺には貼床が厚く盛られており、若干高くなる。P5は平面形が円形を呈し、規模は直径55cm、深さ34cmを測り、

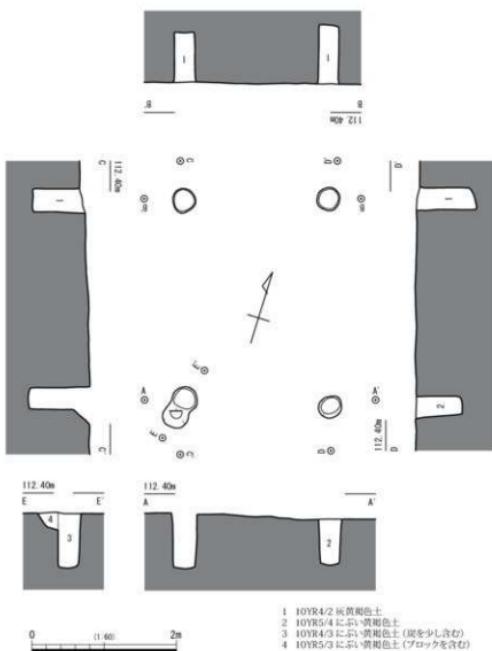
西側には幅7cm、深さ6cmの溝がP4へのびる。その周囲には炭が広がっており、炭の周りには焼土面が5ヶ所認められる。なお、貼床除去後には、建て替え前のものとみられるP7を確認した。P7は平面形が歪な円形を呈し、規模は直径63cm、深さ32cmを測る。

第79図 SI2出土遺物

埋土は1~20層が越敷山49号墳の築造に伴う造成土と見做

### 第79図 土器観察表

遺物番号	遺構名	層位	部種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	施文・測量	色調	備考
20	SI2	壁土面	甕	—	△19	—	外面：ナデ、沈羅文、内面：ナデ	褐色	生土器



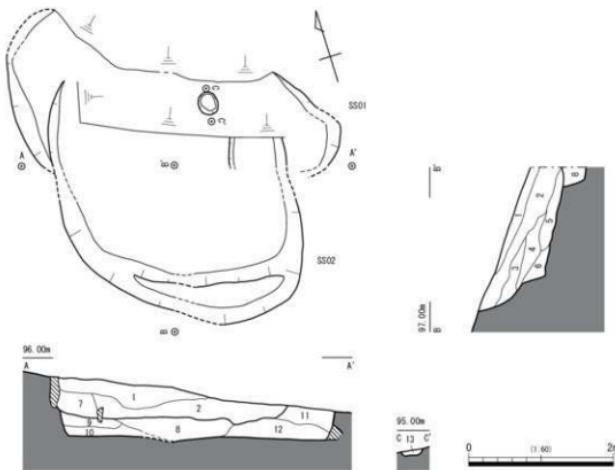
第80図 SB1

せることから、SIIと同様、古墳を構築する直前まで窪地であったとみられる。それ以外の21~28については、南側を中心に堆積しており、北側ではほとんど認められないとから、SIIは斜面上方にあたる南側から徐々に埋没したものと考えられる。なお、越敷山49号墳の築造直前において床面全体に埋土が堆積していなかった状況を考えると、SIIと同様、堆積速度はかなりゆっくりとしたものであつたと思われる。

遺物は埋土中から僅かに土器片が出土し、このうち20を図化した。20は壺の口縁部の一部であり、弥生時代後期頃の特徴を示す。時期は出土遺物や遺構の形状、埋土の堆積状況などを考えると、SIIと時期差はあまりなかったものと思われる。

#### SB1 (第80図、PL.39)

T73-10d-3H-2aグリッドにある。越敷山51号墳の墳丘除去後に検出した。周辺にはSK27・28がある。



- 1 10YR6/2 黄褐色シルト  
にぶい黄褐色シルトブロックを含む  
2 10YR6/2 黄褐色シルト  
3 10YR5/1 黄褐色シルト  
4 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト  
5 10YR5/1 黄褐色シルト (明黄褐色シルトブロックを含む)  
6 10YR5/6 黄褐色シルト  
7 10YR4/2 黄褐色シルト (にぶい黄褐色シルトを含む)  
8 10YR5/2 淡黄褐色シルト (明黄褐色シルトブロックを含む)  
9 10YR3/3 明黄褐色シルト  
10 10YR5/2 黄褐色シルト (にぶい黄褐色シルトを含む)  
11 10YR6/2 黄褐色シルト  
12 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト (明黄褐色シルトブロックを含む)  
13 10YR5/2 黒褐色シルト

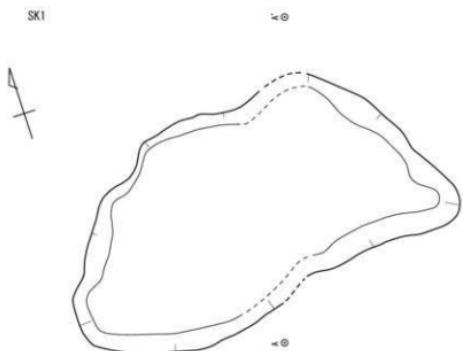
第81図 SS1・2

1間×1間の掘立柱建物であり、柱間距離はP1から時計回りに2.00m、2.86m、1.99m、2.77mを測る。柱の掘り方は概ね円形を呈するが、P4については南側に段があり、「8」の字形を呈する。これらの規模については、P1が直径34cm、深さ68cm、P2が直径31cm、深さ82cm、P3が直径33cm、深さ52cm、P4が長軸60cm、短軸33cm、深さ75cmである。埋土中から遺物は出土しなかった。時期は越敷山51号墳との関係から、古墳時代中期以前と考えられる。

## SS1 (第81図、PL.39)

T73-10d-2H-1eグリッドにある。ここは南西から北東へと下る斜面上にあたる。SS2によって切られており、南側の一部は壊されている。また、北側は搅乱によって失われている。平面形は歪な梢円形を呈しており、規模は長軸4.6m、短軸1.6m以上、深さ0.30mを測る。底面は南側へと傾斜しており、南北の高低差は30cmある。底面の北側では直径25cm、深さ7cmのピットを1基確認した。遺物は埋土中から出土しておらず、時期は不明である。

SK1



K'

= ⊖

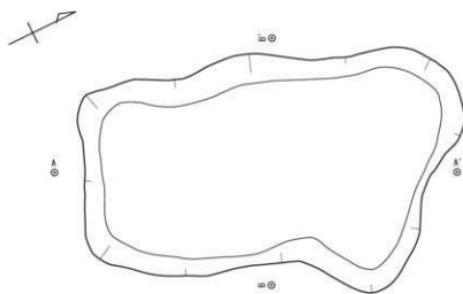
K'

壁

112.0m

1 IOYR5/1 黒灰色シルト

SK2



in ⊖

= ⊖

K'

壁

110.5m

110.6m

A

K'

1 IOYR2/1 黒色シルト  
2 IOYR3/1 黑褐色シルト  
3 IOYR2/1 黑色シルト

0 (1:40) 1m

第82図 SK1・2

**SS2 (第81図、PL.39)**

T73-10d-2H-7a・bグリッドにある。SS1と重複しており、これを切る。南側はSS1と同様、搅乱によって失われている。平面形は南西側が張り出した歪な円形を呈し、規模は長軸3.24m、短軸2.44m以上、深さ0.66mを測る。底面は、東西方向はほぼ平坦であるが、南側へ傾斜しており、南北の高低差は20cmある。また、底面の北東隅において幅80cmの溝状の掘り込みが認められる。遺物は埋土中から出土しておらず、時期は不明である。

**SK1 (第82図、PL.40)**

T73-10d-2H-10bグリッドにあり、越敷山49号墳の墳頂部で検出した。平面形は歪な方形または橢円形を呈し、規模は長軸3.42m、短軸1.94m、深さ0.13mを測る。底面には凹凸が認められ歪である。埋土中から遺物は出土しなかった。時期は越敷山49号墳との関係から、古墳時代中期後半以降と考えられる。

**SK2 (第82図、PL.40)**

T73-10d-2H-10a・3H-1aグリッドにある。越敷山49号墳・51号墳の周溝と重複しており、これらを切る。平面形は歪な隅丸方形を呈しており、規模は長軸3.22m、短軸1.92m、深さ0.15mを測る。底面は概ね平坦だが一部で凹凸がみられる。埋土中から遺物は出土しなかった。時期は越敷山49号墳・51号墳との関係から古墳時代中期後半以降と考えられる。

**SK3 (第83図、PL.40)**

T73-10d-1H-9d・eグリッドにある。ここは丘陵尾根上にあたり、北から南へと下る緩斜面となる。すぐ東側にはSK4がある。平面形は円形を呈し、規模は長軸1.28m、短軸1.09m、深さ0.76mを測る。底面は平坦であり、その周囲には幅14cm、深さ2～5cmの溝が巡る。壁面は外傾しながら立ち上がり、断面形は逆台形をなす。埋土中から遺物は出土しなかった。

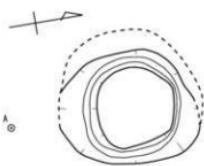
**SK4 (第83図、PL.40)**

T73-10d-1H-9dグリッドにあり、SK3と近接する。平面形は円形を呈し、規模は長軸1.32m、短軸1.00m以上、深さ0.79mを測る。底面は平坦であり、壁面はやや外傾しつつ立ち上がる。このため断面形は逆台形となる。埋土中から遺物は出土しておらず、時期は不明である。

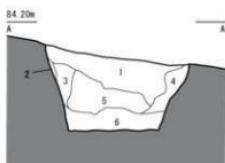
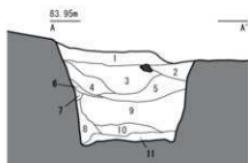
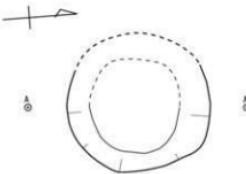
**SK5 (第83図、PL.40)**

T73-10d-2H-5bグリッドにあり、西側にはSK14、東側にはSK6がある。ここは南西から北西へと下る斜面であるが、後世において掘削がなされており、段状の地形となるため、遺構上面は削平を受けているとみられる。平面形は円形を呈し、規模は長軸0.61m、短軸0.60m、深さ0.68mを測る。底面は平坦であり、壁面は垂直に立ち上がるため、断面形は箱形を呈する。埋土中から遺物は出土しなかつた。このため時期は不明である。

SK3



SK4



- 1 7.5YR2/1 黒色織紋
- 2 7.5YR2/1 黑褐色織紋
- 3 7.5YR2/1 黄褐色織紋
- 4 10YR3/1 黑褐色織紋 (に、ない、黄褐色織紋が混じる)
- 5 10YR4/1 黑褐色織紋 (に、ない、黄褐色織紋が混じる)
- 6 10YR2/1 黑色織紋
- 7 10YR2/1 黑褐色織紋 (壁の崩落土)
- 8 10YR2/1 黑褐色織紋
- 9 10YR4/1 黑褐色織紋
- 10 7.5YR3/1 黑褐色織紋
- 11 7.5YR4/1 黄褐色織紋

- 1 10YR5/2 灰黄褐色織紋 (に、ない、黄褐色粘土を含む)
- 2 10YR4/3 黑褐色織紋
- 3 10YR4/3 黄褐色織紋
- 4 10YR4/2 黑褐色織紋
- 5 10YR4/2 灰黄褐色織紋 (に、ない、黄褐色粘土を含む)
- 6 10YR4/1 黄褐色織紋 (に、ない、黄褐色粘土を含む)

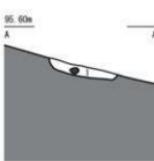
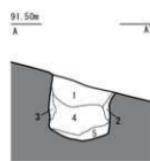
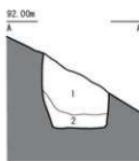
SK5



SK6



SK7



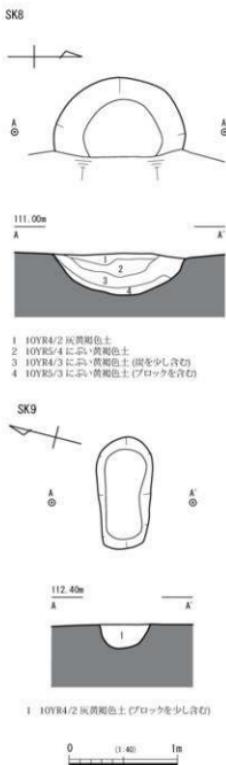
- 1 7.5YR2/2 黑褐色シルト (礫を多く含む)
- 2 7.5YR2/3 黄褐色シルト (に、ない、黄色シルトを含む)

- 1 10YR5/1 黑褐色粘土
- 2 10YR5/2 黄褐色シルト (黑褐色シルトを含む)
- 3 10YR5/4 に、ない、黄褐色粘土
- 4 10YR2/1 黑褐色粘土 (礫を多く含む)
- 5 10YR3/2 黑褐色粘土

- 1 10YR5/1 黑褐色粘土



第83図 SK3~7



第84図 SK8・9

測る。埋土中から遺物は出土しなかった。時期は越敷山51号墳との関係から、古墳時代中期以前と考えられる。

**SK10 (第85図、PL.41)**

T73-10d-2H-10bグリッドにあり、越敷山49号墳の墳丘除去後に検出した。周辺にはSI2、SK21～23があり、このうちSK23を切る。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸2.30m、短軸1.00m、深さ0.74mを測る。遺構上部には段が認められ、2段に掘り込まれている。底面は概ね平坦であるが、SK23と

**SK6 (第83図、PL.40)**

T73-10d-2H-5bグリッドにあり、周囲にはSK5・14がある。SK5・14と同様、遺構上部は削平を受けていると考えられる。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸0.70m、短軸0.57m、深さ0.60mを測る。底面は中央付近がやや窪み、皿状となる。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。埋土中から遺物は出土しなかった。このため時期は不明である。

**SK7 (第83図)**

T73-10d-2H-7aグリッドにあり、SSI・2の東側に接する。平面形は円形を呈し、規模は長軸0.63m、短軸0.60m、深さ0.10mを測る。底面は南から北へとやや傾斜しており、壁面は外傾して立ち上がる。断面形は皿状を呈する。埋土中から遺物は出土しなかった。このため時期は不明である。

**SK8 (第84図、PL.41)**

T73-10d-2H-10cグリッドにある。越敷山49号墳の築造に伴い削平を受けている。東側はSI2によって切られており、半分近くが失われている。平面形は円形を呈し、規模は直径1.22m、深さ0.38mを測る。底面は中心部にかけて窪み、壁面は外傾して立ち上がる。このため断面形は半円形をなす。埋土は4層を確認しているが、その色調が灰黄褐色、にぶい黄褐色となっており、周囲には黒色土が堆積していないかった状況がうかがわれる。遺物は埋土中から出土しなかった。時期はSI2との関係から弥生時代後期以前と考えられる。

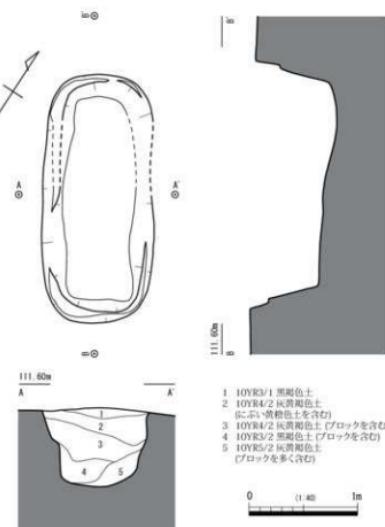
**SK9 (第80図、PL.41)**

T73-10d-2H-2aグリッドにある。越敷山51号墳の盛土除去後に検出した。平面形は東側が丸味をもつた隅丸長方形を呈し、規模は長軸1.04m、短軸0.47m、深さ0.22mを

重複する部分ではやや窪む。埋土は5層を確認し、このうち下層にあたる3~5層は、地山ブロックが含まれており、埋め戻されたか、盛られた土が落ち込んで堆積した可能性などが考えられる。遺物は埋土中から出土しなかった。時期は越敷山49号墳との関係から、古墳時代中期以前と考えられる。また、遺構の性格については、形状から土坑墓と考えられる。

#### SK11 (第86図、PL.41)

T73-10d-2H2eグリッドにあり、越敷山75号墳によって切られる。ここは丘陵の尾根にあたり、南から北へと下る斜面となる。SK12・13とはほぼ直線的に並び、SK12との距離は15.50mである。平面形は梢円形を呈し、規模は長軸1.05m、短軸0.80m、深さ1.18mを測る。底面は平坦となり、その中心部には長軸19cm、短軸15cm、深さ23cmの歪な円形を呈するピットがある。壁面はやや外傾しながら立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。埋土中から遺物は出土しなかった。その形状から落とし穴と考えられ、時期は縄文時代頃と思われる。



第85図 SK10

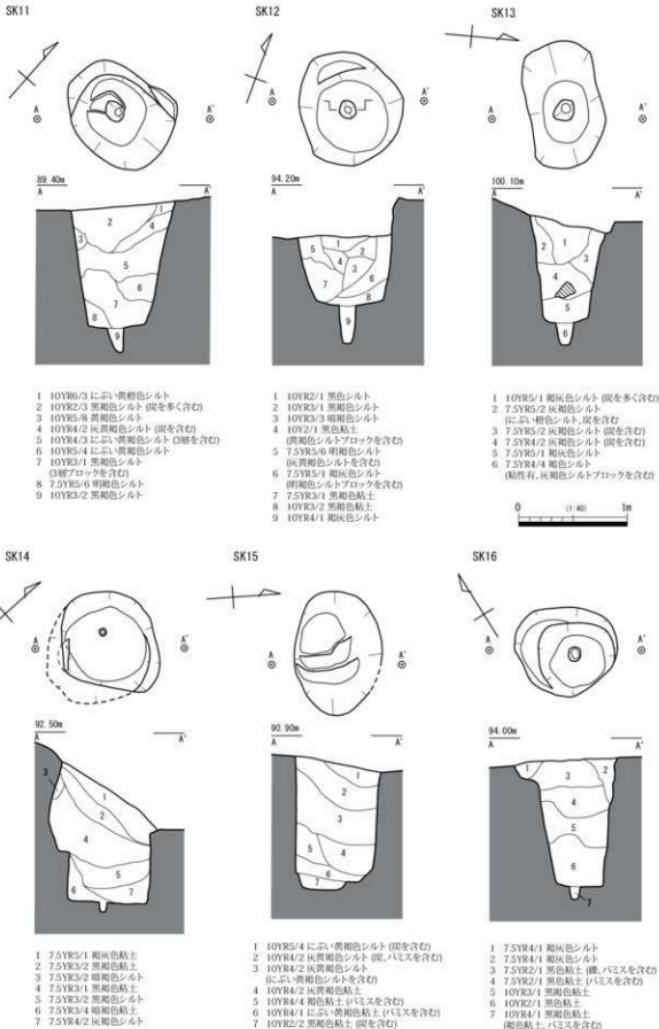
#### SK12 (第86図、PL.41)

T73-10d-2H-3eグリッドにあり、越敷山98号墳の埋葬施設によって切られる。SK11・13とはほぼ直線的に並び、SK11との距離は15.5m、SK13との距離は18.5mである。平面形は円形を呈し、規模は長軸1.04m、短軸0.96m、深さ0.84mを測る。底面は概ね平坦であり、その中心には直径16cm、深さ25cmの円形のピットがある。壁面はやや外傾して立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。埋土中から遺物は出土しなかった。その形状から縄文時代頃の落とし穴と考えられる。

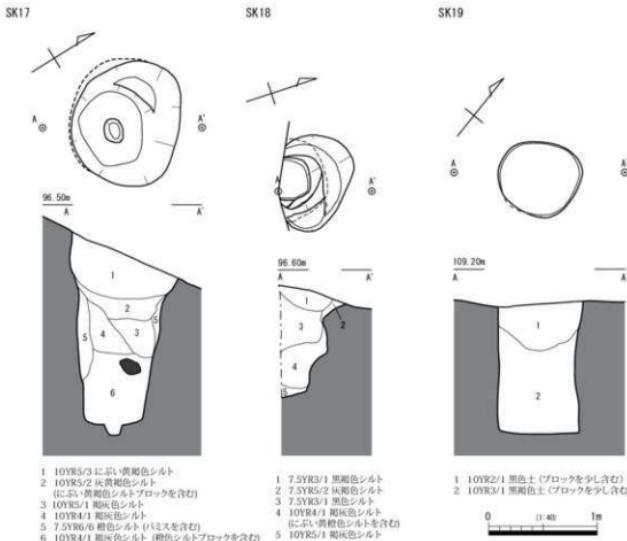
#### SK13 (第86図、PL.42)

T73-10d-2H-5dグリッドにあり、越敷山123号墳の埋葬施設によって切られる。SK11・12とはほぼ直線的に並び、SK12との距離は18.5mである。平面形は歪な隅丸長方形を呈し、規模は長軸1.16m、短軸0.69m、深さ0.99mを測る。底面は概ね平坦であり、その中心には長軸22cm、短軸17cm、深さ19cmの歪な円形を呈するピットがある。壁面はやや外傾して立ち上がり、断面形は逆台形をなす。埋土中から遺物は出土しなかった。その形状から縄文時代頃の落とし穴と考えられる。

### 第3章 調査の成果



第86図 SK11~16



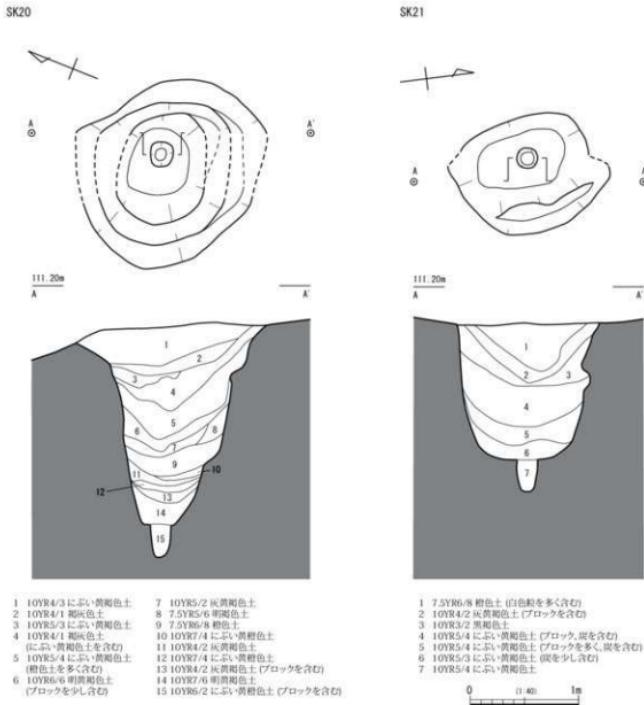
第87図 SK17～19

## SK14 (第86図、PL.42)

T73-10d-2H-5bグリッドにある。南西から北東へと下る斜面にあり、後世の掘削によって周縁は削平されている。東側はSK5と接する。平面形は円形を呈し、規模は長軸0.98m、短軸0.88m、深さ1.31mを測る。底面は平坦であり、その中心には直径8cm、深さ8cmの円形のピットがある。壁面は垂直に立ち上がるが、南側の上部は抉られており、崩落したものと考えられる。断面形は概ね箱形を呈する。埋土中から遺物は出土しなかった。その形状から縄文時代頃の落とし穴と考えられる。

## SK15 (第86図、PL.42)

T73-10d-2H-5aグリッドにある。南西から北東へと下る斜面にある。9m西側にはSK6、13m南側にはSK16がある。平面形は梢円形を呈し、規模は長軸1.14m、短軸0.81m、深さ1.22mを測る。底面は西側にかけて段状に落ち込む。壁面は垂直に立ち上がり、断面形は概ね箱形を呈する。埋土中から遺物は出土しなかった。縄文時代頃の落とし穴と考えられる。



第88図 SK20・21

## SK16 (第86図、PL.42)

T73-10d-2H-7aグリッドにある。南西から北東へと下る斜面にあり、周囲にはSS1・2、SK7・17・18がある。平面形は梢円形を呈し、規模は長軸0.95m、短軸0.83m、深さ1.18mを測る。底面は平坦であり、その中心には直径12cm、深さ12cmの円形のピットがある。壁面はやや外傾して立ち上がり、北西側の上部には段がある。断面形は概ね逆台形を呈する。埋土中から遺物は出土しなかった。その形状から繩文時代頃の落とし穴と考えられる。

**SK17 (第87図、PL.42)**

T73-10d-2H-7aグリッドにある。南西から北東へと下る斜面にあり、周囲にはSS1・2、SK7・16・18がある。平面形は円形を呈し、規模は長軸1.15m、短軸0.98m、深さ1.77mを測る。底面は平坦であり、その中心には長軸22cm、短軸16cm、深さ10cmの歪な円形を呈するピットがある。壁面はやや外傾して立ち上がり、上部は「ハ」の字形にやや広がり、断面形は概ね逆台形を呈する。埋土中から遺物は出土しなかった。その形状から縄文時代頃の落とし穴と考えられる。

**SK18 (第87図、PL.42)**

T73-10d-2H-7aグリッドにある。南側半分は調査区外にある。南西から北東へと下る斜面にあり、周囲にはSS1・2、SK7・16・17がある。平面形は円形を呈し、規模は長軸0.88m、短軸0.62m以上、深さ1.03mを測る。底面は平坦であるが、南側に向かってやや傾斜する。壁面は垂直に立ち上がるが、中程が崩落によって抉れており、上部は外側に広がっている。埋土中から遺物は出土しなかった。縄文時代頃の落とし穴と考えられる。

**SK19 (第87図、PL.43)**

T73-10d-2H-9cグリッドにある。南東から北西へと下る斜面にあり、越敷山77号墳の周溝によって切られる。東側にはSI1が近接する。平面形は円形を呈し、規模は直径0.78m、深さ1.18mを測る。底面は平坦であり、ピットは認められない。壁面は垂直に立ち上がり、断面形は箱形を呈する。埋土中から遺物は出土しなかった。縄文時代頃の落とし穴と考えられる。

**SK20 (第88図、PL.43)**

T73-10d-2H-9b・10bグリッドにある。越敷山49号墳の墳丘除去後に検出した。周囲にはSI2、SK21~23があり、このうちSK21~23と直線的に並ぶ。SK21との距離は4mである。平面形は歪な円形を呈し、規模は直径1.76m、深さ1.82mを測る。底面は中心にかけて僅かに窪んでおり、その中央に直径22cm、深さ30cmの隅丸方形を呈するピットがある。壁面は外傾して立ち上がり、上部で「ハ」の字形に広がる。断面形はすり鉢状を呈する。埋土中から遺物は出土しなかった。その形状から縄文時代頃の落とし穴と考えられる。

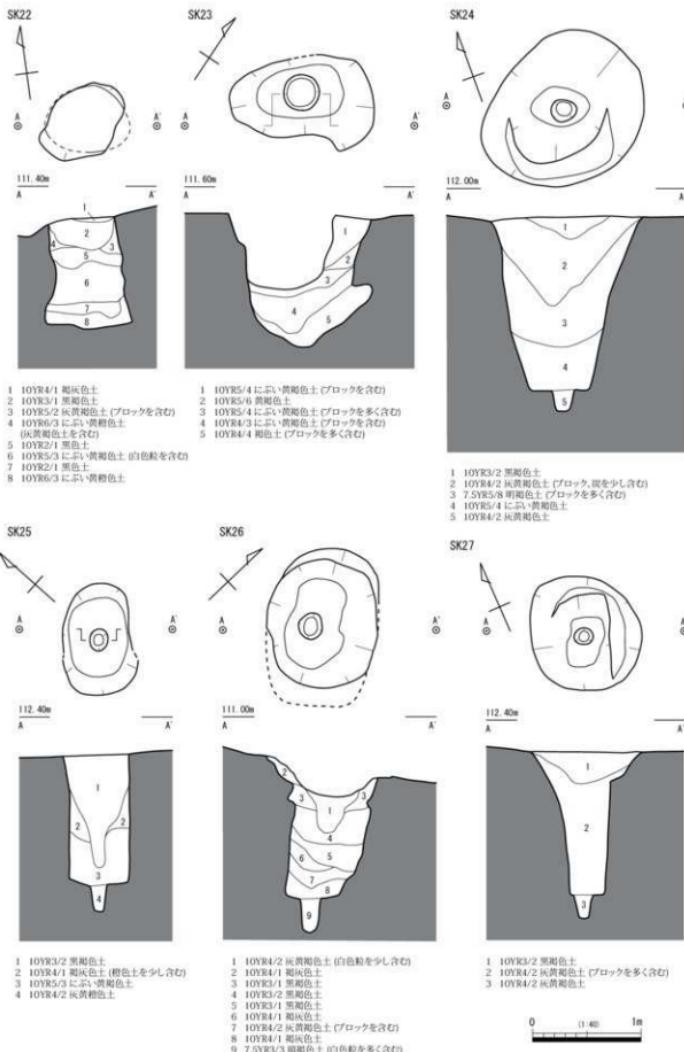
**SK21 (第88図、PL.43)**

T73-10d-2H-10bグリッドにある。越敷山49号墳の墳丘除去後に検出した。西側はSI2によって切られる。SK20・22・23と直線的に並んでおり、SK20との距離は4m、SK22との距離は3mである。平面形は歪な円形を呈し、規模は長軸1.12m、短軸0.70m、深さ1.22mを測る。底面は平坦であり、中央に直径18cm、深さ30cmの円形のピットがある。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、断面形は箱形を呈する。埋土中から遺物は出土しなかった。その形状から縄文時代頃の落とし穴と考えられる。

**SK22 (第89図、PL.43)**

T73-10d-2H-10bグリッドにある。越敷山49号墳の墳丘除去後に検出した。SK20・21・23と直線的に並んでおり、SK21との距離は3m、SK23との距離は2.50mである。平面形は歪な楕円形を呈し、

第3章 調査の成果



第89図 SK22~27

規模は長軸0.86m、短軸0.62m、深さ1.00mを測る。底面は概ね平坦であるが、中心部がやや窪む。壁面はやや内傾して立ち上がり、断面形は台形を呈する。埋土中から遺物は出土しなかった。縄文時代頃の落とし穴と考えられる。

#### SK23（第89図、PL.43）

T73-10d-2H-9b・10bグリッドにある。越敷山49号墳の墳丘除去後に検出した。西側はSK10によって切られる。SK21～23と直線的に並んでおり、SK22との距離は2.5mである。平面形は歪な楕円形を呈し、規模は長軸1.32m、短軸0.74m、深さ1.16mを測る。底面は窪み、中央に直径34cm、深さ8cmの浅いピットがある。壁面は底面付近が抉られるが、やや外傾して立ち上がる。埋土中から遺物は出土しなかった。縄文時代頃の落とし穴と考えられる。

#### SK24（第89図、PL.43）

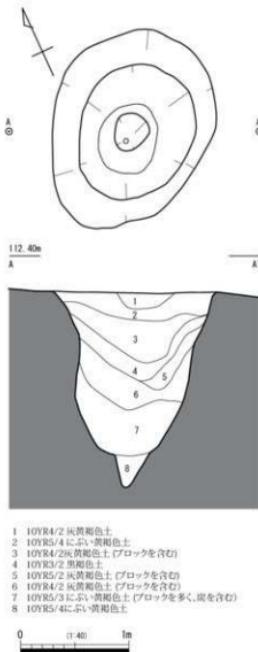
T73-10d-3H-1a・2aグリッドにある。越敷山51号墳の墳丘除去後に検出した。周囲にはSK25・26があり、直線的に並ぶ。SK25との距離は7.5m、SK26との距離は5.5mである。平面形は歪な円形を呈し、規模は直径1.42m、深さ1.60mを測る。底面は平坦であり、中央に直径10cm、深さ10cmの円形のピットがある。壁面は外傾して立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。埋土中から遺物は出土しなかった。その形状から縄文時代頃の落とし穴と考えられる。

#### SK25（第89図、PL.44）

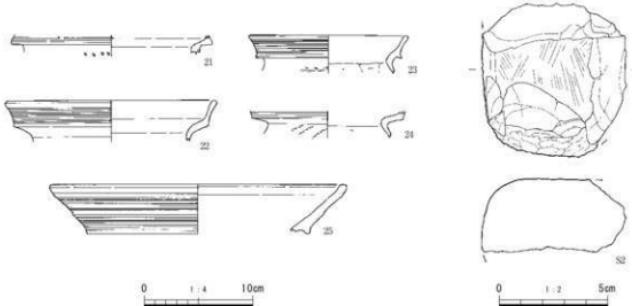
T73-10d-3H-1a・2aグリッドにある。越敷山51号墳の墳丘除去後に検出した。SK24・26と直線的に並び、SK24との距離は7.5mである。平面形は歪な楕円形を呈し、規模は直軸1.02m、短軸0.62m、深さ1.20mを測る。底面は平坦であり、中央に直径16cm、深さ24cmの円形のピットがある。壁面は垂直に立ち上がり、断面形は箱形を呈する。埋土中から遺物は出土しなかった。その形状から縄文時代頃の落とし穴と考えられる。

#### SK26（第89図、PL.44）

T73-10d-3G-1jグリッドにあり、越敷山51号墳の周溝によって切られる。SK24・25と直線的に並んでおり、SK25との距離は5.5mである。平面形は楕円形を呈し、規模は直軸1.28m、短軸1.00m、深



第90図 SK28



第91図 遺構に伴わない遺物

第91図 土器觀察表

遺物 番号	組合 番号	層	底	部種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	記述・調整	色	調	備考
21	2H-10b	盛土	更	—	△20	—	—	外面：ナデ、縦織文。剥り付突帯、内面：ナデ	浅黄褐色	弥生土器	
22	2H-10b	盛土	更	■190	△39	—	—	外面：ナデ、縦凹織文、内面：ナデ	橙色	弥生土器	
23	3H-2b	表土	更	■142	△36	—	—	外面：ナデ、縦凹織文、波状文、内面：ナデ、ヘラケ ズリ	明黄褐色	弥生土器	
24	2H-10b	盛土	更	—	△24	—	—	外面：ナデ、沈没文、目割による剥き文、内面：ナデ、 ヘラケズリ	橙色	弥生土器	
25	3H-3a	田表土	器台	■263	△46	—	—	外面：横凹織文、内面：不明	黄褐色	弥生土器	

第91図 石器觀察表

遺物 番号	組合 番号	層	底	部種	記量(cm <sup>2</sup> )	備考
S2	2H-10d	盛土	敲石	—	最大長：△70、最大幅：66、最大厚：△61、重量：△297	

さ12.4mを測る。底面は平坦であり、中央に直径22cm、深さ32cmの円形のピットがある。壁面は南西側が内傾し、北東側が外傾して立ち上がり、断面形は歪な箱形を呈する。埋土中から遺物は出土しなかった。その形状から縄文時代頃の落とし穴と考えられる。

## SK27（第89図、PL.44）

T73-10d-3H-2aグリッドにある。越敷山51号墳の墳丘除去後に検出した。周辺にはSB1、SK28がある。平面形は上部に段があり、段から上が歪な円形、段から下が長方形を呈する。規模は直径1.02m、深さ1.30mを測る。底面は平坦であり、中央に直径14cm、深さ22cmの円形のピットがある。壁面は東から北側が垂直に、西から南側が外傾して立ち上がり、断面形は歪な逆台形となる。埋土中から遺物は出土しなかった。その形状から縄文時代頃の落とし穴と考えられる。

## SK28（第90図、PL.44）

T73-10d-3H-2aグリッドにある。越敷山51号墳の墳丘除去後に検出した。周辺にはSB1、SK27が

ある。SK20～24と直線的に並んでおり、SK24との距離は8.5mである。平面形は正な円形を呈し、規模は直軸1.84m、短軸1.52m、深さ1.50mを測る。底面は窪んでおり、中央に直径28cm、深さ28cmの正な円形を呈するピットがある。壁面は崩落により抉れた部分もあるが、概ね外傾して立ち上がり、断面形はすり鉢状を呈する。埋土中から遺物は出土しなかった。その形状から縄文時代頃の落とし穴と考えられる。

#### 第4節 遺構に伴わない遺物

表土や墳丘盛土中から弥生土器片や石器が若干出土した。弥生土器は中期後葉頃のものを僅かに含むが、大半は弥生時代後期中葉から後葉頃のものであり、丘陵尾根の頂部で確認したSI1やSI2とはほぼ同じ時期に属する。

21～24は甕であり、21の頸部には刺突文を施した突帯がつき、24の肩部には二枚貝による刺突文がみられる。25は器台と考えられ、口径が26.3cmと大型である。S2は磨製石斧を敲石として転用したものとみられ、先端部に敲打の痕跡が認められる。